

修道

No. 71

題字は吉田學(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園(中・高)同窓会

〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241-8291 FAX(082)249-0870
TEL(082)241-6686(同窓会直通)
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp



2010年度 修道学園同窓会連合会、(中・高)同窓会合同幹事会・評議員会

目次

| | | |
|--|------|-------------------------------------|
| 同窓会ニュース | | 第10回全国シニア大会に出場して …林 孝治 …1568 |
| 平成22年度予算承認 …………… | 1518 | 人物往来 |
| 平成21年度決算を承認 …………… | 1520 | サッカーが光をくれた、…下村 幸男 …1570 |
| 支部だより | | 70年卒業組再び巣立ち ……………1571 |
| 関東支部総会報告 …………… | 1522 | 30年連続で金仏壇の製造販売日本一 三村 邦雄 …1571 |
| 江能修友会総会報告 ……胡子 雅信 … | 1523 | 広島修道大学学長に就任…市川 太一 …1571 |
| 修道医会総会報告 ……井内 康輝 … | 1524 | 広島ガス株式会社社長に就任 田村 興造 …1572 |
| 九州地区同窓会(九修会)の開催についての報告 …近藤 豊 … | 1526 | 広島市経済局長に就任 ……棚多 展義 …1572 |
| 同期会報告 | | ナイトクルージングで広島湾のぎわい創出 ……山本 一隆 …1572 |
| 昭和28年卒 修道高校五同期会の活動報告…中村 陽一 … | 1527 | 連合会ニュース |
| 修道12回生「卒業50周年記念大会(古橋を祝う会)の開催 ……増本 光雄 … | 1529 | 広島修道大学五十周年記念式典・祝賀会 |
| 卒業40周年記念「四十年目の(合同)卒業式」…松本 憲治 … | 1531 | 「広島修道大学五十年史・50年記念映像」等刊行…仲井 正美 …1573 |
| OB会報告 | | 広島修道大学大学院同窓大会報告…慶徳 忠良 …1575 |
| 修道高等学校書道班OB会 ……大成 浩二 … | 1532 | 学園だより |
| 「スクパン」のサマーコンサートで感じたこと …水口 直也 … | 1533 | 名誉学園長に浅野長孝氏が就任されました ……………1576 |
| 特別寄稿 | | 修道中学校・修道高等学校285年祭(文化祭)ご案内 ……………1576 |
| 「十軒日記」(明治二十年：修道学校の経営を引き継いでの日々)を読む ……畠 眞實 … | 1535 | 見よや修道魂を ……………1577 |
| 「修道新聞」にみる戦後1948～1949の修道高等学校 仲井 正美 … | 1561 | 事務局だより |
| ロイヤル(0-70)サッカー東西対抗戦に参加して林 孝治 … | 1566 | 同窓会名簿の販売について ……………1578 |
| | | 同窓会名簿の訂正について ……………1578 |
| | | 訃報 |
| | | 訃報記事 ……………1578 |

平成22年度予算承認

平成22年3月29日
 修道学園同窓会連合会、修道学園(中・高)同窓会
 合同幹事会及び評議員会記録

日時：平成22年3月29日(月) 18:30~19:00
 場所：ホテルプロバンス21広島 2階 ニース
 出席者

(幹事・監査)

| | | |
|-------|-------|-------|
| 大下 龍介 | 大田 哲哉 | 高木 一之 |
| 土井 洋二 | 貫名 賢 | 伊藤 學人 |
| 松田 弘 | 廣谷 清 | 中村靖富満 |
| 脇浦 則行 | 河野 徳男 | 藤原 幹 |
| 下村 幸男 | 仁井田幸雄 | 奥窪 和夫 |
| 大塚淳八郎 | 桐林 正樹 | 天倉 康博 |
| 増原 義剛 | 今井 誠則 | 笹野 正明 |
| 中本 高明 | 船倉 智雄 | 福原 俊二 |
| 久保田文也 | 和田 章宏 | 中島 弘規 |
| 大内 茂稔 | 久保 康治 | 大方幸一郎 |
| 田戸 亨 | 西尾 尚士 | 小川 文象 |
| 加藤 省吾 | 山本 繁生 | 岸 英雄 |
| 庄子 佳良 | 住田 敏 | 江川 準一 |
| 久保 弘睦 | 堀内 武彦 | 林 春樹 |
| 畑尻 隆司 | 佐々木慶市 | 酒井 一成 |

(評議員)

| | | |
|-------|-------|-------|
| 森信 毅 | 天野 和人 | 河本 武彦 |
| 石本 芳郎 | 林 孝治 | 西田 頼信 |
| 正本 良忠 | 松野 龍荘 | 梅田 博之 |
| 河野富士雄 | 山崎 経男 | 中村 陽一 |
| 大国 進 | 諏訪 惇 | 萬谷 俊之 |
| 渡 義治 | 八田 敏郎 | 倉田桂二郎 |
| 川本 恒雄 | 井上 武彦 | 横田 守 |
| 先家 裕司 | 安田 邦男 | 大谷 宏明 |
| 池本 章 | 熊野 澄雄 | 野間 昇司 |
| 森本 訓 | 村尾浩三郎 | 森吉 努 |
| 穴田 一善 | 中村 幸信 | 二森 寛 |
| 堂本 高義 | 石井英太郎 | 島村 誠 |
| 松枝 茂樹 | 吉村 圭司 | 柴崎 雅雄 |

| | | |
|-------|-------|-------|
| 杉川 聡 | 中原 好治 | 樫原 一成 |
| 藤原 竜太 | 筒井 直樹 | 香月 孝史 |
| 西村 昌浩 | 菅川 洋 | 金島 茂則 |
| 中野 賢治 | 北山 雅之 | 近藤 浩 |
| 内藤 貴明 | 宮本 健吾 | |

《事務局》

| | | |
|-------|-------|-------|
| 田中 佳樹 | 若宮 寿仁 | 石井健二郎 |
| 近川 俊治 | 安竹 和彦 | 森井 啓治 |
| 島本佳代子 | | |

議事及び審議の結果

議案の審議に先立ち、修道学園(中・高)同窓会及び修道学園同窓会連合会との合同幹事会を開催する旨の宣言がなされた。

大田 哲哉同窓会連合会会長代理から開会の挨拶があり、慣例により大田会長代理が議長となることが了承された。

議案

1. 平成22年度修道学園(中・高)同窓会予算について

平成22年度修道学園(中・高)同窓会資金収支予算書(案)について事務局から説明がおこなわれた。収入の部は、入会金864,000円 終身会費2,016,000円 名簿売上代4,941,000円 預金利息80,000円 雑収入200,000円 事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円 名簿作製引当特定預金からの繰入収入1,000円 陶板画レプリカ売上代150,000円 小計は8,253,000円となり、前年度繰越金25,912,000円を合わせると、収入の部の合計は34,165,000円となる。支出の部は、事業費2,101,000円(内訳：名簿作製費1,000円 激励費700,000円 同窓大会補助金200,000円 卒業記念品料

700,000円 その他の事業費500,000円) 業務費945,000円(内訳:会議費280,000円 通信費265,000円 慶弔費200,000円 諸費200,000円) その他の支出337,000円(内訳:連合会分担金288,000円 事業基金引当特定預金への繰入支出48,000円 名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円) 予備費500,000円 小計は3,883,000円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は30,282,000円となる。支出の部の合計は34,165,000円となる。

平成22年度修道学園同窓会連合会予算について平成22年度修道学園同窓会連合会資金収支予算書(案)について事務局から説明がおこなわれた。収入の部は、分担金1,700,000円 預金利息40,000円 雑収入1,000円 事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円 小計は1,742,000円となり、前年度繰越金17,208,000円と合わせると収入の部は18,950,000円となる。支出の部は、事業費460,000円 業務費620,000円(内訳:会議費260,000円 通信費120,000円 慶弔費150,000円 諸費90,000円) その他の支出33,000円(内訳:事業基金引当特定預金への繰入支出32,000円 名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円) 予備費500,000円 小計1,613,000円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は17,337,000円となる。支出の部の合計は18,950,000円となる。

以上、(中・高)同窓会予算および同窓会連合会予算は審議の結果原案どおり承認された。

2. 正会員登録について

渡部 忠氏(旧中37回)、石原 豪氏(高校6回)、長久 勝之(高校6回)、吉川 晃司氏(高校36回)、津島 克哉氏(高校53回)の5名の方を新たに正会員として承認いただきたい旨の提案があった。

審議の結果、原案どおり承認された。

1. 幹事の選任について(事務局から報告)

修道学園(中・高)同窓会会則申し合わせ事項2により、仁井田 幸雄氏(高校3回)が退任され、大西 比呂志氏(高校3回)が修道学園(中・高)同窓会幹事に選任された。

また、修道学園(中・高)同窓会会則申し合わせ事項1により、田村 勇太氏(高校52回)と大辻 健介氏(高校53回)が修道学園(中・高)同窓会幹事に選任された。

いずれも任期は、平成22年4月1日から平成23年3月31日まで。

2. 同窓会名簿の発刊について

修道学園(中・高)同窓会名簿第35号の発刊について、名簿委員長中村靖富満氏より発刊の報告と御礼の挨拶がなされた。

3. 同窓会発足100周年について(事務局から報告)

平成23年は、修道中学校同窓会設立100周年となり、100周年記念事業として、100周年記念同窓大会、100周年記念講演会、100周年記念寄付事業等を検討したい旨の報告がなされた。

4. 平22年度同窓大会の開催について

広島修道大学同窓会からの報告

江川幹事より、11月6日(土)19時からリーガロイヤルホテル広島にて開催する旨の報告がなされた。

広島修道大学大学院同窓会からの報告

脇浦名誉会長より、6月26日(土)17時からJALシティ広島にて開催する旨の報告がなされた。

修道学園(中・高)同窓会からの報告

中村担当副会長より、9月4日(土)18時30分からリーガロイヤルホテル広島で開催する旨の報告がなされた。

報告事項

以上

同窓会ニュース

平成21年度決算を承認

平成22年6月1日
 修道学園（中・高）同窓会、修道学園同窓会連合会
 合同幹事会及び評議員会記録

日時：平成22年6月1日(火) 18:30～19:00
 場所：ホテルセンチュリー21広島 3階 プラド

出席者

(幹事・監査)

| | | |
|-------|-------|-------|
| 大下 龍介 | 大田 哲哉 | 高木 一之 |
| 土井 洋二 | 貫名 賢 | 伊藤 學人 |
| 松田 弘 | 中村靖富満 | 上野 淳次 |
| 脇浦 則行 | 藤原 幹 | 大西比呂志 |
| 上向井快三 | 奥窪 和夫 | 山下 泉 |
| 大塚淳八郎 | 横田 守 | 桐林 正樹 |
| 天倉 康博 | 今井 誠則 | 藤居 道正 |
| 中本 高明 | 久保田文也 | 和田 章宏 |
| 蔵田 修 | 仮田 典久 | 佐々木 明 |
| 中島 弘規 | 川崎 博行 | 北村 直幸 |
| 田戸 亨 | 西尾 尚士 | 大辻 健介 |
| 加藤 省吾 | 山本 繁生 | 庄子 佳良 |
| 松井 敏 | 篠原 敦子 | 江川 準一 |
| 久保 弘睦 | 畑尻 隆司 | 辻 誠治 |
| 佐々木慶市 | 酒井 一成 | |

(評議員)

| | | |
|-------|-------|-------|
| 河本 武彦 | 深崎 敏之 | 石本 芳郎 |
| 林 孝治 | 正本 良忠 | 松野 龍莊 |
| 河野富士雄 | 國田 昌之 | 中村 陽一 |
| 山崎 経男 | 古本 稔 | 渡辺 浩其 |
| 諏訪 惇 | 田中 博司 | 畠 眞實 |
| 山木戸道郎 | 吉田 邦介 | 川本 恒雄 |
| 井上 武彦 | 先家 裕司 | 内藤 慎吾 |
| 西元 義昭 | 増本 光雄 | 黒抗 昭夫 |
| 杉田 輝征 | 浜崎 武彦 | 熊野 澄雄 |
| 野間 昇司 | 加藤 和行 | 菊崎 賢 |
| 森本 訓 | 森吉 努 | 穴田 一善 |
| 田辺 裕善 | 中村 幸信 | 羽井 紀行 |
| 沖 清 | 菅野 康則 | 二森 寛 |
| 堂本 高義 | 島村 誠 | 山下 江 |
| 砂原 克規 | 松枝 茂樹 | 上田 大輔 |

| | | |
|-------|-------|--------|
| 土屋 博行 | 杉川 聡 | 橋本 郁朗 |
| 若宮 信二 | 田上 克彦 | 久保田貴八郎 |
| 尼子 幸暢 | 海生 知亮 | 藤原 竜太 |
| 筒井 直樹 | 金島 茂則 | 西村 昌浩 |
| 中野 賢治 | 北山 雅之 | 藤田 雅樹 |
| 内藤 貴明 | | |

《事務局》

| | | |
|-------|-------|-------|
| 田中 佳樹 | 若宮 寿仁 | 石井健二郎 |
| 近川 俊治 | 安竹 和彦 | 森井 啓治 |
| 徳崎 晴香 | | |

議事及び審議の結果

議案の審議に先立ち、修道学園（中・高）同窓会及び修道学園同窓会連合会との合同幹事会を開催する旨の宣言がなされた。

大田 哲哉同窓会連合会会長代理から開会の挨拶があり、慣例により大田会長代理が議長となることが了承された。

議案

1. 平成21年度修道学園同窓会連合会収支決算について
 事務局より、平成21年度修道学園同窓会連合会資金収支決算書について説明がなされた。収入の部は、分担金1,428,000円、預金利息80,478円、雑収入0円、事業基金引当特定預金からの繰入収入0円、小計1,508,478円となり、前年度繰越金16,451,143円を合わせると、収入の部の合計は17,959,621円となる。支出の部は、事業費207,900円、業務費267,836円（内訳：会議費89,071円、通信費95,990円、慶弔費60,000円、諸費22,775円）、その他の支出80,000円（内訳：事業基金引当特定預金への繰入支出80,000円、名簿作成引当特定預金への繰入支出0円）予備費0円、小計555,736円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金

は17,403,885円となる。支出の部の合計は17,959,621円となる。

次に貸借対照表についての説明が行なわれ、資産の部は事業基金引当特定預金7,897,791円、名簿作製引当特定預金506,250円、一般会計預金17,403,885円となっている。負債・正味財産の部は、正味財産が合計25,807,926円となっており負債はない。

続いて、辻監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

同窓会連合会決算は、全員異議なく承認された。

2. 平成21年度修道学園（中・高）同窓会資金収支決算について

事務局より、平成21年度修道学園（中・高）同窓会収支決算書について説明がなされた。収入の部は、入会金834,000円、終身会費1,946,000円、名簿売上代0円、預金利息98,515円、雑収入600,298円、事業基金引当特定預金からの繰入収入0円、名簿作製引当特定預金からの繰入収入0円、陶板画レプリカ売上代180,000円、小計3,658,813円となり、前年度繰越金25,912,684円と合わせると、収入の部の合計は29,571,497円となる。支出の部は、事業費2,006,270円（内訳：名簿作製費0円、激励費695,000円、同窓大会補助金200,000円、卒業記念品料674,470円、その他の事業費436,800円）、事務費1,076,408円（内訳：会議費337,701円、通信費305,278円、慶弔費201,425円、諸費232,004円）、その他の支出374,000円（内訳：連合会分担金278,000円、事業基金引当特定預金への繰入支出96,000円、名簿作製引当特定預金への繰入支出0円）、となり超過額計497,678円は予備費より充当し、小計3,456,678円となり、収入合計から差し引いた次年度繰越金は26,114,819円となる。支出の部の合計は29,571,497円となる。

次に貸借対照表についての説明が行なわれ、資産の部は事業基金引当特定預金19,519,785円、一般会計預金は26,114,819円となっている。負債・正味財産の部は、正味財産が合計45,634,604円となっており負債はない。

続いて平成21年度修道学園（中・高）同窓大会について廣谷担当副会長より報告があり、続いて

同窓大会世話人大辻健介さんより平成21年度修道学園（中・高）同窓大会決算書についての説明がなされた。収入の部は、補助金200,000円、大会誌広告協賛3,710,000円、会員券裏面広告協賛150,000円、会員券売上2,370,000円、Tシャツ売上代186,000円、寄付金170,000円、預金利息522円、収入の部の合計は6,786,522円となっている。支出の部は、大会誌作成費2,158,800円、大会運営費3,407,360円、広告宣伝費157,500円、消耗品費65,955円、通信費130,810円、会議費16,427円、振り込み・両替手数料74,655円、収入から差し引いた余剰金は775,015円で、平成22年度において本会計へ繰り入れる予定である旨の説明がなされた。支出の部の合計は6,786,522円となる。続いて、蔵田監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

中・高同窓会及び同窓大会決算は全員異議なく承認された。

報告事項

1. 幹事の選任について（事務局から報告）

修道学園（中・高）同窓会会則申し合わせ事項2により、浅尾 幸正氏（高校9回）が退任され、横田 守氏（高校9回）が修道学園（中・高）同窓会幹事に選任された。

任期は、平成22年6月1日から平成23年3月31日まで。

2. 役員改選について（事務局から報告）

平成23年3月は修道学園同窓会連合会及び修道学園（中・高）同窓会の役員改選期となっており、後日その手続きを行う旨の報告がなされた。

3. 修道学園（中・高）同窓大会について（中村担当副会長からの報告）

9月4日（土）18時30分からリーガロイヤルホテル広島で開催する旨の報告がなされた。

4. 修道学園（中・高）同窓大会・支部総会及び同期会の開催について（事務局からの報告）

各支部及び同期会の開催について、開催一覧により報告がなされた。

以上

支部だより

2010年修道学園同窓会関東支部総会報告 参加者の1割が学生という驚きの総会

修道学園同窓会関東支部事務局

修道学園同窓生のみならず、2010年の関東支部総会が7月12日に開催されました。1999年以来東京ドームホテルで7月の第2月曜日に開催されることが定例化しています。総会の実行委員会は毎年持ち回りで、2009年は9の回期、2010年は0の回期、2011年は1の回期という順番です。

場所と日時は定例化していますが、中身は担当する実行委員会によって異なります。今年のコンセプトは「修道の縦糸（先輩・後輩）と横糸（同期）」でした。具体的には前半のテーブル配置を出身小学校別（地域別）とし、後半に同期別テーブルに移動するという趣向です。

今年の総会の様子は、関東支部のホームページをご覧ください。この記事では、来賓のみの紹介にとどめます。

まず総会に先立つ講演会では、茨城大教授の三村信男さん（20回）にお願いし、「地球温暖化」について話していただきました。総会の冒頭に挨拶をいただいたのは、同窓会関東支部の林有厚会長（1回、東京ドームホテル会長）の開会挨拶、修道学園の理事長である林正夫さん（11回、広島県議会議員）の他、今回は広島本部からは副会長の貫名賢さん（14回）と近畿支部からは代表幹事の

齋本隆司さん（17回）からも挨拶を頂戴しました。

田原俊典校長の挨拶（修道学園の自慢話？）は関東支部総会の定番メニュー。今年も長身美声で報告していただきました。

また料理で人気を集めたのは、お好み焼きの屋台（オタフクソース提供、佐々木孝富さん（39回）のご協力）と、広島銘菓もみじ饅頭の屋台（やまだ屋提供、中村靖富満さん（30回）のご協力）でした。

20時過ぎからのイベントは、ソプラノ歌手Yoko Mariaさんによるミニコンサート。彼女は、事務局佃光博さん（20回）のお嬢さん。1999年にチャイコフスキー国際コンクールの日本代表になったこともある実力派です。

さて今年も無事に終了した総会でしたが、1つだけ異変がありました。なんと総会参加者の1割にあたる54名が学生だったのです。62回（2010年卒）6名、61回11名、60回21名、59回9名、58回5名、57回2名。今年3月の修道学園卒業式に関東支部のチラシを配布したこと、田原校長以下の先生方からの働きかけが功を奏したのでしょうか、想定外の多さにびっくり。先輩と後輩の絆の重要性を再認識させられました。来年も若い世代の参加に期待したいと考えています。



参加者の1割が学生だった今年の総会。食べる食べる。その食欲にうらやましさを感じました。



総会を締めくくるのは校歌斉唱。男同士で肩を抱き合うのは男子校ならではの風景

第16回江能修友会総会

平成22年5月30日(日) 於 能美海上ロッジ
胡子雅信(高41回)

平成7年7月7日に発足しました江田島市(江田島・能美島)出身および関わりのある者を会員とする江能修友会も16年目に入りました。ここ近年は広島市を会場としていましたが、ぜひ島でやりたいという声が多かったので、今年は江田島市能美町にある能美海上ロッジにて総会および懇親会がおこなわれました。このたびは修道学園同窓会より公私ともご多忙の中、高木一之会長代理にご臨席賜りました。江田島市は宇品～高田・中町(能美町)のフェリー・高速艇航路を持っており、今回の総会会場である能美海上ロッジ直行の船便もあります。高木会長代理様にも10:38海上ロッジ着便にて来ていただきました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。

懇親会では恒例となっている梶川進先生(旧中29卒)の講話(?)で大いに盛り上がりました。新米海軍軍医官としての戦艦長門との出会いや別れ、潜水艦で昭南(現シンガポール)まで航海した時の貴重な体験記などを話していただきました。

弁護士の山下江先生(新高23回卒)からは、最近、弁護士事務所がなぜテレビやラジオで頻繁にCMを出しているのか、また、その影響・問題点などを分かり易く解説していただきました。

“もう一人のメダリスト”(参考HP:<http://www.iwojima.jp/kawaishi/index.html>)について修道繋がりでお聴きになったことはありませんか? 2006年(平成18)に公開された映画、『硫黄島からの手紙』。戦前(1932年、昭和7年)のロサンゼルス五輪の馬術金メダリストの西竹一大佐が硫黄島で戦死した話は有名ですが、時同じくして硫黄島で戦死した能美島出身(現:江田島市)の水泳自由形100m銀メダリスト、河石達吾(旧制修道中学→慶応大)についてはあまり語られることはありません。県水泳界の将来を担う我が修道学園においての創世記であったのではなからうか。

最後に参加者一同が輪になり肩を組みながら、校歌を歌い、来年の再会を約束しました。



第16回江能修友会総会 平成22年5月30日 於: 能美海上ロッジ

支部だより

第54回(平成22年度)修道医会総会の報告

修道医会副会長(事務局長) 井内 康輝(高19回)

毎年夏に開催する修道医会総会を、今年も7月10日(土)、ANAクラウンプラザホテルを会場に開きました。定例の行事として、午後4時半から評議員会、次いで総会を行い、前年度の事業報告・決算と今年度の事業計画・予算などを審議して承認していただきました。午後5時半から特別講演に移り、1.鳥取大学医学部教授、井藤久雄先生(高19回卒)による“臓器移植の病理：歴史の変遷と最近のトピックス”、2.広島大学医学部教授、大段秀樹先生(高33回卒)による“臓器移植の現況と展望”、の2題を話していただき、最先端の医療である臓器移植について改めて関心を深めたところです。

総会は午後7時より山肩俊晴会長(高14回)のご挨拶に始まり、来賓としてご臨席いただいた林正夫修道学園理事長、大田哲哉修道学園同窓会長のご挨拶に続いて、田原俊典修道中・高等学校校長より修道学園の現状を伺いました。新しい体育館が完成したこと、学業のみならず、陸上競技でも全国的レベルで活躍する選手がいることなどに会場が湧きました。

表彰式では、第12回学術奨励賞は広島大学大学院歯歯学総合研究科助教、中島歩先生(高校44回卒)が受賞されました。受賞論文の内容は、体内時計を維持・調節するDEC1遺伝子の機能解析であり、今後に大きな発展を望めるものです。第3回文化功労賞は、東区で皮膚科を開業されている

江川政昭先生(高校18回卒)が受賞されました。同先生は25年にわたって油絵を描き続けられており、数多くの展覧会にも入賞されています。今後も益々円熟した絵画をみせていただけたと思います。

伊達昌英先生(旧中36回卒)のご発声での乾杯によって懇親会を始め、旧交を暖めました。この中で、新たに病院の院長職につかれた安佐市民病院の多幾山渉先生(高22回卒)、広島共立病院の村田裕彦先生(高28回卒)から自己紹介をいただきました。また、招待された学生部会の会員の紹介をテーブルで同席された先輩の先生にいただきました。現在、学生部会会員は50名をこえています。今後とも広島大学医学部の学生のみならず、他大学医学部、医科大学へ進学した同窓生にもよびかけ、会員数の増加を図っていきたいと思います。10月3日(日)には東広島カントリークラブにて、23回目となるゴルフ大会を開催します。近年、このゴルフ大会に若い世代の参加が少なくなっていることから、日野文明幹事(高24回卒)のもと、ゴルフ大会の趣向を少し変えて、多くの参加者を募りたいと考えていることも紹介されました。

懇親会の最後では、恒例となった修道学園の校歌の斉唱、井上圭太郎先生(旧中36回卒)の音頭による万歳三唱のあと、土肥博雄副会長による閉会の辞で締めくくりました。



第54回修道医会総会懇親会



山肩俊晴会長のご挨拶



大田哲哉同窓会長のご挨拶



学術奨励賞を受賞された中島歩先生



文化功労賞を受賞された江川政昭先生

支部だより

九州地区同窓会(九修会)の開催についての報告

近藤 豊 (高校26回)

遅くなりましたが、本年1月23日土曜日午後6時より博多駅前の寿司割烹『鮨隆』にて九州地区同窓会(九修会)を開催しましたのでご報告させていただきます。

九修会自体は以前からありましたが、平成18年度より規模は小さいですが毎年年初めに総会及び懇親会を開催するようになりました。

現在は、S43年卒の井上雄介氏に会長をS35年卒の石村謙吉氏に事務局長をお引き受け頂き会の運営を行っています。ちなみに私(S49年卒)は、石村氏と自宅が近い(佐賀県基山町と鳥栖市)という事もあり会計担当としてお手伝いさせて頂いております。

総会前に九州在住の卒業生には、同窓会名簿等を頼りに事務局より往復はがきにて出席の有無を確認し、返信されたはがきを元に九修会名簿を作成して参加された方に配布しています

開催場所は、交通便の良い博多駅前付近にして

いますが毎年十数名程度の参加者となっています。

毎年会を開催するにつれ新しい方も来られ、それぞれの自己紹介を聞いて懐かしい話などで盛り上がり親睦を深めています。短い時間ではありますが、皆さん楽しい時間を過ごされ次回の開催を楽しみに帰られます。

運営費については、以前からの運営費の残り及び総会出席者からの会費徴収によって運営を行っています。

今回の参加者名及び写真を同封しますので、同窓会の会誌等の片隅にでも載せて頂ければ幸いです。

宜しくお願い致します。

*九修会事務局

〒841-0204 佐賀県三養基郡基山町宮浦486-197

電話番号：0942-92-6984

事務局長：石村 謙吉



左上：近藤 豊(高26)・濱岡敬一(高18)・花岡 悠(高15)・田島 剛(高14)
石本耕治(高17)・黒田省司(高15)・石村謙吉(高12)・光田 靖(高27)
左下：中里亜夫(高15)・吉川雄幸(高6)・秋山泰廣(高13)・井上雄介(高20)
藤谷英昭(高8)

昭和28年卒修道高校五回同期会の活動報告

中 村 陽 一 (高校5回)

その後お変わりご座いませんか。今年の5月の連休明け喜寿のお祝い旅行も兼ねて13日・14日・15日と隔年置きの同期会旅行「立山黒部アルペンルート」に行っておきました。平成7年の還暦高知旅行に始まり・古希の東京プリンスホテルパーティ宿泊と箱根湯本温泉宿泊・今回の喜寿旅行も新大阪集合で、穂高の平湯温泉泊から長野大町側より扇沢・黒部・室堂・立山・雪の大谷と富山庄川温泉宿泊と無事二泊三日と行きました。年々と出席者の数も少なくなりましたが28名の参加者があり大盛会でした。

原爆投下戦後の混乱期の昭和22年、第1回の新制中学入学の学生改革の時代を体験し、入学当時はまだ原爆の悲惨の跡も生々しく敬道館が原爆に耐え残り、新校舎はまだ骨組の復興新築の最中の昭和22年の春でした。

我々も高度成長の波に乗り、無事健康を感謝しながら今日現在まで頑張っておっています。何時の間にか後期高齢の老後を迎えてもあの修道時代の思い出は深くこころに残っています。当時の月謝は480円と覚えています。

毎年発行している我々同期の会員名簿も200名を割って来ました。「毎年8月12日を同期会」「忘年会を12月1日」と定め、広島で盛大に開催出来るのも平成7年の還暦高知旅行の際、今後の活動で生涯通信費2,000円を同期全員にお願いし

たところ全員233名の賛同で259口518,000円の基金が集まりそれを母体として我々の活動も現在まで継続してきています。

しかしその基金も遂に底を突きました。昨年の総会に生涯通信費3,000円を議案とし出席者全員に諮ったところ満場一致で議決されました。

我々の規模も少しずつ小さくなって来ています。ご賛同頂ける方には今後とも継続してご案内させて頂きませんが、ご賛同頂けない場合は費用の関係で今後連絡出来ないと思います。

旅行の場合はその都度参加者全員に会計報告をしています。

旅行も平成18年に益々発展する母校修道訪問と宮島泊と山陰松江城と堀川めぐり玉造温泉泊・足立美術館・安来節を堪能。平成20年修行の高野山宿坊泊まりと和歌山湊峽と熊野古道・那智勝浦浦島温泉と二年おきの旅行を楽しんでいます。今回は喜寿と重なり黒部・立山といきました。母校修道訪問の平成18年を期に4年に一度の旅行を2年に一度と変更し益々母校の友情と親睦を深めています。平成22年の「修道高5回の同期会」は8月12日そごうデパート隣、メルパルクにて18時～20時まで開催致します。

世話人

上向井快三 佐伯正司 山崎経男 中村陽一



秋明の祝祭習俗を題材にした演劇第三、八巻を演劇した。出演者等、21名(男性15名、女性6名)出席。10月10日(土)午後2時、本校大講堂にて行われた。公演中、観客の熱い拍手が絶えなかった。本席を離れ、会場内を巡り、観客と交流した。



黒部峡谷 黒部ダム 平成22年5月14日

修道12回生『卒業50周年記念大会』(古稀を祝う会)の開催

増本光雄(高12回)



相談を受けた時は、毎年開催している同期会に毛の生えたようなものだ、高を括っていた。

ウルトラマンの地球上での活動時間は、たったの3分間である。我々12回生がこれから取り組もうとしている事業はウルトラマンのような地球の危機を救うというような大仰なものではない。記念大会とは言え、たかが同期会である。

そう考えてみると、68歳に達する我々12回生は、少なくとも1日のうち、午前中くらいは元気であることが出来る。同期生20名の有り余ったエネルギーと有り余った時間を糾合すればそれ相当の事業を達成することができるかと踏んだのである。これが、大事の始まりであった。

まず、2009年7月に『準備委員会』というものを発足させた。25名に呼びかけて、20名の準備委員が居酒屋に集合した。直ぐに酒宴が始まり、決まったことは、2010年早々に開催するということのみ。愉しく酒を酌み交わし、楽しくしゃべりまくって、充分に旧交を暖めて、三々五々、夏の宵闇に散って行った。

とは言うものの、0から出発するのと、20名から出発するのは大違い。頼もしい限りであった。

9月5日の『同窓大会』をやり過ごし、10月7日に再び『準備委員会』を開催することになった。

ところが、20名が居酒屋に集まっても、毎度おなじみの楽しい酒宴が始まり、肝腎な話が先に進まない。そこで、実行委員を6人決め、お酒抜きで、会議に徹底し、そこですべての段取りを決定し、居酒屋での準備委員会は、決定事項の承認を採る会にした。当初、12回生に因んで、毎年開催している1月12日に決行する由、出席者に伝えられた。それはそれ酒の席での「声の大きな者の勝」という大雑把な決定であった。ところが、来年のカレンダーをめくってみると、1月12日は3連休のあくる日の火曜日という一般的に出席が困難な日取りであったため、6人の実行委員会で16日の土曜日に変更することにした。

同時に、サブタイトルも『古稀を祝う会』に決定した。古稀とは唐代の詩人杜甫の『人生七十古来稀なり』に基づく、数え七十歳の異称であり、そもそも満で68歳に達している12回生は近年までは稀な長生きの部類に入るものであった。

12回の卒業生が360人。まず、正しい名簿の作成から取り掛かった。これは、覚悟はしていたものの大変な作業となった。10年前の名簿がまったく当てにならず、かなり訂正の筆を入れてはいたものの、65歳の定年という人生の区切りを通過している年代で、リタイアしている者、職を変えてい

る者、住居を変わっている者と変遷が激しい。20名の準備委員会に諮っても、ガセネタが多かったり、数年前の情報であったりする。

確実にお亡くなりになった同期生を拾い出すと、50人に達した。それでも、最終的に280名の同期生の消息が判明した。次に手をつけたのが開催場所であった。結局、『ANAクラウンプラザホテル広島』に決定。次に、『思い出のアルバム』～映像で見る学生生活の軌跡～というタイトルで、中学・高校時代の6年間の懐かしい記録をデジタル投影する企画が提案された。CDを作成するために、準備委員会の20名にその時代の懐かしい写真の提供を依頼したが、収穫なし。最も、当初から当てにもしていなかったが…。

結局、修道学園に3回取材に行き、実行委員の自前の古い写真帳を紐解き、厳選して、47コマのCDを作成した。今では、学会でも、会社の発表会でもデジタルで投影するのは当たり前のことであるが、この製作を外部に発注すると、30万から50万円もかかるといわれた。そのほとんどが人件費と技術料である。ケチケチ作戦の12回実行委員会では手造りに徹することにして、総費用5,000円で製作した。同期会の繰越残高(埋蔵金)が40数万円あるのを見越して、多少の赤字は覚悟の上で、会費は13,000円に抑えることに決定した。

この会費の中で、当日撮影する『記念写真アルバム』(20ページ。推定小売価格10,000円。原価3,000円)と『名簿』(住所録)を作成しなくてはならない。そのために、同期生に10,000円の名刺広告と5,000円の『協賛参加費』を依頼することにした。参加費、広告、協賛金は郵便局への振込みにした。その結果、最終的に101名の同期生と4名の来賓の出席申し込みを確保した。更に、広告20件、協賛者36名が確定した。

真冬の開催ということもあって、当日の急遽欠席者を2、3名と見込んでいたが、案の定、2名が欠席。但し、無届け欠席が1名あって、きっちり100名と来賓4名で宴は5時30分丁度に始まった。世話人25名はテキパキと自分の役割をこなしていった。

会が始まると直ぐに、この会の成功を確信した。それは、100名という卒業50周年にしては、予想だにできなかった出席者の数で定刻前に席が埋まっ

たことと、出席者のとびっきりの『笑顔』を見た時であった。出席した最早中高年である同期生が、見る見るうちに若返っていった。

アトラクションは同期生3名が加わるハワイアンバンド『ガラシゲハ』(禿・白髪)、ダンスチーム『クール・ウオーター』(別名:年寄りの冷や水)の魅力的な中高年女性3名の共演で、まるでハワイに場所を移した修学旅行の気分。

三三七拍子が飽きることなく繰り返され、エールが飛び交い、輪になって、修道学園応援歌が響き渡った後に、校歌が繰り返して唱われた。

会場の都合で、集合写真は宴の最後に撮影することに決定していた。30分以上会が延長されていた上に、遠路はるばるやって来た同期生が多かったため、途中退場が懸念されたが、一人の欠落者もなく、最後の集合写真に全員が収まった。

卒業30周年が恩師12名。同期生137名の出席。

40周年が来賓4名、恩師7名。同期生112名の出席。この度の50周年が来賓3名、恩師1名、同期生100名の出席。60周年には、我々12回生も日本の男性の平均寿命に達し、統計上では、この度出席した同期生の半数はもうこの世に存在しない。これが現実である。

案内状にも、この現実を盛り込んだため、これを最後と出席してくれた同期生も多かったと思う。つまり、軟らかく脅しをかけておいたのである。

母校への寄付は12回生に因んで、12万円とした。

なんと、七ヶ月の間に酒びたりの準備委員会を6回、6名の実行委員会を5回、おまけに反省会まで開催して、漸く、矛を収めたのが2月16日。

残す作業は、記念写真アルバムと名簿の製作と配布だけとなった。それも出来るだけ手配りしようという節約振り。この大事業もこれにて収束。

さて、今回のこのレポートはこれから取り組まれる後輩が開催される記念大会にとってなんらかの参考になれば幸いです。書いて書き下した次第であります。



卒業40周年記念「四十年目の〈合同〉卒業式」

松本憲治(高22回)

我々「修橙会」と称している1970年卒業の高校22回組は、恒例の夏の同窓会を今年は「今一度青春を振り返り、来年の還暦を迎える覚悟を」という意味も込めて「卒業40周年記念・40年目の〈合同〉卒業式」として8月15日に「大々的に」開催した。

当日は、まず午後2時より「記念サッカー大会」、3時より「校内見学」というオプション企画を経て、午後4時より十竹ホールにて「〈合同〉卒業式」、そして夕刻より「祝賀会」と称した懇親会をANAクラウンプラザホテルで。当日参加した同期生は、県内、県外から140名あまり。十竹ホールでは、恩師諸先生が3名、金子慧先生(数学)藤沢洵先生(化学)田中博司先生(英語)、それに現校長の田原俊典先生、「祝賀会」では、田中正久先生(物理)、修道学園理事長林正夫氏にも参加いただき、ホームTV、広島TV、ふれあいチャンネル、また、中国新聞、朝日新聞などの取材でも賑わった。

なぜ「合同卒業式」なのか。また、様々なメディアが興味を持ったのか。それは我々の卒業式が当時全国でも初めての「分散卒業式」だったからである。

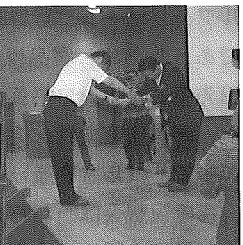
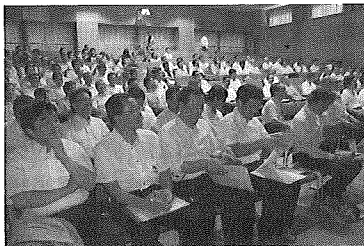
1960年代後半から日本、いや世界主要国に広まっていた「大学生による社会への異議申し立て」運

動。それが「大学紛争」となって日本では69年の「安田講堂事件」「東大入試中止事件」となった。わが学園では10月11日と「実力封鎖事件」が起き、特に2回目は高校で初の「機動隊導入」となり、結果、翌70年3月の卒業式は「分散」となった。全く「大学受験」どころではなかったのである。

卒業後40年もたてば、我々同期もそれなりの地位にいるものが多いが、当日「白シャツ、黒ズボン」でかしまり、「物故者黙祷」「補習授業」などを経て、「現代の元服式である高校卒業式をまともに」の趣旨に添い、「定番」の校歌斉唱から出席者全員呼称、合同卒業証書授与、祝辞、送辞、答辞、など、笑いありツッコミありと大いに盛り上がった。「洒落を装いつつ」というのが我々の姿勢でもあったのだ。

とはいえ、やはり「学園紛争」なるものを引き起こした18歳当時には思い至るべくもなかったが、「若く未熟ながらも、自由なディベートを許す」この学園の気風、それを維持されていた諸先生たちのご苦勞、ご配慮を忍ばずにはいられない。まさに「修道之謂教」を思い、我々は黙して首を垂れるしかない。

今回の我々の「勝手な」思い入れに、全面的にご協力いただいた修道高校、田原校長にも、改めて深く感謝致します。



OB 会 報 告

修道高等学校書道班OB会 「吉田学先生 赤いちゃんちゃんこの会」開催報告

大成 浩 二 (高38回)

2010年5月1日(土)午後7時より、ひろしま国際ホテルにて、修道高等学校書道班OB会「吉田学先生 赤いちゃんちゃんこの会」を開催しました。吉田先生は、2010年3月末をもってご退職の予定でしたが、4月から再雇用という形で引き続き修道にお勤めになっていらっしゃいます。書道班OB会は当初「ご退職記念」ということで会を企画していたのですが、急遽、吉田先生の還暦を祝おうという名目にして、「吉田学先生 赤いちゃんちゃんこの会」と銘打って、この祝賀会を催しました。

新しく完成した卒業生名簿・修道の図書館にある卒業アルバム・吉田先生の記憶を頼りに、吉田先生が修道に赴任された時の高校3年生の代から、今年の3月に卒業した代までの書道班OBの名簿の整理から作業をスタートしました。この期間の書道班OBは140名でした。当日の企画としては、日中に有志によるゴルフコンペを行い、夜は祝賀会という流れで企画しました。企画が完成した段階で、広島在住・広島大学在学中の書道班OBに集まってもらい、3月に案内を140名のOBに送付しました。その結果、当日は、ゴルフコンペ参加者は8名、祝賀会参加者は50名という会になりました。

ゴルフコンペは、竹原市のフォレストヒルズゴルフ&リゾートで行いました。8名という少人数であったため、賞品はニアピン賞だけとし、「吉田先生とガチンコ勝負」ということで実施しました。天候に恵まれ、笑いを含んだ和やかな雰囲気の中で、ゴルフを楽しみました。

夜の祝賀会は、39回卒の大山益男氏の軽妙な司会が笑いを誘い、大変盛大な会となりました。数年前に吉田先生の鶴の一声で書道班OB会会長に就任した53回卒の藤田和将氏の挨拶で祝賀会が始

まりました。書道班OBを代表して33回卒の古谷喜義氏が、吉田先生へのお祝いの言葉を述べました。引き続き、35回卒の出寄文則氏の音頭で乾杯となりました。年齢順に10名ずつの5テーブルという設定にしており、先輩・後輩とはいえ今日が初めて顔を合わせるといふ者同士も多々ありましたが、「書道班OB」「吉田先生の教え子」という共通点で、あっという間に話が弾んでいきました。

会の終わりに、書道班OB会から吉田先生への記念品の贈呈を行いました。吉田先生から事前に「ぜったいに、いらん!」と言われていましたが、まず最初に「赤いちゃんちゃんこ・帽子」の、いわゆる「還暦のお祝いセット」を贈呈しました。吉田先生に怒られるのを覚悟していましたが、それどころか、壇上でちゃんちゃんこも帽子も着用していただきました。続いて、36回卒の足立健氏より記念品の電波式腕時計を、書道班OB会会長の藤田氏より花束(フラワーバスケット)を贈呈しました。最後は吉田先生のお言葉でしめくり、記念撮影をして終了しました。

書道班OBはここ8年ぐらい、年2回のペースで集まっていますが、今回のような大きな会を開催したのは初めてです。ゴールデンウィーク中の5月1日とはいえ、当初は何人集まるか、不安な面もありました。結果として、社会人・大学院生・大学生も含め、茨城から福岡まで、50名が集まりました。「当日の出席は無理だけど、記念品代だけでも参加したい」というOBの方も数多くいらっしゃいました。今回のことで、吉田先生を中心とした修道高校書道班OBの結びつきの強さを感じました。今後も機会を設けて、書道班OB会を開催していきたいと思ひます。



「スクバン」のサマーコンサートで感じたこと ～世代を越えた同窓の繋がり～

スクールバンド班OB 水口直也(高46回)

今から半世紀ほど前のこと、当時中学3年生だった徳本靖先輩(高16回卒)が学校や生徒会とかけあい、「スクールバンド班」が誕生しました。一般的に吹奏楽と言えば、「 brassバンドでは?」と思う方も多いかと思います。 brassとは金管楽器の材質である黄銅(真鍮)のことですので、正確に言えば brassバンドは金管バンドを指すのですが、日本では「ブラバン(brassバンド)」という言い方が主流な中、なぜ「スクバン(スクー

ルバンド)」なのか、在学中から不思議に感じていました。卒業後、初代の徳本先輩をはじめ、初期のメンバーの方とお会いさせていただき、50年前の当時は brassバンドという呼び方が一般的ではなかったといった話をお聞きし、長い間の謎が解けるとともに、歴史の重みを感じたものです。(ウィキペディアにも記載がありますので「 brassバンド」で検索してみてください)

さて当該スクバンですが、例年7月の「海の日」

前後の3連休に、広島市文化交流会館（旧厚生年金会館）でサマーコンサートを開催しています。今年も、7月18日・19日の2日間で4000人ものお客様をお迎えし、超満員・大盛況の中、無事終えることができました。歴代校長をはじめ、ご来場いただきました皆様、本当にありがとうございます。

今回は、こうした現役の晴れ舞台を、裏方で支えるため、手弁当で駆けつけてくれている同窓OBについて、少しご紹介させていただきます。

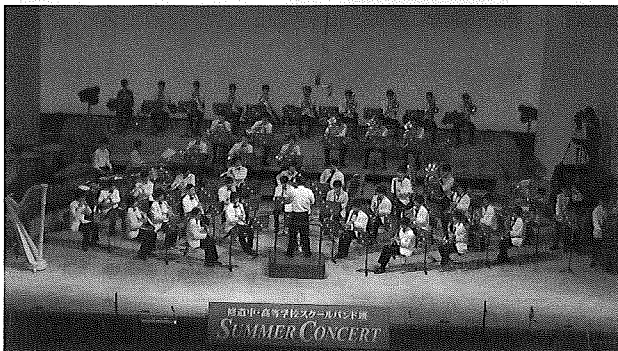
裏方の仕事は、一言でいえば「演奏以外のすべて」であり、ステージの転換や場内整理など、多岐にわたります。特に炎天下の中、長時間お待ちいただくことになる数千人にも及ぶお客様を、いかに「ワクワクドキドキ」状態で現役にバトンタッチするか、こうした対応・接客こそが最大の使命といっても過言ではありません。

ところが、この大役を担うOBとは言えば、進学や就職により音楽から離れている人も多く、年に一度の再会后、すぐに仕事が待っているわけですから、入念な打ち合わせなどする時間もなく、まさしくぶっつけ本番となってしまいます。一方で、意外や意外、このOBによる即席の「おもて

なし」が割りと好評で、音楽関係、イベント関係の方からお褒めの言葉をいただくことも多いのです。

班活動の集大成としてスポットライトの中心にいた高校3年生が、翌年はOB1年生としてスポットライトどころか、エアコンにも当たることができない過酷な労働条件にもかかわらず、交通費を自腹で負担してまで駆けつける訳ですから、関西人の妻に言わせば「ありえへん」らしいのですが、こうした根っからの「積極性」「お祭り好き」「マゾっ気」こそが、修道同窓生のチームワークの源流なのではないでしょうか。余談ではありますが、前述の妻曰く、修道生は、S極とM極のある磁石の様に、後輩に対してはS（サド）極側が、逆に先輩に対してはM（マゾ）極側が反応するため、世代を超えてSM-SM-SM-SM-SM-SM・・・と繋がっているのだそうで・・・。

来年も、7月の夏真っ盛り、若々しい演奏と、修道クサイ「おもてなし」でお待ちしております。ぜひ足を運んでみてください。今後とも母校発展のために微力ながらお手伝いさせていただこうと思っています。



本番に向けてリハーサルを重ねる現役生徒たち



その陰で、ぶっつけ本番の「おもてなし」に向けて打ち合せ(わるあがき)中のOBたち

「十竹軒日記」(明治二十年：修道学校の経営を引き継いでの日々)を読む

修道学園史研究会会長 畠 眞 實 (元校長：高7回)

はじめに

明治二十年の日記は、前回紹介した明治八年の海軍兵学寮時代の日記に次ぐ時代のもので、正月一日から十二月三日まで記されている。明治十九年に、浅野家は修道学校の経営から手を引かれ、先生は修道学校を廃止するに忍びず、八丁堀の自宅で修道学校を引き継ぐ決心をされる。そして新たな学校づくりを目指して校舎の建築などに力を注がれた時期である。

明治四年の廃藩置県によって藩学「修道館」が廃止され、その跡地に私塾「遷喬舎」が明治五年に設立され、明治七年には廃止になる。それを受け継ぐ形で大手町に官立外国語学校が設立され、それが広島英語学校と改称される。これが明治十年二月に廃校となり、同年三月、県が譲り受けて広島英学校と改称する。明治十年七月には、下中町に移り、英語学校から普通科の学校、広島県中学校となる。こうした中で、浅野長勳公は一般の人々が教育を受けるに十分な状況ではないと考え、藩校「修道館」の精神を受け継ぐ学校として私財を投じて、泉邸内に明治十一年に「浅野学校」を開校される。そして明治十四年に浅野学校の学制改革を目指されて海軍兵学校の教官になっていた山田養吉先生を抜擢して校長とし、校務一切を任せられ学校名を修道学校と改める。しかし、修道学校の存在が広島県の設立した広島中学校(明治十九年に広島尋常中学校と改称)の支障となつてはということで、先に述べたように浅野家が修道学校の経営から手をひくことになる。山田養吉先生は、明治十九年四月、八丁堀の自宅でこれを引き継ぎ、私学としての道を歩むことになる。こうして明治二十年を迎えたのである。今回は、書き下し文を省略した。読むときの煩瑣を少なくするためである。

春王正月一日 賀年衆客来去 岩本元行来 説余
以爲中学校教官 木原適所亦来 偷閑 至今井
丸山 賀年 有詩 曰 千門万户日旗紅 松竹鬱
葱佳氣通 蘇醉餘來訪客 顔顔無不帶春風
語句 ・偷閑 忙しい時に少しの暇を求めて心を
楽しませる。 ・佳(ず) とりの名。 高く大
きい形容。 山の高大な形容。 ・鬱 木がこん
もりと茂るさま。 ・葱(そう) 青い ・蘇酒
屠蘇のこと。正月の厄払いに飲む酒に入れる薬
味。またそれを浸した酒。

大意

年賀のため、多くの客が来たり帰ったりする。岩本元行がわたしに中学校の教官になるようにと説得する。木原適所も亦来る。多忙の中、暇をみつめて心をたのしませる。今井、丸山に行く。新年を祝う漢詩がある。

その詩

多くの家々に日章旗が赤い。

松竹は青々として、あたりにひきしまった雰
囲気が溢れている。

屠蘇に酔って、年賀に訪れる客がくる。

どの人の顔にも初春の気配を感じさせないも
のではない。

補注

・岩本元行 県立師範学校初代校長。藩校修道館の教師であつた岩本は、明治七年(1874)東白島町真木直一の私宅を仮校舎として師範学校を開設する時、開校業務を担当し、明治八年八月から正式に校長に就任して、明治十年まで在職した。その後は佐伯郡長とか県立中学校長など県職員として活躍している。天保五年(1834)年生まれ。(「広島学校教育史」による)

・木原適所 文政九年(1826)~明治三十四年(1901)。賀茂郡松山村の庄屋、木原麻右衛門貞広の長男として生まれた。幼名を亀之丞、成人して通称秀三

郎、諱は貞義、明治八年以降は適処と号した。安政元年十一月周防岩国の砲術家有坂淳蔵を訪ね、そのすすめにより長崎の高島秋帆に入門を願ったが、許されず、翌年正月長崎奉行所唐蘭通辞の名村八右衛門に入門し語学を学んだ。同四年三月遠州掛川に移り、洋式兵術を習い、さらに同五年勝海舟の門に入り、海軍術を学んだ。このころから土佐の大石弥太郎・田所壽太郎・間崎哲馬・中岡慎太郎、長州の大村益次郎・桂小五郎、薩摩の岩下佐次右衛門、肥後の大野鉄兵衛らとの交流を深めた。文久二年九月広島藩に登用され、勘定所支配足軽となり、町方支配浪人雇を経て、建議が容れられて、江戸藩邸内に応接所が設けられるや、十二月安藤保之進らとともに応接方に任命され、諸藩の藩士や浪士と交わり、その動向を探った。同月藩主淺野長訓が幕府から江戸滞在を命じられた際、藩士石井雄之介とともに老中板倉勝静邸に詰め、藩主の上京許可を歎願し、ついに翌文久三年正月許可されるにいたった。同年二月歩行組番外となった。同年五月には軍艦付となり、十月安藤田鶴と結婚。元治元年十二月長男三郎が誕生。慶応元年正月切米十石三人扶持・軍艦方歩行筆頭となった。同二年の第二次長州戦争の際の、老中小笠原長行による広島藩年寄野村帯刀、また同年年寄首座辻将曹（維岳）に対する謹慎処分に対し、学問所会合の有志士・年長者とともに、五十五名の連名で建白書を提出し、藩に出兵を辞退するよう申し入れた。同年九月川合三十郎と協議し、賀茂郡志和の地に民間有志からなる強力なる独立諸部隊を結成することを建言。この構想は同年九月に至って実現し、隊名を回天軍第一起神機隊と称した。同隊は戊辰戦争にあたり、関東・奥羽方面に出兵した。明治元年八月勤中小姓組格会計局吟味役・神機隊取締役となる。十月尾道での回天第二起捷神隊結成を建議し許可された。のち第十一級会計局少承事。同年十二月父麻右衛門死去。同年二月小姓組取立会計局吟味役二十石、同十月中士永世祿二十五石となる。同三年九月藩の賈金製造の取り調べを受けた。翌四年五月妻田鶴が病死。明治十年西南戦争にあたり、旧藩隊兵有志の募集があり、旧神機隊員のよびかけに尽力した。同十二年五月コレラ予防費、農業用溜池築造などに多

額の寄付を行い、農事改良運動に取り組んだ。同十四十一月越智ヒサと結婚。同十五年芸備立憲改進黨の結成にあたり、資金を援助するなど協力した。同十七年五月私財を投じて広島英学校を開設。同二十一年二男笑作誕生。同二十二年筒井カウと結婚、三男養作誕生。同三十四年十二月七日広島市金屋町の自宅で死去。享年七十六歳。薬研堀禅昌寺に葬る。正六位を授与される。（「三百藩家臣人名事典」）

二日 拜年

大意 新年を祝う。

三日 又拜年 午前帰

大意 又、新年を祝う。午前 帰宅。

四日 又拜年 午前帰 共萱堂内人至丸山氏

語句 萱堂（けんどう） 母のこと

大意 又、新年を祝う。午前 帰宅。母上、内人と共に丸山氏に行く。

五日 終日在家 加藤恂一 村上弘 篠田六郎

佐藤慎一 木村文槌来

大意 一日中家にいる。村上弘 篠田六郎 佐藤慎一 木村文槌たちがやって来る。

七日 片山左太夫来 経畫建覺

語句 ・経畫 計画する。 ・覺（こう） まなびや。学舎。

大意 片山左太夫がやって来る。学校建設の計画を練る。

八日 入年始講左傳

語句 左伝 左氏伝。春秋左氏伝。中国の十三経の一つ。魯の歴史を書いた「春秋」の解釈書。著者は左丘明、魏の史官左氏、劉歆（リュウキン）の偽作という三説ある。

大意 年始にあたり、左伝を講義する。

九日 日曜 平川楨来 木原適所亦踵至

語句 踵 くびす。かかと。つぐ。すぐあとにつづく。あとを追う。

大意 日曜 平川楨が来る木原適所もすぐあとにやってきた。

十日

十一日 池内正夫来 告將遊東京余説以桑港之遊

大意 池内正夫が来る。東京に出て学ぼうとしていることを告げる。わたしはサンフランシスコへの遊学をしたらと話す。

十二日 朝訪山下喜市為正夫説桑港之游 喜市曰
思正夫之志如何耳 寓正夫以十二圓金寄之 今井
清槌伝語串山健太郎以其父許洋行 蔵田庫三郎来
有請許之夜為書与清槌 又寄書 沓内徳三託清
槌

大意 朝、山下喜市を訪ね、正夫のためにサンフ
ランシスコへの遊学のことを話す。喜市は、正夫
の志がどうであるのか、それで決めるだけのこと
だ、と言う。たまたま正夫が十二円の金をこれに
さし出す。今井清槌が伝え聞いて話すには串山健
太郎は彼の父の許しを得て、洋行するということ
である。蔵田庫三郎が来る。頼み事があった。そ
れを受け入れる。夜、手紙を書いて清槌に与えた。
また、沓内徳三に手紙を書いて清槌に託して、渡
してもらおうようにした。

補注

沓内徳三 「山田十竹にも学んだ沓内徳三は江戸
時代には藩の句読師にあげられ、維新の際には国
事に奔走したこともあるが、維新後明治十一年淺
野学校の教師となり、また私立自明校を設けた。
のち、明治十八年に官途につき、広島との直接の
関係はなくなったが、自明校時代に多くの人材を
養成したことが注目される。（「新修広島市」に
よる）

十三日 翳 斬髪

大意 くもり。散髪をする。

十四日 中島廉作 串田他也 片山左太夫来
松浦福松入門

大意 中島廉作 串田他也 片山左太夫が来る。
松浦福松が入門する。

補注

中島廉作 明治十八年の修道学校の教員・助教・
授業生として以下の人たちの名が記されている。
校長（文学）山田養吉（算術）友村久次郎（文学）
頼元啓（文学）松浦豊吉（文学）最上克（文学）
末田文之進（体操）中島康作（授業生）佐村和
蔵、玉国光太郎、熊野保吉、宮原久太郎、藤井豊
三郎、平野久雄、岩田弥逸、三谷亀太郎 *網掛
けをしている人名は、この日記に示されている。
「授業生」というのは、授業における助手的な役
割をする人か。

十五日 碓井馨来

大意 碓井馨が来る。

十六日 朝拜年 妹時帰寧 召秀作 演左衛門他
来者五六名

語句 ・帰寧 里帰りする。「寧」父母の喪祭の
ために休暇をとる。喪にこもる。父母の安否を問
う。むしろ。

大意 朝、年賀。妹の時が里帰りする。秀作を呼
び寄せる。演左衛門のほかに来る者は五、六名で
あった。

十七日 終日翳至夜雪

大意 一日中くもり。夜に至って雪。

十八日

十九日 春子廃学校裁縫科

大意 春子が学校裁縫科を辞める。

補注

学校裁縫科 この日記の八月十五日に「初め春子
弘道尋常小学校に入り、今日卒業する。」記され
ている。したがって弘道尋常小学校に在学してい
たことが分かる。「明治十九年九月の学制改定以
後、弘道小学校（尋常小学科）の教育は、終身
読書 作文 算術（珠算）習字 体操 裁縫
（女子は課外に課する）」とある。

*明治二十二年八月、弘道尋常小学校は幟町尋常
小学校と改称される。これより先、明治十七年十
月、これまで所在地名を冠して呼んでいた学校名
を雅号をもって呼ぶようになった。（幟町小学校
→明道小学校）（「新修広島市」）

廿日 山田兵吾来

大意 山田兵吾が来る。

補注 山田兵吾 前出。授業生。

廿一日 蔵田庫之進来 有所請許之 長信雄来
大有所議 余使之走片山氏

大意 蔵田庫之進が来る。彼の頼みごとがある。
それを受け入れる。長信雄が来る。大いに議論す
る。わたしは彼を片山氏の所へ走らせる。

廿二日 朝尚在櫛左太夫既来 中夜孫三郎来
有所泣請

大意 朝、まだ蒲団の中にいたところ、左太夫が
もう来ていた。夜半、孫三郎が来て、泣いてわた
しに頼みごとがあった。

廿三日 日曜 有蔵田之事 救之

大意 日曜 蔵田氏の事があり、これを援助する。

廿四日 区長栗原幹有檄曰欲謀中学校之事 雖極煩 子願勿辭見会 其辞太厚乃衝雨而謀諸平川精一 精一曰 会之 不会則將無伴

語句 ・檄文 自分の主張や考えを強く訴える文書。・諸 これ

大意 区長栗原幹の檄文がくる。檄文には、中学校に関する事を相談したいので、大変に煩わしいと思うが、あなたが会見を断られないようお願いしたい。その言葉は重々しくまるで雨を衝くようであった。そこで、このことを平川精一に相談する。精一が言うには、この人に会いなさい。会わなければ一緒に事を為す人がいなくなってしまうだろう、と。

補注

区長栗原幹 「明治十六年二月、広島市は従来の学区を廃し、全区を一小学区とし、広島小学区と称し、小学校数ならびに学科の等位を定む。」（「広島市史」）明治十九年三月二十九日に栗原区長となる。

廿五日 翳 永尾司馬人賀年書達 一日所発桑港至温知学校聴幹所説 似云高等中学校建築則止之

大意 くもり。永尾司馬人から一日にサンフランシスコで出した年賀の手紙が届く。温知学校に行き、幹の説明を聞く。高等中学校建築のことを言うように思われたのでこの話を止める。

補注

・永尾司馬人 「明治十七年三月 生徒永尾司馬人を校費で東京に留学させた」（「山田十竹先生履歴書」による）また、彼は、明治十九年三月、浅野家が修道学校の経営を廃止され、「修道学校を託されていた山田養吉としては、何としても廃校は忍び難いところであり、『人材育成』は彼自身多年の素志であったのである。意を決した山田養吉は浅野家から支給された学校残費で、七、八名の生徒をサンフランシスコに留学さ」（昭和53年版「修道学園史」）せた生徒の一人であったと思われる。

・温知学校 明治十七年十月、これまで所在地を冠して呼んでいた学校名を雅号をもって呼ぶこととなった。桜川小学校→温知小学校 さらに明治二十三年八月には温知尋常小学校は袋町尋常小学

校となる。

廿六日 武井健輔持其父群司碑文来 余似 蓋余所撰而長束秀穎所書来 訂其誤謬也

語句 ・撰 文章や書物を書き著すこと。述作。撰述。著述。

大意 武井健輔が彼の父、群司の碑文を持って来る。わたしの書いたものに似ている。思うに、わたしがつくった撰文であって長束秀穎が書いたものである。やって来てその誤りを訂正するのである。

補注

長束秀穎 私立浅野学校開校当時の教職員として、理化担任に名前が記されている。（昭和53年版「修道学園史」）

廿七日 朝至栗原氏賛其廃高等中学校建築之説且吐平素持論 栗原氏曰縦使足下請起高等学校中学 余不能起也 且子明日臨達学校則幸甚敢請

語句 ・持論 かねて主張している自分の説。いつも持っている意見。・足下 対等もしくはそれ以下の相手に用いる。

大意 朝、栗原氏を訪ね、高等学校・中学校の建設の考えを捨てるということに賛成した。その上、平素の持論を吐露した。栗原氏が言われるに、かりにあなたに高等学校・中学校を建てることを求められても、わたしは建てることはできないのだ。それにあなたが明日学校にお越しになれば、まことに幸せで、強いてお願いする。

廿八日 応招帰途至長氏

大意 招きに応じて帰途長氏のもとに行く。

廿九日 船越氏寄書曰致題辞会約各五十部 招片山氏議刷搨

語句 ・刷 する。さつとする。・搨（トウ・する） のる。のせる。石碑などの表面に紙をのせて墨のついたたんぽをたたいて石刷りをつくる。大意 船越氏が手紙を寄こして言うには、習字の手本である題辞と会約を各五十部届けてくれということであった。それで片山氏を呼んで、石刷りのことを相談する。

補注

船越氏 船越衛（まもる）天保十一年（1840）～大正二年（1913）広島藩士。幼名を八左衛門、のち洋之介（助）と改めた。明治維新後は衛と称し

た。また松操、松窓と号した。攘夷の論盛んになると山田養吉ら数人と共に相談のうえ脱藩し、事を起こそうとした。文久三年正月、執政辻将曹(維岳)が上京する機会に藩士数人と共に上京。元治元年第一次長州戦争では幕府と長州藩との調停斡旋のために働いた。明治元年戊辰戦争では参謀として参加。明治三年、陸軍大丞。明治七年陸軍省を退いた後は、戸籍権頭、内務権大丞に任命された。明治十三年には千葉県令、同二十一年には、元老院議官となり欧米視察。帰国後、明治二十三年石川県知事、翌二十四年には宮城県知事になった。勲一等旭日大綬章を授けられた。(「三百藩家臣人名事典」)

*戊辰戦争に参加する時、京都で山田養吉先生に会う機会があって、戦争への参加を促したが、先生は「待賓説」をつくり、自らの使命が人材育成にあると述べ、断った。

補注

題辞 教科用図書として習字科之部に、「小学題辞」(一折) 春水 会約 同じく「会約」(一冊) 頼春水 法帖(一冊) 頼元啓 が挙げてある。(昭和32年版「修道学園史」) 会約というのは、「内容からみて春水私塾入門者の心得のため各員に与え、実践を求めた自省、鑑戒の書と思われる。」(益田与一著「頼山陽と芸備の人々」) 文字は春水の真蹟とある。原文は板刻からの刷物。会約は、六項目ある。その一部を紹介する。さきに挙げた著書からの引用である。「一、父母に事(つか)うるに孝を以てし、心を和らげ、敬(つつし)み、順(すなお)なるべし。二、兄弟の際(あいだ)睦まじく、兄としては弟を愛し、弟としては敬い、物我の私之をはじめにする可からず、(人或は自分以外のものと我の関係に於いては、我(私)を先にしないのがよい) 一、およそ年長げる人をば、父兄のごとく敬うべし。以下略す。」

三十日 日曜 至三好氏託題辞裝潢将送之船越氏也

語句 ・裝潢(そうこう) 書画などを表具すること。

大意 日曜 三好のところへ行き題辞の表具のことを依頼し、これを船越氏の許に送ろうと思う。

三十一日 片山生来 有所請 平川氏来

大意 片山氏がやって来る。彼の頼みごとがある。平川氏がやって来た。

二月

一日 拉題辞六部会約四十部託之佐藤慎一明将赴東京 佐々木豊次郎入学

大意 題辞六部と会約を四十部持って行き、これを佐藤慎一に託す。彼は、明日東京に赴かんとしている。

二日 山田兵吾来 文吉来 植田生入学 至佐藤氏○云船越氏

大意 山田兵吾が広島に来た。文吉が来る。植田さんが入学。佐藤氏の許に行き、(○の箇所)の文字がよく分からない) 船越氏が言う。

三日 寺尾生十郎来 如有所欲言○而終不言而去 大意 寺尾生十郎がやって来た。何か言いたいことがあるようであったが、(○の箇所)の文字が分からない) 終に何も言わずに去った。

補注

寺尾生十郎 かつては、広島藩士。文久三年用達所詰となり、年寄辻将曹のもとで用務に参画。慶応二年(1866) 側詰次席。明治元年五月「役人帖」では馬廻組、浅野造酒当支配百二十石。(「芸藩輯要」)

四日

五日 妹時与信雄来 入浴捏巾拭左脛 脛麻痺大驚

語句 ・捏 こねる。

大意 妹の時が信雄とやって来る。入浴して手ぬぐいでこすり、左の脛を拭くと脛が麻痺して大いに驚く。

六日 日曜 片山 木原二子来 山県某

大意 日曜。片山・木原の二人がやって来る。山県某も。

七日 雪霰 聞蔵田山県二家内閣

語句 ・内閣 内々で閲覧・検閲すること。非公式に見たり、調べたりすること。

大意 雪・霰。蔵田と山県の二家がうちうち互いの内情を探っていると聞いた。

八日 語丸山兄以二家相関之状 使之謀之兄走蔵田氏

大意 丸山の兄が互いの内情の探り合い様子を語ってくれた。丸山の兄に二家の探り合いについてど

うしたらよいか考えてもらうようにした。丸山の兄は蔵田氏の許に足を運ぶ。

九日 昨夜間孫三郎来 今朝復来 聞其語有所大安

大意 昨夜、間孫三郎が来る。今朝もまたやって来た。彼の話を知ると、大いに安心するところがあった。

(二家の探り合いの件に関してであろうと思われる。)

十日 数日陰翳 今日始暎影

語句 ・暎(とん) まるい朝日。

大意 数日曇り 今日始めて太陽の光をみる。

十一日 暖和有春意 移瓶梅植庭 移薔薇上瓶

語句 ・暖和 気候が暖かくておだやかなこと。

大意 暖かく、穏やか。春の思いが湧く。花瓶の梅を移して庭に植える。さらに薔薇を上瓶に移した。

十二日 左太夫来 有所請充之

語句 ・充(いん) まこと。ゆるす。かどをたてずに相手の意見を聞き入れる。

大意 左太夫が来る。頼み事をする。これを受け入れる。

十三日 日曜 今日亦好晴 遠藤生寄書 報売地 其価百三十一円十七銭

大意 日曜。今日もまたよく晴れた日。遠藤さんが手紙を寄こす。売り地の価格が百三十一円十七銭だと知らせてくる。

補注

遠藤可一 昭和32年版「修道学園史」に「水山烈校主承継 校主山田養吉の逝去によって昼間の漢学教授は自然廃止となり、独り中学課程普通学の夜間教授のみとなって校運も一頓挫を来たさんとしたのであるが、学校拡張委員等は更に協議して、水山烈を推して校主とし、故校主の遺図を継承して、所期の目的達成を期し重ねて左の宣言書を発したのである。(途中省略) 明治三十四年十一月 修道学校拡張委員」として稲田康太、伴資建、頼弥次郎らの名が連ねてある中に、遠藤可一の名が見える。

なお、「尚古」に掲載されている、花井卓蔵の「私は九歳にして山田十竹先生に学ぶ」の文章に「その時、(東京の)我善坊町の塾時代の遠藤君の

立場に居たのが長(永)尾司馬人君で～」と書かれている「遠藤君」と同一人物かと思われる。

十四日 翳 松浦鶴松父来 請鶴松入塾 北川精一来 請借伝習録

大意 くもり。松浦鶴松の父が来る。鶴松の入塾をねがう。北川精一が来て、伝習録を借り受けたという。

補注

伝習録 中国の儒家書。三巻。明の王陽明の言や手紙を、門人の徐愛・陸澄・薛侃が筆録したもの。心即理、致良知、知行合一の三綱領を中心に陽明学の大要がつくされている。

十五日

十六日 訪米人 奠墓於常専寺 至三井銀行

語句 ・奠墓 墓に参る。

大意 米国人を訪ねる。常専寺に墓参りにいく。三井銀行に行く。

補注

常専寺 浄専寺のことか。真宗。佐東郡金山竜原にあったが、仏護寺(現在の広島別院)と共に天正17年広瀬村に移り、慶長14年に現在の寺町に移る。

十七日 以鼠鬚付田坂爲助製筆 左太夫来 鶴松入塾

語句 ・鬚 シュ・ひげ。柔らかいあごひげ。動物の柔らかい口ひげ。

大意 鼠の鬚を用いて田坂爲助が筆づくりにつける。左太夫が来る。鶴松が塾に入る。

十八日

十九日 決意築校舎告諸書生 夜始講明治小学

大意 校舎建築を決意し、すべての学生に話す。夜、始めて明治小学を講義する。

補注

明治小学 明治十二年発刊。山田養吉著。宋の朱子が編集した小学にならって、古人の言行を挙げて、初学者に道徳を教えるものであるが、朱子の小学と異なるところは、広く日本・西洋・中国の三方面から資料を取っている点である。西洋の資料を漢文で表現してあるが、明治の初年にあたって漢学者であった先生が西洋の知識を取り入れるのに如何に熱心であったかを知ることができる。巻頭に中村正直先生の題詞及び十竹先生の自序が

ある。(昭和53年版「修道学園史」)

廿日 日曜 朝復講明治小学 爾後毎日曜講之
大意 日曜。朝、また明治小学を講義する。これ
から以後毎日曜ごとにこれを講義することにした
い。

廿一日

廿二日 巡査来 問曰教諸生否木村文槌 対曰先
生教以為娛耳 蓋以其未得官允 故答如 区庁吏
吉村正順来 問高等中学校募金事 篠田六郎来言
為進徳教授教員

語句 官允(かんいん) 官庁の許可。

大意 巡査がやって来た。学生諸君を教えている
のかどうかを尋ねる。それに対して木村文槌が答
えて言う。「先生が教えておられるのは、ただ教
えることが楽しいからというだけのことだ。つま
り、いまだに官庁の許可をもらっていない。それ
だから答はこのようになる。区の役人、吉村正順
が来る。高等中学校の募金のことについて質問す
る。篠田六郎が来る。進徳教授(校か)教員にな
るのだと言う。

補注

進徳教授 進徳教校の教員のことか。進徳教校は
安芸門徒の寄付で広島に設置された学校(現崇徳
中・高校)。1877年(明治10)年広島市寺町、円
龍寺に進徳教校設置。翌1878年に仏護寺(現広島
別院)境内に移され1882年(明治15)年には学校維
持と布教を目的とする進徳教社が結成され、「興
学の進徳教校・布教の進徳教社」という分業体制
ができあがった。翌1883年には新校舎が広島市楠
木町(現在の崇徳学園所在地)に完成し、落成式
に臨んだ本願寺宗主門如により「崇徳」と命名さ
れたため、学校は崇徳教校、教社は崇徳教社と改
称された。崇徳教校はのち1900年(明治33)本山
の指示により広島仏教中学となり、1902年には全
国の17の仏教中学が5校に統合され、本山直営に
なったのに伴い、第四仏教中学校と改称。1912年
(明治45)第四仏教中学が兵庫県六甲山に移転さ
れたため、崇徳教社は中学校地を利用して、1913
年(大正2)普通中学として崇徳中学を開校。原
爆の被害を受けたものの1948年(昭和23)には新
制高等学校として復活。現在に至っている。
(「広島大百科事典」)

廿三日 夜訪山内戒三訂詩

大意 夜、山内戒三を訪ね、詩の校訂する。

補注 山内戒三「(県立広島師範学校は)明治
七年(1874)十二月十一日に開業式を挙げた時、
教員三人(水谷貞、山内戒三、鈴木誠造)と事務
員二人が祝辞を述べであった」と「広島市学校教
育史」に書かれている。ここに山内戒三の名が見
える。

廿四日 曩上学校規則於官 乞允許 手島参之助
改竄之 逕納曰如此則大全 而余猶不知所從

語句 ・曩 さきに ・允許(いんきよ) 許可
・改竄(かいざん) 書き換える。現在では多く
自分の都合のいいように直す意に用いる。・逕
(とう) およぶ。あとからあとから追いかけて、追
いつく。

大意 さきに学校規則を役所に届け、官許を願
い出た。手島参之助がこれを書き改めて、あとを追
って納めて言うには「このようであれば大いに完全
である」と。しかし、わたしがなおどのようにす
ればよいのかわからない。(*○の箇所文字不明)

廿五日 朝至区庁請 参之助与飯島浦太郎来 草
規則二人諾廿七日来 少教正藤井稜威投檄曰築神
宮○ 願足下為之委員 敢託余辞之

大意 朝、区役所に行き、請願する。参之助が飯
島浦太郎とともにやって来た。規則を起草する。
二人は二七日にやって来ることを承諾した。少教
正、藤井稜威が檄文を出して言うには、「神宮の
○を建築する。あなたにはこの委員となるよう敢
えて依託したい。」と。わたしはこれを辞退した。
*○の箇所文字不明

廿六日

廿七日 日曜 飯島 手島 二生来 為余定規則
松原亀太郎亦来

大意 日曜。飯島・手島の二人が来る。わたしの
ために規則を定めてくれた。

廿八日 黄昏小雨(夕暮れ 小雨)

三月一日 翳(くもり)

二日 翳而微雪 遠藤可一致書曰船越子有以小学
題辞与会約為小中学用書之意 二書皆春水先生
所書法帖

語句 ・法帖 手本

大意 曇っていて僅かに雪。遠藤可一が手紙を寄こして言う。「船越さんは、小学題辞および会約を小中学用の書の手本としたいという考えがあるようだ。」と。二つの書はいずれも春水頼先生の書かれた法帖である。

補注

春水 頼春水。延享三年(1746)～文化十三年(1816) 広島藩儒。諱は惟完または惟寛、字は千秋・伯栗、通称を弥太郎、号は春水・霞屋・拙巢・和亭などと称した。延享三年六月晦日賀茂郡竹原下市に生まれる。父は享翁(惟清)、母は道工助右衛門のむすめ、中。本姓は岡本氏。先祖は三原の人で小早川隆景に仕えたが、のち正茂(道円)のとき竹原下市に住し、商人となって頼兼屋と称した。そののち、姓を屋号の頭文字をとって中国風に「頼」と改めた。春水は幼いときから学問を好み、竹原照蓮寺の獅絃に学問の手ほどきを受け、同寺の客僧超倫に就いて書を学んだ。次いで郷医塩谷志帥の家塾竹原書院に学び、十四歳のとき忠海の平賀中南に、十九歳のとき大坂に行き、趙陶斎を泉州堺を訪ねて書を学んだ。いったん帰郷したのち明和三年二月、二十一歳のとき再び父の指示で大坂に出て、片山北海の混沌社に入学し、朱子学を修めた。その後は江戸堀に家塾を開き、三十六歳まで町儒として活躍した。安永七年十二月「大日本史」を七代広島藩主浅野重晟に献上し、天明元年十二月十七日、吉川禎蔵らの推薦もあって三十人扶持をもって藩儒に登用され、広島に移った。これより先の安永八年、大坂で儒医飯岡義斎の二女静(梅颯)婚姻し、長男山陽が生まれており、遅れて広島に転居した。翌二年正月七日藩の学制に関する意見書を提出。二月十一日の学問所開設以後は、その教授となって朱子学をもって藩学を中心とし、他の学派を異学として斥け、幕府の寛政異学の禁に先立つなど藩学の興隆に尽くした。同三年江戸詰を命じられ世子斉賢の侍講を勤め、同八年七月十四日奥詰次席、寛政二年八月杉の木小路に邸を賜り、六年五月「芸備考義伝」の編修を命じられ、同年九月編纂を終え、また同八年八月、社倉法について意見書を提出するなど、藩の文教施策等の中心として参画した。同七年百五十石を給され、側詰同格に列し、文化四年さら

に三十石を加増されて三百石にまで累進した。実弟に春風、杏坪があり、杏坪は同じく広島藩儒に登用され、修史事業などに携わり春水をよく補佐した。早くから陸奥白河藩主の松平定信と朱子学を通じて親交があり、天明五年「学統論」を起草して献納した。このほか著書に「春水遺稿」「在津紀事」「師友士」「春水詩文稿」「游忠海記」「高雄記」「遊湖詩巻」「東遊負劍録」「東遊紀行」「竹館録」「学統弁」や、三十六歳から七十歳までの日記「春水日記」がある。文化十年の冬から病気になる、同十三年二月十九日没。享年七十一歳。比治山安養院に葬る。その跡は長男山陽が脱藩を企てたため廃嫡し、文化元年春風の子景讓(元鼎)を養子としたが、同十二年病没したため、山陽の子聿庵が継いだ。(「三百藩家巨人名事典」)

三日 好天気 大有春意 木原適所来 有所請余許之

大意 良い天気。大いに春の気配がある。木原適所が来る。願うことがある。わたしはこれを受け入れる。

四日

五日 始搦題辞 齋藤爲信父○甲壽筵見招 客至者七八十人 客中有近藤俊吾 謂余曰足下 知向井行義乎 僕豊後人爲帆足文簡翁門人 僕之来広島過辞翁 翁日子至広島則致言向井行義 乃欲面行義 不在家 足下見行義則幸代僕致翁之意 出一刺託余 余於是大 感其敦厚不措人 之託如広島人則方人之託言随承随忌雖余亦不免也 可不自警乎 夜山田脩平自格子外呼曰帰矣 蓋自東京帰也

語句 ・寿筵 長寿の祝い。 ・敦厚 真心が厚い。親切でまごころがこもっていること。 ・刺名刺 ・措 おく。そのままにしておく。

大意 題辞の石刷りを始める。齋藤爲信の父、○甲の長寿の祝いに招かれる。集まった客は七、八十人であった。客の中に近藤俊吾という人がいた。わたしに向かって「あなたは向井行義という人を知っておられるか。わたしは豊後の人間で、帆足文簡翁の門人である。わたしが広島に来たのは、翁のもとに別れの挨拶にたち寄った際、翁が言われるには、広島に行ったならば、向井行義にわたしの言葉を伝えて欲しい、と。そこで向井行義に

面会したいと思ったが、家には居なかった。あなたが行義に会うことがあれば、幸いなことにわたしに代わって翁の思いを伝えて欲しい。そこで、一枚の名刺を渡しに託した。わたしはそこでそのまごころの厚いことに大いに感動した。余人をもってかえることのできないような、この依託はまるで広島人にするようであった。ふつうはまさに人の依託された言葉は、聞くにままた、忘れるままたというようになる、ただわたしもまたそのことを免れることはできないのであろうか、そのようにならぬよう、みずから戒めないでよかろうか、自戒しなければならぬ。夜山田脩平が格子の外から声を掛けて、言うには帰りました、と。思うに東京より帰ったのである。

補注 山田脩平 浅野学校開業当時の職員。

六日 日曜

七日 騰学校規則於官其疏言不如式 長信雄来改書之賈 返曰明将果上

語句 ・騰 高いところへあげる。 ・疏言(そげん) 解説のことば ・式 きまった型 様式 ・賈(もたらす) 人のもとへ持って来る。

告げ知らせる。ある事態を引き起こす。

大意 学校規則を役所に上呈する。その規則の解説は、定まった様式によらない。長信雄が来る。改めてこの解説を書いて持ってきてくれた。返事として、明日提出することにする、と。

補注 学校規則 昭和32年版「修道学園史」によると、

「修道校々則

- 一、名称 修道学校ト称ス
- 二、位置 安芸国沼田郡広島区八丁堀二番邸内
- 三、学科 学科ハ修身、歴史、作文、数学、習字、体操ノ六科トス
- 四、教則 生徒教養ノ目的

第一条 本校ハ漢籍ヲ授ケ道徳ヲ修ムルヲ以テ主旨トス

学期

第二条 学年ヲ分ケテ二期トス第一期ハ九月一日ヨリ翌年二月十四日ニ至リ第二期ハ二月十五日ヨリ七月十五日ニ至ル

以下 省略」

八日 訪汶淵翁 蓋余之西来託書卷於西方寺与山城軒 翁之上京余使之齎還 令謝之也

語句 ・齎還 持って帰る

大意 汶淵翁を訪ねる。思うに、わたしの西来に西方寺、山城軒とへの書簡を託した。翁の上京に際してわたしは翁に持って行って届けてもらうようお願いをした。それでこのことお礼をいうためである。

九日

十日

十一日 妹時来

大意 妹、時来る。

十二日 雨

十三日 翳 汶淵持遠藤生所託書来

大意 くもり。汶淵が遠藤さんの託した手紙を持って来る。

十四日 好風晴日 大理梅発二花

大意 いい日和。梅の花、二輪開く。

十五日 立野従兄三年祭 其招

大意 立野従兄の三年祭。その招きに応じる。

補注

立野従兄 立野一郎 「山田十竹先生履歴書」に「養吉が友と談ずるごとに、わが藩にしっかりとした人材がなくて財力もない、これからどのようにすればよいのであろうかと歯ぎしりして激しく憤り、悲憤の涙を流すのであった。養吉には従兄弟がいる。立野一郎といい、深く国事について憂いていた。その時江戸にいた。」と述べられている。

十六日 聞鯨魚上草津 与名草 松浦 二生児二郎往観之而其体既解只見盛槽之腸与巨骨臭氣 衝鼻耳 帰路到新溪観梅花 花既残爛 不足観

語句 ・残 そこなう。 ・爛 ただれる。形がくずれる。

大意 鯨が草津に上がったと聞く。名草と松浦さんの二人がわが子二郎と出かけて行ってこれを見る。しかし、鯨の体はすでに解体して、ただ鯨のはらわたが巨大な骨と一緒に槽に盛り上げてあった。その臭気が鼻を衝くだけであった。帰路、新溪に行き、梅花を見る。花は既に咲き落ちていた。見るほどのものではない。

補注 二郎 養吉の二男。長男得一郎が明治十七

年に亡くなったので、跡を継ぐ。昭和2年7月16日没。

十七日 広田文吉承官命 将上京 来請余

大意 広田文吉が官命を受け、まさに上京しようとしている。わたしに来てくれという。

十八日

十九日 応広田文吉招

大意 広田文吉の招きに応じる。

廿日 日曜 与片山 長山 岡 三子訪中島康作
於宇品 焼鰻煮蛤飲其茅屋

語句 ・茅屋(ぼうおく) かや、わらなど葺いた屋根、またその家。みすばらしい家。あばら屋。また、自宅をへりくだっている。

大意 日曜 片山さん、長山さん、岡さんとの三人と宇品に中島康作を訪ねる。鰻を焼き、蛤を煮て蕨茸きの家で飲む。

廿一日 至饒津公園地訪平川氏 岩本元行亦在共出門 遂訪岩本氏

大意 饒津公園地に行き、平川氏、岩本元行を訪ねる。また共に出かけっていた。ついに岩本氏を訪問する。

補注 饒津公園 饒津神社の境内一帯を公園としたもの。

廿二日

廿三日

廿四日

廿五日 両三日前岡村 脇君見過 今日亦見過

大意 両三日前、岡村、脇君に立ち寄ってくれた。今日もまた立ち寄られた。

廿六日 有人話宇品築港費所募三万金而所用十六万金 所築堤三潰 一潰費三千金 長 片山二子交説所設学校加洋学科 余従之

大意 ある人の話しでは、宇品築港の費用、募ったところ三万円、使用したところ、十六万円。建設した堤防三カ所決潰。一方所の決潰の費用は三千元だと言う。長さん、片山さんの二人がこどもも説得するところは、学校に洋学科加え、設けよとのことである。わたしはこの説に従う。

補注

宇品築港 明治13年(1880)3月広島県令として赴任した千田貞暁は、就任早々県内を巡視し、「到ルトコロ貨物渋滞、生産不振」の状況をみて、

その打開策として道路の改修と宇品築港を企画した。明治14年(1881)5月末に申請。工費18万金を切りつめて87108円とする。明治17年(1884)2月工事契約。7月起工式。工事は難航した。潮止め工事の満潮による崩壊、怪漢による樋門の破壊、高潮による堤防の決壊などに加えて人夫費・材料費の騰貴による資金不足などに悩まされた。そのため千田は再三再四国庫補助の申請をはかり、ついに工事の遅延と計画の粗漏を理由に懲戒処分をうけるほどであった。こうして明治22年(1889)11月、当初予算の三倍以上の30万円余を費やしてようやく完成した。こうしてできた宇品港も当初は無用の長物視されるありさまで、千田が予言したように宇品港が「一地方ノ便利ニ止マラズ、広ク海陸ノ両軍ノ兵事ニ在リテモ一大便益ヲ与フ」るのは日清戦争開始前後からである。(「広島県の百年」より)

廿七日 日曜 法律学校挙開業式 原田東三郎致書招余抵此

大意 日曜。広島法律学校開校式を挙行する。原田東三郎が手紙をくれて、わたしを式に招待する。これに出席する。

廿八日 太田徳三郎使人来贈酒乞書其父墓字余乃乞之頼元啓分酒贈之

大意 太田徳三郎が人を寄こして来て、酒を贈り、彼の父の墓石の文字をわたしに書いて欲しいと懇請させた。そこでこれを頼元啓に依頼した。それで贈られた酒を元啓に分け与えた。

補注

頼元啓 頼誠軒 文政十二年(1829)～明治二十七年(1894)広島藩儒。名は元啓、字は子明、通称は、東三郎、父は広島藩儒頼幸庵で、山陽の孫、春水の曾孫にあたる。安政三年父の没後その後を継ぎ、知行百三十石、ほかに書物料五両を給され、儒医組外様に置かれた。学問所教授として家学の朱子学を講じたほか、詩文・書をよくした。明治二年版籍奉還後の制度改正により永世禄二十五石、中士に置かれ、学校係の教授となった。晩年には広島において家塾を開き、家学を中心に訓育した。明治二十七年五月三十日没。享年六十六歳。比治山安養院に葬る。その跡は長子元緒(通称弥次郎、古樸と号した)が相続。その後は成一(名は元学、

楳匠と号した)一惟勤と続いている。(「三百藩家臣人名事典」)

廿九日 梓人慶助始来 見奉学校建築条約

語句 ・梓人(しじん) 大工。

大意 大工慶助が始めて来る。学校建築条約を奉上された。

補注

学校建築条約 校舎建築請負定約書

定約書証

一、今般学校御建築一式明細書金高ヲ以テ御受負仕候二付、御図面之通り無相違相調申候、万一不都合之義仕候時ハ御中止相成候トモ不苦候事

一、柱立並二棟上之節一酒一肴御出被下候外、茶菓二至ル迄一切御構被下間敷候事

(中略)

一、御普請皆出来之義ハ手斧初ヨリ四十日ヲ期シ棟上げ候事 但シ意外之天変御座候時ハ此限二無御座候

(以下略)

明治二十年三月廿六日

広島区大手町八丁目七十四番地

受負大工 西本 藤助 印

山田 様

(なお、校舎の建築は、三月三十日から着手して、五月四日 十二の教場落成したので、同五日から授業を始め、更に同月廿五日悉皆落成した。塾改築に着手したので塾生を第四教場に移し、三十一日落成塾生をその塾に移して、本授業をすることとなった。(昭和32年版「修道学園史」)

三十日 慶助運林板材来 家塾前後無容足

語句 ・家塾 今で言う寄宿舎

大意 慶助が林板材を運び来る。家塾は前後足の踏み場もない。

三十一日

四月

一日 今日始用斤 謂之斤始 供酒 太田徳三郎来

大意 今日始めて斧を使い始める。これを斧始という。酒をもてなす。太田徳三郎が来る。

補注

原文には、「斤」の文字になっているが、ここは「斧」とすべきところ。斧始とは、家を建てる時、

材木にはじめて斧を入れること。

二日 雨

三日 日曜而紀元節 雨乍霽 朝訪太田生於東横町川本家

語句 紀元節 もと、四大節の一つ。「日本書紀」に神武天皇即位の日とする一月一日を太陽暦に換算したという二月十一日を祝日と定めたもの。明治五年(1872)制定。・霽(セイ)はれる。

大意 日曜でしかも紀元節。雨が降ったり、晴れたり。朝、太田さんを東横町の川本家に訪ねる。

四日 昨暮寒甚 今朝遠峰見雪 手嶋兵次郎寄書曰先生近状如何 永尾君毎寄書於生問先生近状 先生請見報近状則生将転報君

大意 昨日の暮れ方は寒さが厳しかった。今朝は遠くの峰に雪が見えた。手嶋兵次郎が手紙を寄せて、「先生の近況はどのようですか、永尾君が手紙をくれるたびごとに先生の近況を問うてきます。先生に近況をお知らせくださいますようお願いいたします。そうすれば、永尾君にそれを知らせてやりましょう。」と。

補注

手嶋兵次郎「修道学園史」(昭和53年版)に「明治十七年七月司法省法学校の学生募集があったとき、校長山田養吉は前途有望なる学生、手嶋兵次郎、山香次郎吉、梶山延太郎、秦野健二等を応募させた。」と記されている。

五日 名倉政衛寄書乞金 余答曰余所借小島三代蔵金四百円 子取石井 宮川学資各要七円而陸軍学校尋将減其三元則学資或有餘 玉国生爲士官生徒爲官費則学資亦或有餘金子弟乞其餘

語句 ・尋 ついで。

大意 名倉政衛が金を都合つけて欲しいと手紙で言ってきた。わたしは、それに答えて、「わたしが小島三代蔵に貸している金が四百円ある。石井・宮川の学資が各七円必要で、そして陸軍学校がついで学資として三元を差し引くであろうから、学資は或いは残金があると思うので、あなたがそれを取りなさい。玉国さんが士官生徒となる。官費であるので、学資もまた或いは残る金もあろう。子弟はその残る金をあてにしている。」と言う。

補注 玉国生 玉国光太郎。授業生。

七日 平川生来 長信雄来

大意 平川さんが来る。長信雄が来る。

八日 応潮氏の招

大意 潮氏の招きに応じる

九日 爲校中加洋学科之疏付長信雄上之官

大意 学校の教科の中に洋学科を加えるための趣意書を作り、長信雄に持たせて役所に上程する。

十日 日曜 中島康作来 供酒 夜雨

大意 日曜 中島康作が来る。酒をもてなす。夜、雨。

十一日 雨

十二日 風暴 欲飛障 天野代五郎来請売山陽書

大意 風が激しく吹く。障子を飛ばしそうになる。天野代五郎が来て、頼山陽の書を買ってもらいたいと願う。

補注

山陽 頼山陽 安永九年(1780)～天保三年(1832) 江戸後期の儒者、詩人、歴史家、書家。名は襄、字は子成または子賛、通称久太郎といい、仮の名を憐二、徳太郎といった。号は山陽のほか三十六峯外史などを唱えた。父は広島藩儒頼春水、母は飯岡義斎の女静(梅鷗)。頼春風、頼杏坪は叔父にあたる。安永九年十二月二十七日に大坂江戸堀北一丁目に生まれた。天明元年父春水が広島藩儒となったため、翌年母とともに広島に移り、同八年から藩学問所に入所。武術は藩士築山嘉平通欽に就いて貫心流の剣を学んだ。寛政九年叔父杏坪に従い江戸に遊学し、幕府の昌平坂学問所の教授尾藤二州に師事し、経学・国史を学んだ。翌年帰国。同11年御園道英の女淳と結婚したが、翌年九月父春水が江戸詰中、広島を出奔。しかし十一月広島に連れ戻され、脱藩の罪に問われ自宅の一室に監禁された。享和元年二月淳を離縁したが、この月長男余一(聿庵)が生まれた。同年廢嫡を藩から許可され、春水の弟春風の長子景讓が春水の養子となる。同年十二月幽閉を解かれ、文化二年赦免され学問所の助教に挙げられる。同三年「日本外史」を豊臣氏まで脱稿。同六年十二月から備後神辺の菅茶山の塾に身を寄せ、同八年二月上京、その後は儒者・文人として身を立て、篠崎小竹・梁川星巖・大塩平八郎らと交わって地位を確立、京都で別家を立てた。同十一年正月、京都の医師小石元瑞の女梨影を後室に迎え、支峰・

三樹三郎(鴨涯)らが生まれた。文化四年「日本外史」「新策」の稿本を完成したのちも、加筆・修正を続け、文政十年「日本外史」二十二巻を、陸奥白河藩主松平定信に献上。「新策」はのち「通義」の底本となり、「日本政記」とともに代表作となった。詩文としては、「山陽遺稿」「日本樂府」などを著し、また文政元年から翌年にかけての九州への旅行をはじめ各地への旅行中紀文・詩文・絵画を多く著した。朱子学については「書後」「春秋講義録」のほか未稿「尚書」「易経」「孫子」、その他「先友録」「書後題跋」「文集」などその数は多く、「日本外史」を始めとする歴史書の著述による、幕末以降思想界に与えた影響は大きい。天保元年病氣となり、同三年六月十二日没した。享年五十三歳。京都東山の長樂寺に葬る。(「三百藩家臣人名伝」)

十三日 栗原政蔵来 談頗可聴

大意 栗原政蔵が来る。彼の話は大いに傾聴に値する。

十四日 雨

十五日 学校建柱 供酒

大意 学校の柱建て。酒をもてなす。

十六日 三上清太郎以小児来託之 午後与片山友村数子遊横川

大意 三上清太郎が小さいこどもを連れて来て、これを預ける。午後片山、友村など数名とともに横川で遊ぶ。

十七日 家大人長逝今茲爲廿年 脩祭合祖先而祭 会者三十餘人

語句 脩 おさめる。すらりと姿を整える。

大意 家長が亡くなって現在ここに二十年となる。その祭をきちんと行い、祖先のみ霊を合わせてまつ。これに参会した者は三十人ばかりであった。

補注

家大人長逝今茲爲廿年 家大人 家長。父、山田三太。旧広島藩士、歩行組。「十竹軒日録」(自慶応戊辰八月朔 改元明治)の前文にあたる部分に、これ以前に書いたものが江戸から広島に船便で送る際、豆州の海に沈んでしまったと嘆いておられることが記されている。そしてそれまでのことのあらましが述べてある。そこに「家大人閏四月十八日をもって長逝」とある。慶応四年(1868)で

ある。この日記の時点は、明治20年(1887)であるので、20年になると言われるのである。

十八日 今日長氏孺人与其孫女来

語句 孺人 妻の通称。

大意 今日、長氏の奥さんが孫娘と来る。

十九日 小鷹狩元凱来

大意 小鷹狩元凱が来る。

補注 小鷹狩元凱(こだかりもとよし) 旧広島藩士小鷹狩正作、通称介之丞の養子となって家を継ぐ。山下弘毅の三男。「尚古」に「山田十竹先生に七十式年前学ぶ」という文章が載っている。

山田養吉より十三歳年少。「元凱十著」に収められている著作は、「芸藩三十三年録」、「広島蒙求」、「広島蒙求次編」、「芸藩学問所記事一片」、「芸備協会略志」、「弘洲雨屋虫干集」、「弘洲雨屋虫干集外編」、「広島雑多集」、「自慢白島年中行事」、「梅月遺影」である。

廿日

廿一日 栗原区長伝檄曰欲謀中学校之事子夫会誓願寺 乃抵此

大意 栗原区長が檄文を伝えて言うに、中学校のことを相談したいので誓願寺で会いたい、と。それで誓願寺に行く。

補注 誓願寺 浄土宗。「紫雲山・光照寺と号す、材木町に在り、藩制時代は京都誓願寺の末寺にして、浄土宗西山派に属し、慈仙寺と交番触頭たり、本尊は開山惠空感得の阿弥陀仏なり」(「広島市史」による) 現在は三滝に移っている。

廿二日 蔵田氏有所逕 乃片山氏待丸山氏

語句 逕(トウ・およぶ) 及ぶ。追いつく。

大意 蔵田氏が追いついてきている。そこで片山氏が丸山氏を待つ。

廿三日 麁講而閲詩文

語句 ・閲 丁寧に読む。いちいちあたってよしあしをみる。

大意 講義をしないで、詩文の出来のよしあしを検討する。

廿四日 日曜 先是淺野大光公生母妙信尼逝 今日呈菓子於靈前

大意 日曜。これより先、淺野大光公の生母である妙信尼が逝去されて、今日お菓子を靈前にお供えする。

補注

淺野大光公 淺野慶熾(よしてる)天保七年(1836)~安政五年(1858)大十五代藩主。英才と言われながら二十三歳で死去し、惜しまれた。治世五ヶ月。大光公：法号。

生母妙信尼 父齊肅の正室。將軍家齊の女(むすめ)末姫。墓所は新庄山墓地。

廿五日 送妙信尼靈柩至日通寺

大意 妙信尼の靈柩をお見送りして日通寺に行った。

補注

日通寺 日通寺観音堂。広島市東区牛田新町にある。単立(日蓮宗系)山号は英心山。本尊は十界大曼荼羅。寛文三年(1663)広島藩主淺野家の山莊日新館があった牛田新山に三代藩主綱晟を埋葬。当時の藩主菩提寺であった尾長の国前寺が番僧を配して墓所を守っていたが、元禄初年(1688)幕府の日蓮宗不受布施派禁圧が始まり、同四年(1691)広島藩は国前寺の不受布施を停止、翌年(1692)11月に二代藩主光晟夫人自昌院の意向で国前寺領200石を収公し、菩提寺も天台宗寺院へ改めることになる。この時賀茂郡国吉村の阿弥陀寺という天台宗の古寺を現在地に移築。自昌院の法名英心日妙と先に葬られていた法名徹性日通から現山号を付した。以後8年間は城下の天台宗松栄寺の管理下にあったが、元禄12年(1699)7月日蓮宗へ改宗、越後国本成寺の末寺となる。(角川「広島県地名大辞典」)

廿六日

廿七日

廿八日 前堅教場柱供酒 匠人令今堅楼柱 柱長棟大匠人労働倍於前 乃又供酒

大意 以前、教場の柱建てをして、大工に酒をもてなした。今回、また二階建ての柱建てをさせる。柱が長く、棟が大きい。大工の勤勉な働きぶりは以前に倍する程だ。それでまた酒をもてなす。

廿九日

三十日

五月

一日 訪平川生

大意 平川さんを訪ねる。

二日

三日

四日 鉄砲町失火

大意 鉄砲町に失火がある。

五日 第一第二教場成 始授業 来者三十二人
浅野氏見招 詣日通寺展妙信尼墓

大意 第一第二教場が完成した。授業を始める。
やって来た者は三十二人である。浅野氏が招かれた。
日通寺参拝して、妙信尼のお墓にお参りする。
補注

「修道学園史」(昭和53年版)に「明治二十年(1887)三月二十日校舎の建築に着手して、五月四日十二の教場が落成したので、翌五日から授業を始め、二十五日には校舎のことごとくが落成した。塾も改築に着手したので、塾生を第四教場に移したが、三十一日落成して塾生を塾にもどし、本授業が行われるようになった。」と記されている。

六日 学則未整頓検点 製事業表

大意 学則がいまだに整理・検討されていない。
授業表を制作する。

七日

八日 日曜

九日 数日間来学者陸絶不絶 忙亦極

語句 陸 断絶して連なるさま。

大意 数日間、学校への訪問者続いて来たり、途絶えたりという状態で、その忙しさもまた極に達する。

十日 起校舎 衆工大抵自三田来 其住広島者都料匠一任而已 而校舎将成以不必要多手工 有去還其郷者 故供酒劳慰其劳

語句 ・都 すべて。 ・料匠 調理職人。 ・手工 大工職人。

大意 校舎を建てる。多くの大工はたいてい三田辺りから来ている。その住まいが広島である者は、全てで料理職人ただ一人だけである。それで、校舎の完成間近であるということで、必ずしも多くの大工の手を必要としない。それで郷里に帰行く者がいる。それゆえ、酒をもてなしてその労を慰勞する。

補注

三田 三田村、江戸期～明治二十二年の村名。三篠川に沿う中筋往還は広島城築城の際、吉田～広島を結ぶ最短経路として整備された。西南戦争に

徴用された者が福岡県から屋根葺もたらし、広島屋根葺の名声を得た。(「角川広島県(地名大辞典)地名大辞典」)

十一日 深町三郎左衛門来 託修漢書之生余辞之手島資健来

大意 深町三郎左衛門が来る。漢書の修得を望む生徒を託そうとする。わたしは、これを断った。

十二日 杉江春二来 乞学校添作文科 生徒原田正松来言国史略業之不振

大意 杉江春二が来る。学校に作文科を添え加えることを求める。生徒原田正松が来る。国史略の学業の不振であることを話す。

十三日 上街買書

大意 書物を買いに街に出かける。

十四日 思置変則科

大意 変則科を設置することを思慮する。

十五日 日曜

十六日 頼弥次郎来 暮至頼氏聘弥次郎

大意 頼弥次郎が来る。暮れ、頼氏のもとへ行き、弥次郎を招聘する。

補注 頼弥次郎 頼誠軒(元啓)の長子元緒。古楳と号した。

十七日

十八日

十九日 以題辞与会約託奥田珍蔵転致船越氏 夜雨

大意 習字の教科書、題辞ならびに会約を奥田珍蔵に託して船越氏のところへ行ってくれるように頼む。夜、雨。

廿日

廿一日

廿二日 日曜

廿三日

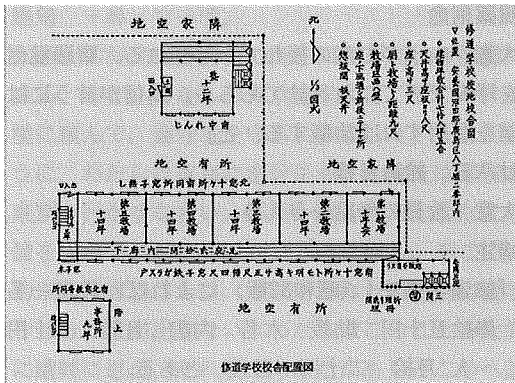
廿四日

廿五日 学校五教場与楼皆落成 乃宴匠与諸教員生徒 今日改築塾舎移塾生於第三教場

大意 学校の五教場および二階がみな落成した。そこで、大工とすべての教員・生徒と祝宴を開く。今日塾舎を改築する。塾生を第三教場に移動する。

廿六日 昨欲招山岡而佚其名不招 今日乃招之

語句 ・佚(いつ) するりと抜ける



昭和32年版「修道学園史」より

大意 昨日、山岡を招こうと思って、その名が落ちていて、招くことができなかった。今日それで山岡を招く。

廿七日 廿八日 廿九日

三十日 塾舎亦成歸塾生

大意 塾舎もまた完成した。塾生が移動先から帰ってきた。

六月一日 学科中加挿洋学 倩平川吉之助爲教師
丸山兄亦上校執事務

大意 学科の中に洋学を加える。平川吉之助が教師になりたいと求めてくる。丸山の兄もまた学校に来て事務を執る。

補注

「修道学校校則」(昭和32年版「修道学園史」)には、学科ハ修身、歴史、作文、数学、習字ノ六科トス」となっているが、この課程表のほかに、「英学科課程表」が示されている。「洋学を加える」というのは、変則的に「英学科」が加えられたものと推量される。

二日

三日

四日 倩頼弥次郎爲漢学教師

語句 ・倩 もとむ。やとう。人に代理を頼む。

大意 頼弥次郎に漢学の教師になるように頼む。

五日 日曜

六日 平川生病 瘧不能上校

語句 ・瘧 (おこり) マラリヤ。

大意 平川さんがマラリヤを病み、学校に出られなくなる。

七日

八日 丸山兄不能上校

大意 丸山の兄が学校へ出られなくなる。

九日

十日

十一日

十二日 日曜

十三日

十四日

十五日 詩会 今日悌吉誕

大意 詩会。今日、悌吉の誕生日。

十六日

十七日 先是友村久次郎約来爲算学教師而久次奉職偕行社 職事忙劇 未能来 今日始来日 将從廿日上校

大意 これより先、友村久次郎が約束をとりつけてやって来る。算数の教師になって、久次(郎)が偕行社に奉職する。仕事の忙しさは激しい。それでいまだに来ることができなかった。今日始めてやって来た。二十日より学校へ行くという。

補注

偕行社 この日記の八月廿八日のところに出てくる能美円乗によって開成舎が創設されたが、彼が辞職するとともに開成舎の事業は陸軍将校をもって組織した偕行社がことごとく継承するところとなり、開成舎の歴史は閉じられることとなった。(「新修広島史」による)

十八日

十九日 日曜

廿日 久次果来

大意 久次(郎)が果たして来る。

廿一日

廿二日 平川生快起来校

大意 平川さん、病が癒えて来校。

廿三日 雨

廿四日

廿五日 雨 岩本元行来 問片田篤人親戚血統蓋欲嫁女也

大意 岩本元行がやって来て、片田篤人の親戚の血筋を尋ねる。思うに嫁女をもらおうとするのである。

廿六日 淺野忠伝正二位公之命賜公歐州日録一卷 遠藤可一寄書曰建校後学状如何又曰道路喧伝内

閣応有変動又曰府下地価低落地方地価応騰貴

大意 浅野忠が正二位公の命令を伝え、公の欧州日録一卷をいただく。

補注

浅野 忠 文政二年(1819)～明治二十五年(1892) 広島藩家老。同藩家老職三原浅野家十一代。名は忠助、忠厚のち忠。通称は仲之丞、主殿、大和、飛騨などと称し、家老職在職中は主に遠江といった。弘化元年から嘉永元年まで三原浅野家内の改革に努めた。広島藩では、広島城八丁馬場の同家上屋敷の書院を廃して訓練場とし、同家家臣の西洋流武術鍛錬を行った。一方、当時藩政を掌握していた執政今中大学に反対し、その弊害を除くため、黒田図書・辻維岳(将曹)・小鷹狩正作・石井修理などと計って、今中を自宅に招いたり、意見書を出すなど努めたが改められなかったため、同年十二月、同じく家老職にある上田主水・浅野豊後とともに、藩主斉肅に大学罷免の建白書を上呈し、翌安政元年には今中大学は中老格を命じられたが、政局は二川清記・生田筑後の掌中に帰し、改革策は失敗した。同年二月、広島において新藩主慶熾に拝謁し、二川・生田らの失敗を論じ、意見を述べたが容れられず、翌三年三月病氣と称して、養父忠敬の五男忠英を立てて隠居し三原に移った。三原城内では南館を建てこれを住居とし、城北桜山に砲台を築き、山の後ろは切断して塹堀を深い柵を構えたほか、沿岸の要所に砲台を築くとともに大砲を鑄造し、西洋調練を用いるなど大いに改革に意を注いだ。明治元年、本藩の藩政改革にあたっては副総督となり、奥州出兵の指揮にあたるなど尽力したが、翌二年病氣のため辞職し、藩主長勳から維新の功績をもって佩刀を下賜された。廃藩置県後、旧藩士の窮乏を救うための授産組織「同進社」の設立に努めた。同五年安芸国厳島神社の初代宮司となった。明治二十五年十二月十四日没。享年七十四歳。佐官町妙頂寺に葬られた。(「三百藩家臣人名事典」より)

正二位公之命賜公欧州日録一卷 正二位公：浅野長勳 浅野長勳は、明治15年(1882)三月から明治十七年五月までイタリア公使を務めている。その時の事を記されたのが「欧州日録」である。

廿七日 内子産後微腫 聘齋藤爲信診之 爲信曰

服薬則愈

大意 内子がお産の後わずかな腫れる。齋藤爲信を呼んできてこれを診てもらおう。爲信が言うには薬を服用すれば治癒する、と。

廿八日 給教員禄

大意 教員の俸給を与える。

補注

「修道学園史」(昭和32版)によれば、教員一名 俸給五十円 助教 六名 内訳 月給 三十円 一人 月給 二十円 五人 とある。

廿九日 学校試験皆畢

大意 学校の試験は皆終了

三十日 以検生徒所獲点休業 拉友村 平川 頼丸山四子遊横川

大意 生徒が獲得した試験の点数を点検するので休業。友村さん、平川さん、頼さんの四人を連れて横川で遊ぶ。

七月

一日

二日 雨

三日 日曜

四日 平川子授業中瘡起面蒼体顫全身毛竖

大意 平川さんが授業中、瘡が起り、顔面が青ざめ、体が震え、全身毛立つ。

五日

六日

七日 以岩田 山崎 山岡 杉江 田中 名草

木村八子爲授業生

大意 岩田、山崎、山岡、杉江、田中、名草、木村の八君を授業生とする。

補注 授業生 特に説明されているものを見いだせないが、授業の助手を務めるものか。

八日 且雨且晴 至黄昏雨

大意 雨が降ったり、晴れたり。夕暮れに至り、雨。

九日 自今日毎土曜日課文

大意 今日より毎土曜日に作文を課題とする。

十日 木村文槌赴京西来別 客年余之遊東京 使文槌護家曰余定住汝家眷致東京 余乃使汝学而余尋西歸 乃又約曰既不能使汝遊東京余甚憾之 故汝若遊四方則給僅十金 以謝汝護家之勞聊表不負汝之意耳 於是余贈十金 謝五金 受五金

語句 ・尋 ついで。

大意 木村文植が洛西に行くので、別れの挨拶に来る。昨年、わたしの東京遊学した。その時、文植に頼んで、留守宅を守るようにした。それで言うに、わたしは東京に定住する。あなたは家族を東京へ行かせなさい。わたしはそれであなたに勉強をさせて、わたしはついで西に帰る。そこで又約束して言うことは、もはやあなたを東京に遊学させることが出来ない。わたしはこのことを大変に遺憾に思う。それ故、あなたがもしどこかへ遊学するのならば、僅かだが十円を渡し、あなたが家を守ってくれたことの労に感謝したい。あなたの思いに背かないようにいささか気持ちを表すというだけだ、と。‘そこでわたしは十円を贈る。月謝5円。五円受け取る。(*この部分はよくわからない)

十一日 陰 晴 摸稜

大意 くもったり晴れたり。(摸稜は「稜をさぐる」と読めるが、「稜」は「かど」の意で、どのような意味か解しかねる。

十二日 天気如昨

大意 天気は昨日のごとく。

十三日 如昨

大意 昨日と同じようだ。

十四日 松浦鶴松帰省 片山恒雄と鶴松赴竹原

大意 松浦鶴松が帰省する。片山恒雄が鶴松といっしに竹原に行く。

十五日 脩詩会

十六日 脩文会

十七日 日曜

十八日 十一日至今日始快晴 自今日廃午後講義

大意 十一日今日に至り始めて快晴。今日より午後の講義休み。

十九日 天気猶未定 平川吉之助話官事将成

大意 天候はなおいまだに定まらない。平川吉之助が役所のことがもうすぐうまくいきそうだと話す。

廿日 快晴

廿一日

廿二日 從今日以熱十一時放学

大意 今日から気温が暑いので十一時に授業を終了する。

廿三日

廿四日 日曜

廿五日 草東京留学報酬規則

大意 東京留学に関する報酬規則の草案をつくる。

廿六日 從今日十時退校

大意 今日より十時下校。

廿七日 從今日試験

大意 今日より試験。

廿八日

廿九日 試験完

大意 試験完了。

三十日 校点

大意 点数を点検する。

三十一日 日曜

八月

一日

二日 自廿日至今日始微雨 溽暑

語句 溽暑(じょくしょ) 蒸し暑いこと。

大意 二十日より今日までで始めて僅かに降水がある。蒸し暑い。

三日 風雨

四日 風雨 余家与熊谷氏隣 田圃亦相接 賃熊

谷氏之家而居者二家 皆幼雛每入我田圃偷瓜菓

余或呵之而不悛 今日至片山氏帰途買乾鯁二囊

到熊谷氏曰我田圃所種則老母所娛而二家之児每

入我田圃而戯使老母不娛 僕甚苦之 子其致是二

囊於二家伝我言 使二児莫偷瓜菓 熊谷氏曰不独

偷子之瓜菓 亦摘我之南瓜狼藉於庭園 其父母親

之 来致謝 故鍵後圃門使之不能到 子与我之田

圃 子其安之

語句 鯁(こう) 米粉・小麦粉をこねて、蒸し

てつくった食品。クリーム状のもの、カステラ状のもの、むしもちなど。

*乾鯁(かんこう) 言葉からすれば乾燥したむ

しもちということになるが、どんな菓子なのかよく

わからない。

大意 風と雨。わたしの家は熊谷氏の田圃にも接

している。熊谷氏の借家に住んでいる者が二家族

ある。皆幼い子がわたしの田圃に入って瓜を盗む。

わたしがこれを叱っても聞き入れようとしない。

今日片山氏のところへ行っての帰り、乾鯁二袋を

買い、熊谷氏のところに行って、「わたしのとこ

ろの田圃にものを植えて年老いた母がその生育を楽しみにしている。しかしながら二家のこどもがわたしの田圃に入るたびにいたずらをして、老母のころを不快にしている。わたしはこのことで心を痛めている。あなたはこの二袋を持って二家に行き、わたしの言葉を伝え、瓜を盗むようなことがないようにしていただきたい。」と言った。熊谷氏は「ただあなたの田圃の瓜を盗むだけではない。わたしのところの南瓜もまた摘み取って庭園で狼藉をはたらいている。その子供たちの父母はこれを見て、やってきて謝罪している。それ故これから後、田圃の入り口に鍵をして、こどもらがあなたとわたしの田圃とに入れないうさせなさい。

そうしたらあなたはこのことに心を休めることが出来よう。と言う。

五日 黄昏雨 暑頗溽 夏子下痢 患其或爲痢疾 拉之詣病院乞薬 薬償三銭

大意 夕暮れ雨。暑く、大変むしむしする。夏子が下痢をする。或いは下痢症状に罹ったのではないかと思ひ、病院に行き、薬をもらふ。薬代は三銭であった。

六日 厳島夏祭 愉快晴 厳島賽者之喜可知 夜拉春子三郎二人 遊畳屋街納涼場

大意 厳島神社の夏祭り。ちょうど快晴。厳島神社にお参りする者の喜びを想像することができる。夜春子と三郎を連れていく。畳屋街の納涼場で遊ぶ。

七日 夜雨 上野啓造送土井百穀行状

大意 夜、雨。上野啓造が土井百穀の経歴を送ってくる。

補注 山田養吉先生は土井百穀の顕彰碑の撰文を書いている。そのため、経歴を送ってきたのであろう。

*土井善右衛門 1828年(文政11)～1883年(明治16)。私立学校創設者。佐伯郡己斐村(現広島市)出身。庄屋の生まれ、名は積善、百穀と号した。幼少から頼氏の門に学ぶ。のち庄屋、戸長、県会議員などを歴任した。これより先、1872年(明治5)修道館跡に私立遷喬舎(せんきょうしゃ)を設立した。これは広島県で中等教育を施した最初の学校である。最初は英人ジェームズ・ジャイ

夫妻を招き、英学の普及に尽力したが、まもなく師範学科、国語科等も置いて校運も隆盛であつた。さらに1873年(明治6)には小学師範科を付設した。これも県内における小学校教員養成の最初である。この遷喬舎は官立師範学校や官立外国語学校の創立に伴い閉鎖され、小学師範科は1874年(明治7)東白島に創設された白島学校に移された。この白島学校が広島県師範学校の前身である。青年の教育に従事すること三十年一日のごとくで、家産はこのため衰微したが顧みなかった。1884年(明治17)文部省からその功績を表彰され従五位が贈られた。(「広島県大百科事典」による。)

土井善右衛門と山田養吉との関わり

1870(明治3年)8月、土井善右衛門は己斐村に有止塾をつくり旧藩の儒者、山田養吉を招聘して教師とした。(井上清著「碑中の人 土井百穀を偲ぶ」による。)

遷喬舎

1872年(明治5年)5月、土井善右衛門らにより、旧藩の修道館を継承して広島の南町2丁目(広島市基町)設立された教育機関。「遷喬舎社中規則」によると①教授は語学、意味学の2則を以てす。語学は外国教師来着の上これを創む。②入謝金1分③月謝1両、などの内容であった。同年10月には改めて師範科、横文科、習字科、国語科がおかれた。招かれた西洋人教師はジェームズ・ジャイで、ほかに岩本元行、青木良蔵、山田貢一郎らが指導に当たり、学制第30条に「当今中学ノ書器未ダ備ラス此際在来ノ書ニヨリテ之ヲ教ルモノ或ハ学業ノ順序ヲ踏マスシテ洋語ヲ教ヘ又ハ医術ヲ教ルモノ通シテ変則中学ト称スヘシ」と規定された変則中学として経営された。生徒数は明らかでないが、首席で卒業した西村益三(のち尾道市長となる)が、「ミッチェル著万国地図」を賞としてうけた記録がある。1874年廃止。(「広島県大百科事典」による。)

*百穀が遷喬舎創設にあたって投じた額は5000余円 これは約6億6千万円に相当する。(井上清著「碑中の人」)

八日 中島康作来 話其息律夫

大意 中島康作が来る。彼の息子律夫のことを話す。

九日 婢久以母病帰省 長末女来 助庖厨 今日
熱大酷

大意 お手伝いの久の母が病気というので、帰省する。長さんの末娘が台所のことを手伝ってくれる。今日の暑さは極めて厳しかった。

十日 北繁造来日欲遊東京而義父不肯 先生爲言之 余曰且思之

大意 北繁造が来て、「東京に遊学したいのだが、義父が承知いたしません。先生、義父に何か言ってください。」と言う。わたしは「しばらくこのことを考えてみる。」と言った。

十一日 薩人坂元純熙書来 書中曰余今在名古屋
鎮台 名古屋寥寥無人

語句 ・寥寥(りょうりょう) うつろいでひっそりしているさま。空虚なさま。数が少ないさま。

大意 薩摩の人、坂元純熙の手紙が来た。手紙には「わたしは今、名古屋の鎮台に居る。名古屋はひっそりとして人がいない。」と書いてあった。

補注

鎮台 明治の初め、各地に置かれた軍団。明治四年(1871)東京、大阪、鎮西(小倉)、東北(石巻)、の四鎮台が、同六年には徴兵令の公布に伴い、全国を六軍管区として、東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊本におかれた。後同二十一年師団と改称された。

十二日 此際夏子患下利 三郎患耳痛 内人患胆不能飲津而春子患内服痛 蓋將癩瘡也 健者萱堂余与次郎二人而已 暮拉春子詣病院 医診曰此非癩病勞足凝而生癩也 塗藥不勞足則止

大意 この際、夏子が下痢を患う。三郎は耳を患う。内人は胆嚢を患い、液体を飲む事ができない。そして春子は内服痛を患う。思うにできものが出来そうだ。元気に者は、母上とそれに、わたしと次郎の二人だけだ。

十三日 丸山氏見招 醉餘散步過北氏面主人話繁造事

大意 丸山氏に招かれる。酔うた勢いで散歩し、北氏の主人と顔を合わし繁造の事を話す。

十四日 朝繁造義父来 話繁造之黙而不言

大意 朝、(北)繁造の義父が来て、繁造が黙っていて何も言わないと話す。

十五日 初春子入弘道尋常小学校 今日卒業

大意 初め、春子が弘道尋常小学校に入学し、今日卒業する。

補注

弘道尋常小学校 明治十七年十月これまで所在地何なりとお申し付け下さい冠して呼んでいた学校名を雅号をもって呼ぶようになった。轅町小学校→弘道小学校(「新修広島市」による)

六日 黄昏疎雨雷鳴 訪手島参之助

大意 夕暮ればらばらっと雨。雷鳴。手島参之助を訪ねる。

十七日 中尾雄来

大意 中尾雄が来る。

十八日 春子直二温知学校二至

大意 春子がすぐに温知学校に行く。

補注

温知学校 明治十七年十月これまで所在地名で呼んでいた学校名を雅号で呼ぶこととなった。

桜川小学校 → 温知小学校 明治二十三年には、袋町尋常小学校となる。(「新修広島市史」)

十九日 今日日食 雨不見 今日始創柔術場 中尾雄来

大意 今日は日食。雨で見えない。今日始めて柔術場が創設。中尾雄が来る。

廿日 岩田弥逸明将之東京 今夜見招而匠慶助亦将堅柱 乃触於慶助而後赴岩田

大意 岩田弥逸が明日東京に赴こうとしている。それで今夜招かれる。大工慶助も亦柱建てをしようとしている。そこで、慶助のところへちょっと顔を出し、その後岩田家へ赴く。

廿一日 日曜 岩田左祐来 謝明夜之臨乞免状

木原適所自東京帰 船越氏託小学題辞借金

大意 日曜。岩田左祐が来る。明(昨?)夜の来臨の礼を言い、免状を求める。木原適所が東京より帰る。船越氏が小学題辞の代金を託していた。

廿二日 石井通吉来別曰今日又将越東京 安井毅誘一学生至

大意 石井通吉が別れの挨拶に来て、今日また東京に引っ越すのだと言う。安井毅が一人の学生を誘ってやって来た。

廿三日 熱甚 廢夜業 散歩至塚本

大意 暑さが甚だしい。夜の仕事を止め、散歩して塚本町まで行く。

廿四日 残熱雖甚工人勉力不措 偶有鱸魚 酒供
工人 夜拉春子三郎上街買本

大意 残暑が甚だしいけれども、大工は仕事に努め励むことを止めない。たまたま鱸があった。それで酒を買い、大工をもてなす。夜、春子、三郎を連れ街に出かけ、本を買う。

補注 三郎 三男、有秋さんのこと。昭和24年没。

廿五日 有富田滝蔵三原人也 來說大学親民之親
字喋々 不已出 淵三四郎亦來 說卜筮之事滝蔵
先去 余使占滝蔵 遇夬之二爻 變 曰負且乘致寇
之 至黄昏傾杯酒 訪木原適所 不在 軫訪岩本
元行 說使中学校生徒遊東京

語句 喋々(ちょうちょう) 口軽くしゃべるさま。
・卜筮(ぼくぜい) うらない。 ・「遇夬(かい) 之二爻(こう) 變 曰負且乘致寇之」占いの言葉であろうが、よく分からない。

大意 富田滝蔵という人がいて、三原の人である。やって来て、「大学」の「親民」の「親」の字についてべらべらと話す。やむなく出る。淵四郎もまたやって来て、占いのことを説明する。滝蔵が先に帰る。わたしは、滝蔵のことを占わせる。「遇夬之二爻 變 負且乘致寇之」という。夕方になり、杯を傾ける。木原適所を訪ねる。不在であった。軫じて岩本元行を訪ねる。中学校生徒を東京に遊学させるように説得する。

補注

大学親民之親字 「親民」は人民に親しみ仲良くする。「大学」では、明德を明らかにする、親民、至善にとどまることを学問の三つの綱領とする。(宇野哲人「大学」講談社学術文庫)

廿六日 栗原区長檄曰欲議広島中学校名称 子夫
至区役所議事堂

大意 栗原区長が檄文で言うには、「広島中学校の名称について協議したい。あなたには区役所議事堂に来て欲しい。」と。

補注

広島中学校 明治十年十一月、広島県英学校は、四年の課程をもつ広島県中学校に生まれ変わった。さらに明治十二年九月、広島県広島中学校と改称された。(「広島市学校教育史」による)

廿七日 与友村遊字品

大意 友村と字品に遊ぶ。

廿八日 片山左太夫來 談偶及買北隣事能美円乘
所有 乃使左太夫能美氏議之 蓋隣地大茅屋三四
宇 与我塾相接 屋中撰積鎮台馬所喰抹草 男女
渾雜歌呼嬉笑 妨塾生之書業亦蕩其心且恐其或煤
火 故欲買之使彼撤去屋

大意 片山左太夫が来る。話がたまたま能美円乘所有の北隣を買うことに及ぶ。そこで、左太夫に能美氏の所に行き、このことを相談させる。つまり、隣地の大きな草屋は三、四軒。わが塾と接している。草屋の中には、鎮台の馬が喰らう細かく切られた草が選り集めて揃えてある。また男女が入り乱れて歌い、声をあげて遊び楽しんでいる。それに塾生の学業の妨げになり、またその心を乱す。あるいは火事を引き起こすきっかけにもなりはしないかと恐れる。それ故、この草屋を買い取り、能美氏にこれを撤去させたいと思うのである。

補注

能美円乘 山県郡出身の僧侶。明治五年(1872)旧城内に開成舎を興す。開成舎ははじめ普通小学校と漢文・英語・数学を教える変則学校とがあり、のち明治二十一年軍人子弟の教育をする特別科、および中等学校程度の文学科・小学科の三科を設け、私立の学校として大きな足跡を残した。(「新修広島史」による)

廿九日 左太夫復來

大意 左太夫がまたやって来る。

三十日 左太夫与円乘未約売地一坪六十金 左太
夫去 後与左太夫画論 北隣置人戒 夜守 火
蓋地則円乘所有而借地 設屋者熊谷某也

大意 左太夫は円乘といまだに地価一坪六十円の契約を結んでいない。左太夫が帰る。後で左太夫とあれこれと論じる。北隣に人を配して警戒をし、よる火事の見守りをする。つまり、土地が円乘の所有するところなので、借地である。草屋を建てているのは熊谷某なのだ。

三十一日 左太夫言之円乘伝之熊谷曰謹諾 今夜
将置衛 夜展墓

大意 左太夫がこのことを円乘に言い、円乘はこのことを熊谷氏に伝える。熊谷氏は、謹んで承諾した。今夜、番人を置こうと思う。

九月

一日 朝展墓於妙風寺

大意 朝、妙風寺に墓まいりに行く。

補注 妙風寺 白島山・大乘院と号す。日蓮宗。
 (「広島市史」社寺誌による)

二日 孟蘭盆祭

補注 孟蘭盆祭 孟蘭盆会(うらばんえ)町民にとって関係の深い宗教行事であった。精霊会(しょうりょうえ)の行われる十五日の前後、おもに次のようなことが見られた。すなわち十日ころから各寺院の門前で売られる竹製の灯籠を人々は買い求めて墓側に立てるが、武士の階層のものたちは大きな木製の灯籠に台をつけ自家の墓前に掲げるのを常とした。(「新修広島市」)

三日 連日思呈総理大臣書而不成

大意 連日、総理大臣に書簡を上呈しようと思っていたが、実現しない。

四日 日曜

五日 以体術場落成。饗教員匠人生徒

大意 体術場が落成したので教員、大工にもてなしをする。

補注

「今日より事業(授業)常の通り(前日まで旧盆休業)入門生四人。体育場棟上を以て大工並びに教員及び体育場畳寄付せし生徒十人を供す。」

(昭和53年版「修道学園史」)

六日 大島生入塾 妹時来

大意 大島くんが入塾する。妹、時が来る。

七日 鎌田玄溪来 分韻 得雲

往歳横川始見君

纒呼菽乳取微醺

談交今日重相遇

濁酒三杯談着雲

串田生入塾

語句 ・分韻 漢詩の会で、予め韻の字を各自に分けておいて詩を作る。・往歳 過ぎ去った年。・纒 わずか ・菽(しゆく) まめ。菽乳 豆で作った乳製品の事か。・醺(クン・よう) 酒の香りがたちこめる。

大意 鎌田玄溪が来る。分韻で、わたしは「雲」を与えられた。

ある年、横川に行き、始めてあなたに会った。

僅かに豆でつくった乳を注文し、ほろ酔い加減になる。(この部分意味を十分解し得ず)

言葉を交わし、今日重ねてめぐり会えた。

濁り酒を三杯飲んで、談じ合いは、雲に達するばかりだ。

八日

九日 黄昏訪木原適所 不在 散歩元安橋

大意 夕暮れ、木原適所を訪ねる。不在。元安橋まで散歩する。

十日

十一日 日曜 木原適所来 託頼氏浅賀二生

大意 日曜。木原適所が来る。頼氏に浅賀二君を託す。

十二日 雨

十三日 夜大雨 流校楼壁土

大意 夜、大雨。学校の二階の建物の壁土を流した。

十四日 片山生来 謀購隣地之事

大意 片山さんが来る。隣地を購入することの相談をする。

十五日 購隣地之事期今日而未済 片山生屢々来去

大意 隣地購入の事の期限が今日であっていまだに済んでいない。片山氏がしばしば行ったり来たりしている。

十六日 今日遂贖地

大意 今日、ついに土地を購入する。

十七日 講詩課秋日泛舟 秋日山行 二詩

語句 ・泛舟 舟を浮かぶ。・山行 山歩き

大意 詩を講義する。「秋日泛舟」「秋日山行」の二つの詩を課題とする。

十八日 雨 与片山 頼 山岡 中島 友村 五氏会米家楼秋季懇親会

大意 雨。片山、頼、山岡、中島、友村五氏が米家楼で秋季懇親会のため会する。

十九日 雨 上書浅野公言時事

大意 雨。浅野公に書簡で時事についての言を上書する。

補注

浅野公 浅野長勳公 1842(天保13)~1937(昭和12) 広島藩12代藩主。明治時代初期の大名。号は坤山。1862年(文久2)12月芸州藩浅野長訓の養嗣子となった本家長訓の養嗣子となる。1863年(文久3)將軍徳川家茂から偏諱(へんぎ)を

うけ茂勲（もちこと）と改めた。幕末多難の折、長勲は養父長訓を補佐し、自国防衛のため国元を離れられない長訓に代わり1863年（文久3）3月以降は朝廷、幕府に対する事務を務めた。1867年（慶應3）薩摩、土佐、長州等諸藩と連絡をとり、建白書提出、武力威圧両面からの幕府大政返上をめざした。12月の王政復古の政変には積極的に参加し議定に任じられた。以後藩政改革に従事し明治政府にはあまり重く用いられなかった。1869年正月には家督を継ぎ安芸守に任じられた。この月再上京し参与を命じられた。薩長土肥4藩に続いて版籍奉還を顕現したのもこのときである。6月版籍奉還を許可され広島藩知事に任じられ華族となった。1870年2月山内豊熙の女綱子と婚姻を結んだ。翌年2月東京府貫属を命じられ、東京に常住、7月廃藩となり藩知事を免ぜられた。1880年（明治13）12月に元老院議官に任じられ、1882年3月から1884年5月までイタリア公使を務めた。1884年7月侯爵を授けられた。議会開設に備え1889年2月広島に政友会を組織し、6月には新聞『安芸津新報』を発行したがあまり実績も上らず翌年解散した。長勲は産業開発の面でも重要な事業を行っている。1872年9月東京につくった洋紙製造工場はその代表といえる。これは後に王子製紙となる。また広島県開発、土族授産にも意を注ぎ、千田貞暁県令の企図した宇品築港事業を積極的に支援した。長勲は資金の一部を供出し、旧藩士族の団体である授産所・同進社は直接事業に参加した。1896年（明治29）1月には従一位に叙され、最後まで生き残った大名経験者として有名であった。（「広島県大百科事典」）

廿日 雨

廿一日 翳 与片山生至所購隣屋検家中所有
大意 くもり。片山さんと購入する隣の草屋に行き、家の中にあるものを点検する。

廿二日 翳 長信雄来 話平川吉之助爲県庁吏
大意 くもり。長信雄が来る。平川吉之助が県庁の役人になったことを話す。

廿三日 快晴 際秋季皇靈祭賀平川生爲官贈紅魚
附詩

代東

莫道微官志不舒

龍階尺木上蒼虚
勸君晨夜勤王事
心赤唯須效此魚

二三日砂本貞吉以外人二名来 曰過尊門故面
語且二君將以洋婦人来 而苦莫家之可居

此辺太佳有樓之家乎否 今夕閑乃奔走探家得一家於中棚 報之砂本

語句 ・秋季皇靈祭 毎年秋分の日に、皇極殿で、歴代の天皇、皇后、皇親などの霊をまつる祭儀。もと国家の祭日であった。現在の国民の祝日「秋分の日」・紅魚 鯛のことか。・束（かん）名刺 ・道 いう。・微官 とるにたらない官職 ・舒（じょ）のべる ・階 きざはし。はしご。のぼる。・尺木（せきぼく）直径一尺の木。龍の頭上にある博山（器の上に刻して山の形をした飾り）の形をした物の名、これによって天にのぼる。・蒼 あおい ・虚 そら ・晨朝はやい ・效（効）しるし。きく。効果がある。いたする。ならう。まね。

大意 快晴。秋季皇靈祭に際し、平川さんの県庁の役人になられたのをお祝いで鯛を贈り、詩を添える。

名刺に代えて

職に就いたと言っても、大した官職ではなく、我が志を安んじるものではないと言てはいけない。

龍は尺木を一段一段とのぼって大空に達するのだ。

あなたに勤める。朝早くから夜に至るまで、勤王の事を思うように。

心をただこの魚にならば、是非ともあかく燃やすがよい。

二、三日前、砂本貞吉か外国の人二名を連れて来た。「あなたのおうちの前を通ったので、お目に掛かってお話しし、かつ、あなたのもとに西洋の婦人をお連れして来ようと思っている。彼女は住むに適した家が見つからなくて困っている。この辺りに大きくて住むによい二階つきの家がありはしないだろうか」と言う。この夕べ、暇であったので、かけずり回って探し、中の棚に一軒見つけた。このことを砂本に伝える。

補注

砂本貞吉 安政三年(1856)～昭和十三年(1938) 牧師。広島女学会(広島女学院の前身)創立功労者。広島メソジスト教会(日本基督教団広島流川教会の前身)の創立者で初代牧師。己斐(現広島市西区)に生まれ、1882年(明治15)航海術を修める目的で渡英しようとしたが、寄港先の米国にとどまり、キリスト教に入信。米国で神学校に学び、福音伝道の熱意に燃えて1886年(明治19)に帰国、直ちに親戚・友人に伝道を開始。当時、神戸在住の宣教師J・W・ランバス師の協力を得て教会を設立(1887)広島の子供に対する伝道と新しい女子教育のための女子塾、広島女学会を創立した。のちハワイ、日本各地の教会で牧師を歴任し、東京で死去。墓地は広島市西区己斐町の茶臼山にある。(「広島大辞典」)

廿四日 翳 篠田生来 謀英学校之事

大意 くもり。篠田さんが来る。英学校のことを相談する。

補注

英学校 「広島英学校女子部は、明治十八年三月に木原適所が堀川町に開いた学校である。木原は漢学者木原草沢の息子で、自らも漢学をよくし、石見屋町に私塾を開いて漢文、数学の三科を教授していた。なお、この塾には女子も在籍していた。木原は私塾を拡大して明治十七年五月に広島英学校を開設し、翌年女子部を併設したのである。杉江タズは大阪の梅花女学校を卒業後、広島薬研堀の自宅で女子に英語を教授していたが、ランバス博士の来広に際して英語教授を依頼した。明治十九年、杉江タズし家庭の事情によって英語塾を継続できなくなったため、砂本の広島女学会に合流を求めた。また、木原適所も広島英学校女子部経営を砂本に一任することになった。明治二十年十月十二日に、二十七歳のゲーンズがメソジスト基督教会伝道局より派遣されて、広島英和女学校に教師として着任した。砂本はゲーンズの着任に伴い、同年十二月に校長職をゲーンズに校主を岡本憲太郎に委ねて、自らは伝道に専念することになった。」(「広島市学校教育史」)

廿五日 好天気 朝木原適所来 午餐後訪鈴木理助話山陽書

大意 よい天気。朝、木原適所が来る。昼食後、

鈴木理助を訪ね、山陽の書のことを話す。

廿六日

廿七日 鈴木理助来

大意 鈴木理助が来る。

廿八日 黄昏散歩 訪時辰表家 治時辰表

語句 ・時辰表 時間表のことであろうが、列車の時刻表のこととは思われない。「治時辰表」というのは、時間表を調整する、という意かと判断した。この時の状況を考えると授業の時間表のことではないかと推量し、この作製・印刷をしてくれる家を訪ねたというのではないかと推量した。よく分からない。

大意 夕暮れ、散歩。時間表つくる家を訪ね、時間表を調整する。

廿九日 復往治時辰表 買時辰表

大意 また出かけていき、時間表を調整し、時間表を買う。

三十日 篠田生片山左太夫

十月

一日

二日 日曜

三日 夜訪水谷生問田中宮太郎試験落第之故 主人供酒

大意 夜、水谷さんを訪ね、田中宮太郎が試験に落第したわけを訊ねる。主人が酒をもてなす。

四日 朝寺尾生十郎来 价佐藤某乞添削文章

語句 ・价 おおきい。すぐれていてりっぱな人。下男、下僕。鎧をつけた兵士。

大意 朝、寺尾生十郎が来る。下働きの佐藤某の文章を添削して欲しいと頼んできた。

五日 工人某来報片山左太夫負傷 行見之湍焉没

語句 ・湍焉(こうえん) たちまち。

大意 大工某がやって来て、片山左太夫が負傷したと知らせる。行ってこれを見る。たちまち、死去する。

六日 会左太夫葬 以招魂祭止

語句 ・招魂祭 死者の靈魂を招き寄せて弔う式典。魔よけにも行われた。招魂社で行われる、国事に殉じた人々をとむらう祭典。地方の護国神社で行われるのが、ふつう。東京の靖国神社で行われる春季大祭、秋季大祭をさしていることもある。大意 左太夫の葬儀に出席する。それで招魂祭を

中止する。

七日 又雨

八日 招魂祭 設看棚於競馬場使生徒縦覧

語句 ・縦覧 思うまま自由にみること。勝手に見てまわること。

大意 招魂祭。観覧席を競馬場に設け、生徒に自由に観覧させる。

九日 訃平川楨死 乃弔之

大意 平川楨の死去の訃報がある。それでこの弔間に行く。

十日 送平川生葬

大意 平川さんを送る葬儀。

十一日 饞篠田生

語句 ・饞 はなむけ。おくる。旅立つ人を送って郊外まで行き、そこで小さな宴会をし、酒食を共にして別れる。また、送別をする。

大意 篠田さんを送別する。

十二日 訪小鷹狩 不在

大意 小鷹狩を訪ねる。不在。

十三日 遠藤書来。 寄谷氏意見書

大意 遠藤の手紙が来る。谷氏が意見書を寄せる。

十四日 小鷹狩来 聴其談 有所大感 内人拉春子小鷹狩寓

大意 小鷹狩が来る。その話を聴く。大いに感ずる所がある。内人が春子をつれて小鷹狩の仮住まいに行く。

十五日 応長氏招 其亡児三年祭

大意 長氏の招きに応じる。彼の亡くなった児の三年祭である。

十六日 訪小鷹狩語吾意

大意 小鷹狩を訪ね、わたしの思いを語る。

十七日 拉夏子至病院 与友村 中島 山岡 三子会米家祭片山左太夫

大意 夏子をつれて病院に行く。友村、中島 山岡の三人と米家楼に会し、片山左太夫の霊を慰め偲ぶ。

十八日 胸裏左乳処覚微痛 至匠慶助 訪片山

大意 胸の奥、左の乳の辺りにかすかな痛みを覚える。大工棟梁慶助の所に行く。片山家を訪ねる。

十九日 雨

廿日 田中直一來 話左太夫所以蒙傷還金

大意 田中直一が来る。左太夫の傷害への保障金

支払のことを話す。

廿一日

廿二日

廿三日 展覧開業式 招応竹内太一來

大意 開業式を展覧する。竹内太一が招きに応じて来る。

廿四日 昨寺尾有所託余 余諾之 今朝辞之

大意 昨日、寺尾がわたしに頼みごとをする。わたしはこれを承諾した。今朝、これを辞退した。

廿五日 重陽

語句 ・重陽 陽数の極である九が重なる意。五節句の一つ。陰暦九月九日のこと。またその節会。重陽の節。菊の節句。

大意 重陽の節句。

廿六日 寺尾来 有所説余 復諾之 余又爲辞之 之書 明将送之

大意 寺尾が来る。わたしに説明することがある。またこれを承諾する。わたしはまたこのことを断る手紙を書く。これを明日送ろうと思う。

廿七日 終辞寺田氏 篠田生来別曰今夕将上舟

大意 ついに寺田氏に断る。篠田さんが別れに来て、今夕、船に乗ると言う。

廿八日

廿九日

三十日 日曜 木原適所来 夜与丸山之妻内子賽饒津社

大意 日曜。木原適所が来る。夜、丸山の妻内子と饒津神社にお参りする。

補注 饒津社 「もと饒津大明神または二葉山御社と称し、旧藩主浅野氏の太祖浅野長政の尊霊を奉祀す、(中略)明治元年、藩主浅野長訓の治世、広島城竹之丸御屋敷内の祠堂より太祖長政の夫人末津姫の霊璽を本社に奉遷配祀せらる、廃藩置県の後、明治六年本社を県社に列せられ、二葉山御社を饒津神社と改称」(「広島市史」社寺誌による)

三十一日 昏雨至

大意 夕暮れ、雨になる。

十一月

一日 朝走銀行 木原適所来 有請 許之

大意 朝、銀行へ走る。木原適所が来る。頼まることがある。これを容れる。

二日 欲乞牛痘接種 内人擁悌吉至水主町病院
後期徒還 蓋病院吏報曰二日午後二時接種 乃午
食後至病院 医日接種從十二時始終於二時

語句 ・牛痘 牛の痘瘡。その猛毒は人間に対し
て毒性が弱いので人体に接種し、痘瘡予防に用い
る。

大意 牛痘を接種してもらいたいと思い、内人が
悌吉を抱いて、水主町の病院に行く。接種の時間
に遅れて空しく帰る。つまり、病院の職員が二日
午後二時に接種すると伝えた。そこで昼食後病院
に行った。医師の言うには、接種は十二時より始
め、二時に終わった、と言う。

三日 天長令節宛会好天気 市街熱鬧亦極

語句 天長令節・天長節。天皇誕生日の称。昭和
二十三年（1948）に国民の祝日が制定される以前
の呼び方。奈良時代、光仁天皇の宝亀六年（775）
九月の詔勅によって行われ、明治元年（1867）に
再興された。「老子」に見える「天長地久」の語
によって、中国で唐の天宝七年（748）玄宗の誕
生日をこの名で呼ぶことに定められたのに始まる。
ここでは明治天皇の誕生日。・宛 あたかも。・
熱鬧（ねつどう）「鬧 騒ぐ。騒がしい。騒が
ず、乱れる。通りなどが混雑して賑わう、賑や
か。人々がこみあってさわがしいこと。

大意 天長令節がちょうど好天気のもと開催にな
る。市街の混雑もまた極度に達する。

四日

五日 毎日草望頌徳大運動會之投書

大意 毎日、頌徳大運動會の開催を希望するとい
う投書の草案を練る。

六日 日曜 雨 陰 使人欲泣

大意 日曜。雨。陰鬱。人を泣かせるようだ。

七日

八日 訪能美円乗 促隣（？）隣家屋 剔頭髮買
履

大意 能美円乗を訪ね、隣の家屋に連なることを
促す。

九日 畑吉之助將赴桑港 見招 有詩贈之曰

男兒欲立凌雲策
須試人間万艱厄
応記曾看外史時
挈鞋藤吉爲関白

語句 ・凌雲 雲より高くのぼる 現実の世俗を
超越すること ・艱 困難でつらい。難儀。・厄
つかえて進退に窮すること。行き詰まり ・外
史 頼山陽の日本外史 ・挈（じよ） ひく。と
らえる。 つかむ ・藤吉 木下藤吉 後の関白
秀吉

大意 畑吉之助がサンフランシスコに赴こうとし
ている。招かれる。彼に贈る詩があり、このよう
に述べる。

男兒、高く志をあげんと計画を立てようとし、
是非とも人間として多くの困難、行き詰まりを味
わうがよい。

かつて日本外史を読んだとき、おそらく心に刻
んでいるに違いない。

木下藤吉が草履を手に持ち暖めて関白となった
ことを。

十日 夜雨甚

大意 夜、雨がはなはだしい。

十一日

十二日 燈火余適成

大意 燈火余適が完成した。

補注 燈火余適 「山田十竹先生履歴書」に「諸
生ヲ激励ノ爲メニ文詩雜誌ヲ発ス。燈火余適ト名
ヅク」と記されている。

十三日 日曜 与友村遊戯島

大意 日曜。友村と戯島に遊ぶ。

十四日 秋祭 夜賽白神社

大意 秋祭り。夜、白神社に参詣する。

補注 白神社 「この地往古は海中の礁砦にて、
潮汐の干満に依り、岩礁出沒し、舟行甚だ危険な
り、因りて礁上に白木を立て、白紙を附して舟行
を警めしが、その後天文三年（1534）大友時盛と
いふもの小祠を建て、白紙の因縁を以て、始めて
社号を『白神』と称するに至れりと、（中略）明
治六年二月郷社に列せらる。淺野時代となりては、
歴代藩主の崇敬浅からず、毎歳米二百石を寄付せ
られたり、」（「広島市史」社寺誌）

十五日 朝訪戒三 託燈火余適添削 平川生来話
槨之墓字

大意 朝、戒三を訪ねる。燈火余適の添削を依託
する。平川さんが来て、平川槨の墓石の文字の話
をする。

十六日 過頼氏託平川氏墓字 主人供酒し
大意 頼氏のもとに立ち寄り、平川氏の墓石の文字を依託する。主人が酒をもてなす。

十七日 翳

十八日

十九日 獵 中山 北山来

大意 中山に獵に行く。北山が来る。

補注

「修道校日記」(昭和53年版「修道学園史」に掲載)によれば、「十一月十九日早起、明星燦然。生徒を以て中山村に遊獵。二兎を獲」とある。

廿日 日曜 修秋季祭 岩本来

大意 秋季祭を行う。岩本が来る。

廿一日 掃煤

大意 煤はらい。

廿二日 好風日

廿三日 朝訪片山氏 訪玉井生計湯川生之事 黄昏
応竹田氏之招 頼 原田 林生亦至

大意 朝、片山氏を訪ねる。玉井さんを訪ね、湯川さんのことを相談する。夕暮れ、竹田氏の招きに応じる。頼、原田、林さんもまた行く。

廿四日 夜大雷雨亦暴

大意 夜、大雷雨がまた襲う。

廿五日

廿六日

廿七日

廿八日 上燈火余適

大意 燈火余適を上呈する。

廿九日 応土居招

大意 土居の招きに応じる。

三十日 一樹村火(意味不明)

十二月

一日

二日 携夏子

大意 夏子をつれる。

三日 散歩観蛙子祭 訪能美

大意 散歩し、胡祭を見る。能美を訪ねる。

補注 蛙子祭 「恵比寿神社の祭礼は十月二十日に行われたが、この日誓文払いといい、商家はその祭のあとさかんに酒宴を行った。ことに胡町の恵比寿祭はもっとも雑踏したと言われる。」(「新修広島市」による)

参考書

広島市、広島市史(社寺誌)、新修広島市、広島市学校教育史、日本国語大辞典、広漢和辞典、漢字源、広島県地名大辞典(角川書店)、三百藩家臣人名事典(新人物往来社)、尚古、元凱十著、修道学園史(昭和53年版)、修道学園史(昭和32年版)

終わりに

人名については出来る限り明らかにしようと努めたが、分からないままに置いていたものも少なくない。また漢詩が書かれていたが、解読出来ない部分が幾つかあったのは残念であった。改めて非才を知る。明治二十年頃の広島の私立学校の創設に関わる記述が見られたのは、極めて興味深いものであった。

「修道新聞」にみる戦後1948～1949の修道高等学校 —米国メリーランド大学図書館・ブランゲ文庫から

修道学園史研究会 仲井正美(元事務長・大商1回)

戦後の「修道新聞」入手

ブランゲ文庫は、米国メリーランド大学図書館で所蔵する1945～1949の日本で刊行されたあらゆる出版物(ミニコミ誌・紙を含む)の網羅的なコレクションです。GHQマッカーサー最高司令部参謀二部附属の歴史部長ブランゲ博士が、検閲後廃棄する予定であった大量の出版物を研究資料としてメリーランド大学に送り、研究用コレクションをつくったといわれている。

歴史、政治、教育関係などの資料約8万2000冊、新聞1万6000タイトル、雑誌は1万3000タイトルにのぼる。メリーランド大学図書館によると、山口、広島両県が同文庫にある検閲前の原資料を参考に県史の書き直しをおこなっているという。「戦艦大和の最後」の原稿などもあるという。(産経新聞夕刊平成11/5/19)

このたび、「修道学園新聞」第1号から第5号(1948・6・1～11・23 第3号欠)、「修道新聞」第6号から第9号(修道学園新聞改題 1949・2・15～9・25)を国立国会図書館から文献複写で入手しました。新制修道高等学校が発足したのは、1948年5月3日ですが、この時の及川弥平校長が挨拶を第1号に寄せています。以下1948年から1949年の修道学園の出来事を「修道新聞」から紹介します。

概観

修道新聞に見る開校当時の修道高校

学園の新発足 理想の実現へ
及川弥平校長の挨拶

「修道高等学校の認めは(昭和23)5月3日

あった。その日が修道高等学校の開校ということになる。これと共に財団法人修道中学校は財団法人修道学園となり、これが修道高等学校とを経営する建前となり中学校の門札と共に木の香新しい修道高等学校の門札も掲げられ生徒の帽章も新しいのがつけられ、職員生徒の陣容は整った。一方本館の建設も日々進んでいるというのが現状であるがここにわれらは学問の新発足を自覚してお互いに邁進したいと思う。形の上から見ると学園は現在中学部十七学級生徒数約一千・高等部八学級生徒約四百併せて二十五学級生徒約一千四百人であるが、今後年に学級と生徒が増し完成年度には高校・中学いずれも十八学級生徒は九百名ずつ学園全体としては一千八百名の健児を包容する学園になる。それ生徒の手による校友会の組織機構とその活動等は新発足にふさわしい内容であり、その充実徹底は一にこれからの努力にかかっていると言えよう。先生と生徒の親しみ、自由と責任・自主と協同友愛・自立的な秩序・相率いての奉仕。このような精神行動が相持ち、相伴って新修道学園の美妙的な風光がかもしだされるであろう。学園の健児諸君、この線を進もうではないか。学園新聞はその増心に大いなる役割を果たすであろう。自分はひたすらに理想の夢の実現を念願せず居れぬ。」と学校長及川弥平は第1号(昭和23/6/1)の挨拶で述べている。

現在の生徒会にあたる生徒の自治組織も発足。5月19日に自治委員会(議長正島明雄、副議長橋本勝一)、5月27日に校友会(委員長川崎勲(高3)、副委員長山田喜久夫(高2)、同中川進(中3))がスタートした。

「完成はいつ?新校舎」の記事は完成予想の417,66坪の2階建て校舎の予想図を掲載している。

また、修道学園オールスターキャストと写真入りで39人の教職員を紹介しているが、写真は残念ながら判読できない。メンバーは、伴（専務）、石田（社会）、妹尾（英語）米本（英語）、三上（英語）松石（物理）、種田（生物）、川野（数学）、脇田（国文）、新見（体育）、脇田（国文）など若い教師の名前が並んでいる。

当時の生徒の関心は KO帽放棄 農繁休暇 長髪

1号に「学園からKO帽を放棄しよう」という記事があるが、「以前にはKO帽を用いるものと依然として戦闘帽を用いるものとの間に外面上の衝突とまで立ち至ったのです。だが私共の学校にもある一部の反動分子の熱烈な反発論と学校側の理解によって今年からKO帽を廃して良心的な制帽を取り入れることになりました。…要は諸君の反省によって一時も早く私共の学園からKO帽を全面的に排除しようではないか。」と呼びかけている。

また、長髪か短髪かという問題では、日赤の医師に医学的観点から意見を求めている。

更に、時代を反映しているのは「農繁休暇」についての要望である。学校当局との座談会では「農繁休暇を更に数日呉れという声が高いが…」と質問しているが、別の記事では「恵まれた農繁休暇 生徒の希望遂に実現」との見出しで、6月11日、12日、それに続く日曜日の3日間にわたり本校に置いて施行された」と報じている。当時の食糧事情、農家が多い実態を証明しているようだ。

夏休みのアルバイト 進駐軍が多い

昭和23年夏のアルバイトは、進駐軍が63名で最も多く、チョコレートやチューインガムばかりほしげに英会話の少々も体得してきてもらいたい、と報じている。第2位はキンピールが7名、パン工場3名となっている。

この頃は、生活のためにアルバイトを公認としていたのだろうか。

修道スポーツの活躍は 蹴球、籠球、排球などが活躍

蹴球班の活躍は、早くから頭角を現していたようだ。西日本大会を制している。籠球班も第3回国体予選県大会を制覇、排球は卒業生の中吉先輩、河野先輩が参加した菊門クラブの活躍を報じている。（第7号に記事紹介）

同窓会の始動 松本正六会長、村上哲夫・飯田信雄副会長

昭和23年7月5日発行の第2号は「今後の活躍に期待 同窓会の動きあわただし」として、松本正六会長、村上哲夫、飯田信雄副会長等の名前が挙げられている。（第2号に記事紹介）戦後の同窓会の動きについては、「修道学園同窓会の歩み 石田道俊 修道1997・9・1 496頁」も参照されたい。

1948年（昭和23）修道ビッグニュース 修道新制高校発足 新校舎落成、長髪許可される（第7号参照）

1948～1949年の主要記事とその内容

1. 修道学園新聞 第1号 1948昭和23/6/1 2面

1面：学園の新発足—理想の実現へ 学校長 及川弥平・自覚せよ—カギはわが手に 学内文化の興隆 校友会新発足・期待の弁 高等部部长 米本三爾・完成はいつ？新校舎 新校舎復興の抱負を聞く・論説校内民主化への道、学生と社会生活・目ざめた生徒と共に 中学部部长秋山元英・生徒の総意を生かせ自治委員会設置・委員長に川崎君 就任校友会役員決まる・富士の心PTA有田泰一郎・創刊をよろこぶ新聞班参与 浅枝 博・修道学園オールスターキャスト（写真（不鮮明）・名前（担当））生物学的自己 元農林勅任技師・広島文理大講師梶山英二・広島新制高等学校新聞連盟発足・学園からKO帽を放棄しよう・学園便り（芦屋中学校・鯉城高等学校・ほか）純情で模範示せ—電力の巻・筆録

2面：燦然と輝く優勝盾 籠球部に凱歌・第3回山陽籠球大会修道クラブ勇名を馳す・各班の顔ぶれ(水泳・配球・野球)スポーツ・足で書け 三谷藤四郎・先輩記者を囲んで一権威への盲従避けよ 新聞を語る会・太陽と月のかけくらべ 広島気象台にて 映画評 酔いどれ天使・県会訪問日記・愛される図書館に・長髪か短髪か日赤を訪れて

2. 修道学園新聞 第2号1948昭和23/7/5 2面

1面：学校当局と編集班との座談会 実現遠し 我らの希望 学校幹部職員にモノをきく・生徒の転校自由なりや・校長会議に拾う・哲学的思索とは 広島文理科大学副手・修道高等学校講師 岡昌宏・論説予算の決定をかえりみて・歌わん哉われらの歌(安芸の小富士)・自治委員会解散、総選挙行われる・本校教生に栄冠 軍政部英語弁論大会・充実した内容へ本館竣工迫る。

今後の活躍に期待同窓会の動き慌し

修道の同窓会は私立学校の特性を十分発揮して、他校にも希に見る程の活躍を現在続けて来ている。これはわが修道の校風の1つとあって良い。即ち卒業生諸兄の母校愛の賜である。23日呉支部では同窓会会合が開催され、また一方本校でも同窓会役員会が開催される予定である。尚この目的の概目は、予算決定、活動の協議、同窓会員の名簿の完成等が主で今後の活躍が期待される。修道中学校同窓役員(昭和22・12)会長松本正六(9) 広島高校教授 安芸郡海田市町2096 副会長村上哲夫(14) 夕刊ひろしま編集長 市内段原末広町165 副会長飯田信雄(18) 広島県綿スフ織物卸売組合理事 市内古江町高須54・科学連盟結成さる ほか

2面：栄えある2連覇確立 修道魂を発揮す・いま一段の努力を一各競技幕開け わが鉄脚の惜敗 恵まれた農繁休暇 生徒の希望遂に実現 文化部のホープ整備された内容 図書班を観る モノシリ手帳(動物はどれだけの高度にたえられるか 常識テスト) 破戒を観て 科学連盟の下に各校共同研究開始一理科班 文藝「S先生に」高2-2 大島教 修道ブギブギ 随感松江壮三 夏休みアルバイト調査 進駐軍が圧倒的 キリンビールやパン

工場 石田先生御令聞 随筆積極性 久保生 某新制高校生 髪を伸ばした帽子に白線 老朽教師を追放せよ 私立高女のスト 学校短信 泉

(修道学園新聞 第3号 欠)

3. 修道学園新聞第4号 1948昭和23/9/15

2面

1面：待望の本館竣工 夢の殿堂赤い屋根 白亜の壁に輝く金色の校章・重点的時間割編成サマータム修了を機に・論説本館竣工に寄せて・社に残る趣味の和算清水義雄・高等部自治会再発足・文学愛好者の集い・都心胡町“寝具会館”に修道学園復興事務所 母校復興に寄せる同窓生の熱意・修道のぬし秋山先生御退職 後任には同窓生の松石先生・創作大道袖四郎 三上武夫・映画評天の夕顔 職員住所録 ほか

2面：謎の国ソ連を衝く 蘇連邦の国民性について 元外務省派遣領事豊原幸夫・われは海の子黒ん坊中学1年臨海キャンプ・小川藤岡両君栄えある選手権を獲得 第3回全国大会広島市予選卓球

4. 修道学園新聞第5号 1948昭和23・11/23

2面

1面：くりひろぐ青春図絵 大復興祭举行 修道ルネッサンス軌道に乗る・間賀田君三位入選 県下高校弁論大会・祝辞 広島県知事楠瀬常猪・井口先生新任 元可部高等学校長・学園デパート出現? 多彩な復興記念 各班展覧会とバザー・論説 自治会決議の効用・慄然たり優勝杯 二世をしり目に第一位獲得 本校、田中和司君の雄弁・その後の秋山先生・校友会短信・各種連盟誕生・当局に要望・大道袖四郎三上武夫

2面：堂々一万六千米己斐宮島間 マラソン大会 盛況・新制大学入試要項・第3回国体県予選籠球部再制覇・むかしがたり妹尾萬右衛門・踊る肉体、高鳴る血潮 新校舍落成の慶びに修道学園運動会開催さる・第3回国体水泳ルポルタージュ MG 久保田清・溪流に学ぶ中学1年林間キャンプ・図書班だより・開校223年をむかう 記念式举行・映画評蜂の巣の子供たち・修道学園沿革史・泉 ほか

5. 修道新聞 第6号 1949昭和24・2/15 2面
1面：修道新聞と解題 編集班も新聞班に 従来「修道学園新聞」としていたのを「修道新聞」に又、「編集班」の名称を「新聞班」に改めました。ここに謹告致します。高三阿曾沼龍雄 〃 蔵本正雄 高二山田喜久夫 〃 菊川清 高一松野龍二・小野文部政務次官来校 私学の気質は協同精神で・高校の配置転換（公立）・予想される志願者殺到 狭き門の悩みつきず・わが生活への指針第一回 世論調査・社会の窓（1）アルバイトの巻・待望の擁護訓導来任・瀬戸内海の鯛（上）元農林勅任技師元文理大講師梶山英二・校内アトリエ出現・夜間大学設置促進浄財二千二百円（夜間国立大学設置促進）・野球部より・渡辺師退職、後任に堤先生・筆録・よみはじめの頃一公和荷風
2面：校内における演劇への希望菅原百種・ニュース手帳

P T A 会長 鯉城購買と楽々園の社長に

本校P T A会長林興一郎氏は、先般昔なつかしい鯉城購買組合と経営難にあえぐ宮島線楽々園の社長に就任された。同氏の怪腕による両社の今後の動きは期待されている。

“すべてのことを男女です” ミス・ルイス先生の語るアチラ風景・2/3月行事予定・佐竹代議士との会見記（新聞配達・車引き 苦学で社会学を学ぶ）・本体は 高三伊藤主計 随筆春を索める窓 高三竹安導夫・映画紹介ラ・トスカ 根津清・高校第一回卒業生名簿 ほか

6. 修道新聞 第7号 1949昭和24・5/10

1面：整備された学園に 充実した内容を 田中好一氏公安委員長に再選 あこがれの進学航路に船出して 1年生新入学 校友会改組さる会長に山田喜久夫君 同窓生めぐりある記②今の世にもあるゾ中国薬局営業部長 小西忠嗣氏の巻 国民よ青年よ国際眼を開け 欧米視察を終えた高田特派員はかく叫ぶ 6・3・3制実施に修道高校初の卒業式 昭和23年度修道ビッグニュース 事務所の改築成る工費51万円 わが卒業生の活躍めざま

し大学の門 諸先生大挙新任 学園に清新の気みなぎる 八名中六名は本校生 不良化防止のポスター作文入選者 先生とは 時計台があっても瀬戸内海の鯛（下）元農林勅任技師 元文理大講師梶山英二 修道“姿三四郎”新見先生またも勇名を馳す スクール特集版 学園の誇り清水先生 日本科学者技術者名鑑に

2面：注目の我等が修道 父兄、受験生に聞く 生徒の手になる学校法律 敢闘むなし藤岡、村井両君卓球大会惜しくも準決勝で敗れる 音楽科に電蓄を新調か 出来たぞ修道水泳班の風呂 芽がでる野球部 中学欄 “決意は堅い”の新入生 “これではいけない”の在校生 対面式にきく兄弟の声 始業式2-4 阪野喬 入学試験の思い出 1-3 桑原正彦 入学して1-1 岡田恒彦 修中に入学して1-3 山下高 ある車中で感じたこと 僕の花 愛しよう僕らの教室 修道中学校生徒心得 修道バッチに示せわれらのほこり

広島市B C級バレーボール大会 菊門クラブ登場

今回初登場した菊門クラブは、広島同好会ホープ河野徳男及び元早大主将中吉啓治氏を中心とする現役、先輩を持って新しく組織せられたものである。初のB C大会によく実力を発揮し、期待以上の成績を上げたことは今後の修道排球部の前途に大なる光明を投げかけた。

1 試合 広島鉄道局対菊門クラブ 菊門クラブ
2 (14-21、21-19、21-15) 1 広島局 1 試合 (準優勝) 対広島管理局 広管理2 (14-21、21-15、21-15) 1 菊門クラブ 尚当日のメンバーは 前 増田・河野・竹本 中 中村・兼本・砂田 後 岡田・上田・中吉

昭和23年度修道ビッグニュース 新制修道高校発足がトップ

新聞班では初の試みとして約三百枚の用紙で、昭和23年度修道ビッグニュース選出を、13項目に亘って実施した結果、修道高校発足がトップに、十位までこれを採録した。二位はまず順当として

三位に三谷問題があるのは注目に値し、PTA発足がベスト10に漏れたことは、生徒の関心が薄かったことが考えられる。

1 修道新制高校発足 2 新校舎落成 3 三谷教諭退職事件 4 秋山中学教頭勇退 5 長髪許可さる
6 校友会改組新発足 7 電鉄事故に本校生死傷
8 籠球部国体に連続出場 9 第1回復興記念祭挙行 10 生徒数増加一県下一となる

7. 修道新聞 第8号 1949昭和24・7/15 2面

1面：学園復興新段階へ 万全を誇る科学の殿堂 特別校舎起工さる ヒロシマ平和都市法成立
若き世代へ望む広島市長浜井信三 論説 校友会の発足を観て 政治宗教活動に一石 聖書研究クを禁止大阪岸和田高校で 質の向上へ「検定」競争 明るい教科書問題の前途 教育の質の低下 反対の主眼点 微積もなくなる新制高校 低い新高生の意識 “殆ど知らぬ”が現状 総代会も承認
予算無修正で決定戦後派のない読書傾向 雑誌のトップダイジェスト 現職教育研究部生る 1948年度展望 県下高校文化運動の後を探る 成果あげたベンクラブ スクール東西南北 私学国家補助全額削除

2面：再編成その後の歩み 健やかに育つ共学 異性の魅力は漸次減退 堂々優勝西日本高校サッカー大会 全国制覇目指す蹴球部 各部好調・日本興学協会生る 現代学生の風儀をみる 転落する青年層 遊興費稼ぎのアルバイト プロ野球よもやまインタビュー ハワイ遠征間近い先輩竹林地選手 阪神努力こそ上達の秘訣 別当、土井垣、梶岡交々語る 東急 無心の球から子供の吹きを
社会見学①三菱造船進水式 船の誕生カメラでキャッチ 文化ゲートへの幻想—生誕二百年をむかえて 米本三爾 ほか

8. 修道新聞 第9号 1949昭和24・9/25 2面

1面：復興建設にピリオド 新講堂近く着工 年内には完成の予定・特別教室遂に完成 本館をしのぐスマートな容姿・論説 文化の殿堂 広島県公安委員長長田中好一(筆者は本学園理事長)・同窓生めぐりある記③封建的と言われても意志の鍛錬に徹せよ水上連盟大横田勉氏の巻・学生都心分

について第2回新聞週間記念講座 学園に自由を朝日新聞広島支局長荒木秀夫・掘り下げた自由を毎日新聞広島支局長山崎修次郎・一般に開放せよ夕刊ひろしま編集局長内田一郎・学園生活の味の素たれ中国新聞主筆景山稔 まず紳士の教養を新しき門広島大学を探る 校内放送班実現 NHK放送も受信 PTA欄

好奇心の影T・O生 筆峰 青木親善先生 応援団の再建団長に岡田年浪君 山瀧師退職

前理事長正木史郎先生死去

本校前理事長 現同窓会員正木史郎先生にはかねてより胃潰瘍のため市内岩見屋町の自宅において加療中のところ去る9月23日腸閉塞で容態急変御逝去になった。享年55。24日、午後盛大な葬儀が執行された。先生は大正2年本校を卒業後、日本歯科医専に学んだ医家であるが、原爆当時本校の専務理事として活躍、家族の被爆にもかかわらず小使室に寝泊まり残部校舎を整理補修、9月15日の再開までもち来した功績は広島中において原爆後の学校授業のトップをきったものとして高く評価され後西村弁理事長の後を受けて理事長の職に就任、約1年本校再建のため尽力した。

同窓生巡り歩き③封建的と言われても意志の鍛錬に徹せよ 水上連盟大横田勉氏の巻・先ず紳士の教養を新しき門広島大学を探る・学生と新聞について第2回新聞週間記念講座・校内放送班実現、NHK放送も受信・青木親善先生・山瀧師退職・応援団の再建団長に岡田年浪君

2面：第1回座談会 共学に深い関心文化の交流に熱意を・第2学期行事予定 中学欄 校友会新発足 会長に池田志充君 昼は水泳夜は講座 倉橋島臨海学校 数学いろはかるた バタフライも完泳 3の2に凱歌挙がる・校内水泳大会 高校の部1ノ4優勝 市体育大会 排球部の芽出るか優勝実に10数年ぶり 籠球部県代表に 3連覇なる鉾山ルポルタージュ 池田清 我等のホープ校友会長山田喜久夫君の巻 映画黄金について 根津清

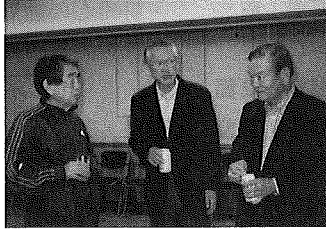
特別寄稿

ロイヤル（0-70）サッカー東西対抗戦に参加して

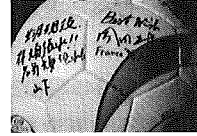
林 孝治（高2回）



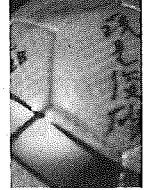
左より、高場利博(9回)、坂井忠昭(14回)、竹下民雄(10回)、林 孝治(2回)



左より、岡野俊一郎様、畔柳信雄様、川淵三郎様



ロイヤル(0-70)サッカー東西大会使用球



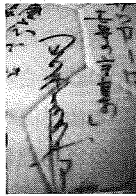
浅尾俊雄様



山下民雄様
岡田正義様



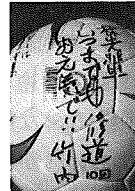
畔柳信雄様
山本 修様



岡野俊一郎様



横山隆雄様
大前卓也様



竹内民雄様



川淵三郎様

本大会は今回で4回目になります。平成22年1月16日(土)天候に恵まれ、国立競技場の芝生は我々を暖かく迎えてくれました。一般社団法人 東大LB会、独立行政法人 日本スポーツ振興センター、財団法人東京都サッカー協会及び株式会社 三菱東京UFG銀行の皆様のお陰で毎年楽しくゲームをさせていただいて感謝しております。

我々の集う主旨は下記の通りです
現在のために：ロイヤルのサッカーは、楽しく、明るく、安全に
未来に向けて：若い世代がサッカーを続けられるように、平和と地球環境を守る努力を
過去を振り返り：苦しい時代にも希望を与え続けてくれたサッカーに「ありがとう」

2010年の世界のサッカーを展望して

南アフリカのワールドカップを世界の人々と共に楽しもう
世界のシニアとサッカーで交流する機会を増やそう
ロイヤルのサッカーマンが、子供達の未来に役立つ活動をしよう
我々の先輩は、戦前に明治神宮外苑の全国大会に出場するのが「夢」でした。明治神宮を目途に苦しくとも毎日の練習に耐えてこられました。「サッカーの聖地」であり「憧れの舞台」であり

ました。戦時中は銃剣を担いで、出陣学徒の壮行式が行なわれておりました。

戦後になり、日韓戦、アジア大会、東京オリンピックが行なわれ、我々に感動を与えてくれました。「日の丸」を胸に、国歌を斉唱して、国立の芝生のピッチに立ちたかったのです。その姿を母に見ていただきたかったのです。

それだけに、我々の世代の下手糞は「国立競技場」に出場できる機会が有難いのです。だから「国立競技場」でないといけない意義があります。観客としてのスタンドではなく、国立の芝を踏む機会に恵まれて感謝しております。これからも継続して実施していただきたいものです。

今年も定員オーバーとなり、残念ながら出場できない人が全国各地に発生しました。

当日9時30分受付、試合開始時間11時15分よりです。参加者を本部にて東日本(赤色)と西日本(白色)に二分して年齢順に各5組(合計10チーム)を編成し、各自一回はゲームに出場できる方式で5試合が行われました。

すべてが一流揃です。場所は日本の首都東京、

グラウンドは日本一の芝生の国立競技場、審判員は岡田正義・上川 徹国際審判員ほか、写真はJリーグのカメラマンで、一番恥ずかしいのは、立派なユニホーム姿の、我々選手団です。珍プレイに迷プレイの連続です。

褒められるのは、フェアプレイでしょうか。

本・会の主旨が「楽しく、明るく、安全に」となっておりますが、我々は長い間の習性としてボールを見ると闘争心が湧いてくるものです。幸いのこと、本大会開始以来怪我人はでておりません。勝負が目的でないため、成績発表もありません。

14時45分に全試合が終わり、交流懇親会が開催されました。

川渕キャプテン（日本サッカー協会 名誉会長）、浅見大会委員長（東大L B会 理事長・日本サッカー協会 顧問）、畔柳会長（三菱東京UFJ銀行）、岡野（日本サッカー協会 名誉顧問）のご挨拶がありました。

修道からはサッカー80周年の時、来校され現役戦で得点された「坂井忠昭さん」（14回）。毎年本大会のお世話をさせていただいております。受付・更衣室・チーム監督・・・すべてを仕切っていただき、上京した田舎者の不安を解消していただいています。何でも相談すれば、助けていただく、最高の応援者です。今年は揃いのライトブルーの防寒コートを着用して、テキパキと指示をしていただきました。

次はいつもはピッチでボールを蹴っておられるのですが本大会ではチームドクターの「高場利博さん」。（9回）毎年、救急班・チーフとして我々を見守っていただいております。高場さんの、お手数を煩わせることがあってはなりません。お世話になるようでは、最初から本大会に出場しないことと決め、平素の訓練に心がけております。

次に、「竹内民雄さん」（10回）。ねんりんピックで、毎年お逢いしております。現役バリバリの第一人者です。福岡が開催地の時でしたか東京のチームと対戦してヒドク叩かれました。昨年は千葉県で若山さん（14回）と二人で出場し、金メダルを持って帰られました。衰えを見せない現役です。いつも、必ず得点に絡んでくる実力者です。毎年、国立のゴールに得点を決めておられます。

この方々が東京で活躍していただいております。このことで、「修道」の二字は東京で広く通用しております。サッカーに関係した人々なら、必ず「アッ修道か」「強かったナア」と答えていただき誠に有難いことだと感激しております。

同窓のお陰で本当によくいただき感謝し、厚くお礼申し上げます。

交流懇親会中に下記の方々に本大会で使用したボールにサインをいただきました。

川渕 三郎（日本サッカー協会 名誉会長）

「夢があるから強くなる」

浅見 敏雄（日本サッカー協会 顧問、東京大学・日本大学 名誉教授、東大L B会理事長）
（浦和に勝たないと全国優勝はできないと言われていた浦和OB）

畔柳 信雄（三菱東京UFJ銀行 取締役会長）
「チームワーク」

岡野俊一郎（日本サッカー協会 名誉顧問）
「サッカーは世界の言葉」

山本 修（東大L B 神奈川四十雀サッカークラブ所属、広島四十雀サッカークラブとの定期戦の対戦相手）
（湘南高校に勝たないと全国優勝できないと言われていた湘南OB）

横山 隆雄（慶応で森・森田・吉田とプレイしました。修道はキツイ）
（横山隆一の漫画、福ちゃんの主人公、元日本のMF）

大前 卓也（僕も慶応で修道の三人と一緒にプレイをしていた）
（東京都大田区サッカー協会会長）

竹内 民雄（修道10回）
「林 先輩 いつまでも、お元気で」

山下 民生（元広島四十雀サッカークラブのチームメイト、現在東京四十雀サッカークラブ所属）
「生涯現役 林 頑張り、広島 がんばれ」

岡田 正義（国際審判員）
（Best Wish）（France98）

サインを頂いた皆様方に非常に感謝しておりますと共に、ご厚礼申しあげます。このボールは大切に当家の、お宝として保存いたしております。

本大会がこれからも継続しますように、そして、先輩の皆様のためにも、生涯スポーツとして、80歳以上の東西対抗戦が世界で始めて開催され、継続されることを、お祈りしております。

特別寄稿

第10回全国シニア大会に出場して

林 孝治 (高2回)

第10回シニア (70歳以上) サッカーフェスティバルは2010年5月28日(金)より5月30日(日)まで静岡県藤枝総合運動公園サッカー場外3会場で行なわれました。

第一日目に計らずも、千葉 (60) の「若山様」も同じグラウンドで試合があり、東京、中国連合の3チームが同時に、お逢いできる機会に恵まれて、写真撮影に好都合でした。残念ながら、広島選抜 (60) に出場しました「篤様」のみ別のグラウンドで兵庫戦が開催され1枚の写真に納まる事ができませんでした。

一日目の全試合が終了した夕刻に、全国の選手、役員が一同に集まり、レセプションが実施されました。

昨年の主催県の広島は歓待の対応が気に入られて、感謝されると共に、今後の友情をも深め、楽しい時間をすごすことができました。

今年より70歳以上は一日一試合、16チームを4グループに分けて、リーグ戦を行なう。60歳以上

は、更に、各グループ1位が (計4チーム) が決勝トーナメントに進出する。

(勝点合計の多いチームを上位として順位を決定する) 勝点は勝利3点、引き分け1点、敗戦0点のように競技方法が決められました。

戦績は下記の通りですが、修道OBを三人揃える東京が圧倒的に強くて、中国連合もこれから、メンバーを揃え、練習を重ねて出場しないと、非常に広島としても、ハズカシイこととなります。

60歳以上は『若山様』の率いる千葉が全員をよく束ね東京に競り勝ち、名門、埼玉に楽勝して、優勝をはたしました。なぜか、「篤様」の所属した広島県選抜は『銅』(メダル) にもならず、グループでも最下位の成績で誠に残念な結果でした。

23年 (第11回) は岡山が主催県と決定しております。隣の県ですから、練習を重ねて好成績の実績を残したいものです。

多くの修道BOYの出場を、お待ちしております。



前列左より、高瀬 正則 (高9回)
森田 哲朗 (高9回)
高場 利博 (高9回)
後列左より、竹内 民雄 (高10回)
林 孝治 (高2回)
若山 待久 (高14回)

敬称略



左 篤 正悟 (高17回)
右 林 孝治 (高2回)

2010年度 第10回全国シニア（60歳以上）サッカー大会組合せ 1次ラウンド（5月28・29日）

Aグループ

| | | 浜 松 | 長 野 | TOMATO | 東 京 | 順 位 |
|-----|----------------------|------|------|--------|------|-----|
| A 1 | 浜松快堂クラブ（開催地／静岡） | | △0-0 | ○6-0 | ×0-1 | 2 |
| A 2 | 長野県60（信州選抜）（北信越2／長野） | △0-0 | | △1-1 | ×0-3 | 3 |
| A 3 | TOMATOシニア60（北海道2） | ×0-5 | △1-1 | | ×0-2 | 4 |
| A 4 | 東京都シニア60（関東3／東京） | ○1-0 | ○3-0 | ○2-0 | | 1 |

Bグループ

| | | あしがる | 埼 玉 | 静 岡 | 函 館 | 順 位 |
|-----|---------------------|------|------|------|------|-----|
| B 1 | あしがるサッカー富山（北信越1／富山） | | ×0-4 | ×0-1 | △0-0 | 4 |
| B 2 | 埼玉シニア60（関東2／埼玉） | ○4-0 | | ○1-0 | ○3-0 | 1 |
| B 3 | 静岡選抜60（東海／静岡） | ○1-0 | ×0-1 | | ○1-0 | 2 |
| B 4 | 函館四十雀FC60（北海道1） | △0-0 | ×0-3 | ×0-1 | | 3 |

Cグループ

| | | 高 知 | 青 森 | 広 島 | 兵 庫 | 順 位 |
|-----|--------------------|------|------|------|------|-----|
| C 1 | 高知昭和OB会（四国／高知） | | ○1-0 | △1-1 | ×0-1 | 2 |
| C 2 | 青森シニア60（東北2／青森） | ×0-1 | | ○1-0 | ×0-1 | 3 |
| C 3 | 広島県選抜（中国／広島） | △1-1 | ×0-1 | | △1-1 | 4 |
| C 4 | 兵庫県シニア選抜60（関西1／兵庫） | ○1-0 | ○1-0 | △1-1 | | 1 |

Dグループ

| | | 岩 手 | 大 阪 | 鹿児島 | 千 葉 | 順 位 |
|-----|--------------------------|------|------|------|------|-----|
| D 1 | 岩手60（東北1／岩手） | | ×0-0 | △1-1 | ×0-1 | 4 |
| D 2 | NPO法人大阪フットボールクラブ（関西2／大阪） | ○6-0 | | ○1-0 | ×0-1 | 2 |
| D 3 | 鹿児島元老FC（九州／鹿児島） | △1-1 | ×0-1 | | ×0-4 | 3 |
| D 4 | 千葉四十雀サッカークラブ60（関東1／千葉） | ○1-0 | ○1-0 | ○4-0 | | 1 |

決勝トーナメント

| | | | | | | |
|----------------|--|-------|--|--|--|--|
| 東京都シニア60 | | 0 | | | | |
| 千葉四十雀サッカークラブ60 | | 1 | | | | |
| 埼玉シニア60 | | 0 PK3 | | | | |
| 兵庫県シニア選抜60 | | 0 PK1 | | | | |

優勝

シニア（70歳以上）サッカーフェスティバル組合せ 2010年5月29日(金)～30日(日)

Aグループ

| | | 熊 本 | 静 岡 | 北海道 | 東 北 | 順 位 |
|-----|--------------------|------|------|------|------|-----|
| A 1 | 熊本オールディッカーズ（九州） | | △1-1 | ○2-1 | ○2-1 | 2 |
| A 2 | 静岡県選抜70（開催地） | △1-1 | | ○6-0 | ○1-0 | 1 |
| A 3 | 北海道七十雀サッカークラブ（北海道） | ×1-2 | ×0-6 | | ×0-1 | 4 |
| A 4 | 東北70（東北） | ×1-2 | ×0-1 | ○1-0 | | 3 |

Bグループ

| | | 湘 南 | 岐 阜 | 北信越 | 宮 城 | 順 位 |
|-----|---------------------|------|------|------|------|-----|
| B 1 | 湘南ベガサスSC（関東） | | ○3-1 | ○2-0 | △0-0 | 1 |
| B 2 | 岐阜県選抜（東海） | ×1-3 | | △0-0 | ×0-1 | 3 |
| B 3 | 北信越ロイヤル連合（北信越） | ×0-2 | △0-0 | | ×0-1 | 4 |
| B 4 | 宮城フェニックスサッカークラブ（東北） | △0-0 | ○1-0 | ○1-0 | | 2 |

Cグループ

| | | 埼 玉 | えひめ | 名古屋 | 兵 庫 | 順 位 |
|-----|-------------------|------|------|------|------|-----|
| C 1 | 埼玉シニア70（関東） | | ○4-1 | ○4-1 | △1-1 | 1 |
| C 2 | えひめ四十雀FC（四国） | ×1-4 | | ×1-5 | ×0-2 | 4 |
| C 3 | 名古屋500クロウズクラブ（東海） | ×1-4 | ○5-1 | | ×0-2 | 3 |
| C 4 | 兵庫県シニア選抜70（関西） | △1-1 | ○2-0 | ○2-0 | | 2 |

Dグループ

| | | 東 京 | 京 都 | 清 水 | 中 国 | 順 位 |
|-----|-----------------------|------|------|------|------|-----|
| D 1 | 東京ロイヤル（関東） | | ○4-0 | ○2-0 | ○4-0 | 1 |
| D 2 | NPO法人京都暁フットボールクラブ（関西） | ×0-4 | | △0-0 | ×1-4 | 4 |
| D 3 | 清水ロイヤル（東海） | ×0-2 | △0-0 | | △1-1 | 3 |
| D 4 | 中国連合（中国） | ×0-4 | ○4-1 | △1-1 | | 2 |

人物往来

サッカーが光をくれた

下村 幸男氏 (高校2回)

修道高校(広島市中区)のグラウンドで、真っ黒に日焼けした中学生がサッカーボールを追いかけている。「あの子はスピードあるね。」舞い上がる砂ぼこりにちょっと顔をしかめながら、一つ一つの動きに目を凝らす。卒業から半世紀以上たつが、下村幸男さん(78)＝府中町＝は月に数回、母校へ足を運ぶ。「ただの楽しみの一つじゃよ」。口ぶりは素っ気ないが、原爆のせいで闇に覆われかけた人生を、サッカーが照らし続けている。

13歳、旧制修道中2年のときだった。8月6日朝、広島市役所に近い雑魚場町(現・中区)で建物疎開作業に出ていた。前夜から耳が痛み、作業を休んで病院へ行こうとしたが、母に「友達は頑張っているんだから行くだけでも行きなさい」と諭された。

少し遅れて市役所のところに到着すると、同級生は現場へすでに向かっていた。体調が優れないこともあり、木陰で弁当の番をした。30分ほどたった時、青い光が上空に見えた。とっさに頭を抱えて丸くかがんだ。爆心地から1キロ。そっと目を開けると、暗闇で何も見えない。「地獄にきたのかな」と思った。

母のことが気になり、自宅がある鷹匠町(現・中区)方面へ目を向けた。真っ暗で何も見えない。ぼうぜんとした。徐々に明るんできた南の方角へ逃げた。霞町(現・南区)の陸軍兵器補給廠の辺りで、突然嘔吐した。「真っ黒いものを胃がひっくり返るくらい吐き、動けなくなった」。黄金山(同)の防空壕に身を寄せ、眠り続けた。

体調が回復した9日朝、自宅へ向かった。道すがら、多くの死を見た。電車のつり革にぶら下がったままの人、馬に乗って横倒しになっている軍人……。例えようのないほど強烈なおいがした。

自宅近くまで来て、地面に横たわる半焼けの遺体が目に入った。近所のおばさんだとすぐわかった。足がすくむ。でも、家にたどり着くには遺体をまたがねばならない。「何度も近づこうとした

が、どうしても無理だった」。母の安否も確かめられぬまま、その場を離れた。

現在の三次市に疎開していた親類のもとへ身を寄せた。数日後、仕事に出たきり行方がわからなかった父と再会できた。母と祖母が自宅跡から白骨で見つかったと聞かされた。長兄は避難先で亡くなったという。

不思議と涙は出なかった。翌春まで三次の日影館中(現・県立日影館高)で過ごしたが、広島頃の友人の消息を思うこともない。母の墓参りもしたが、何も感じない。「理解しにくいかもしれないが、あの時だけ思考停止していたみたい」と振り返る。

46年3月、広島市へ戻って父と暮らした。食糧難で空腹に悩んだ。食べ物と言えば湯に米粒がばらばらと浮いたおかゆぐらい。「動くのもたいがい(しんど)かった」。修道中に復学したが、何もすることがなく、自然と校庭に足が向いた。サッカーの練習に励む先輩たちが見えた。

戦前からサッカーが盛んだった広島で、修道中は県立広島一中(現・県立広島国泰寺高)、広島高等師範付属中(現・広島大付属高)と並ぶ全国屈指の強豪校の一つだった。三校対抗戦に向け、汗を流す先輩の姿に心引かれた。

「自分も伝統を引き継いで、何か残したい」。48年、蹴球部に入ることを決めた。

最初はフォワード(FW)だったが、腹が減って機敏に動けず、挫折した。「動かなくて済むゴールキーパー(GK)をやらせてくれ」。仲間に頼み込んだ。後の名GKの第一歩だった。

下村さんにとって、原爆投下や敗戦で受けたショックは「目標の喪失」だった。家も家族も失い、将来が見通せなくなった不安をサッカーで払拭したかった。自分の内にあるエネルギーを発散するのに喜びを感じ、練習が休みの日も一人、グラウンドに出た。当時は専門知識を持った監督やコーチがいなかったが、我流の練習で、ジャンプ力やキック力を磨いた。

みるみる頭角を現した下村さんは、卒業後に進んだ東洋工業(現・マツダ)在籍中、日本代表に選ばれ、56年のメルボルン五輪に参加した。現役

引退後も日本代表の監督を務めるなど、走り続けた。

決して、大志を抱いて始めたサッカーではなかった。まして、目標は全国制覇でも日本代表入りでもなかった。

戦前は軍人になり、国のために尽くすことが生きがいとたたき込まれてきた。特攻隊員として国のために命をささげると信じていた元軍国少年。どう生きるべきかわからず、無気力に過ごした戦後の日々は思い出したくない。

サッカーで手にした数々の栄光と出会いを思えば、「恵まれた人生」だったと胸を張れる。だからこそ、どんな暑い日でも下村さんは母校のグラウンドに足を運び続ける。

「次々に目標を持たせ、膨らませてくれたサッカーに巡り合っていなかったらどうなっていたか……。幸運だった」。述懐が、私の耳に残った。

(2010. 8. 3 朝日新聞)

70年卒業組再び巣立ち

「強烈だった青春を共有」

広島市中区、修道高の1970年春の卒業生が15日、学園紛争の影響で見送られた学年全体での合同卒業式を母校で開いた。バリケード封鎖や機動隊出動などを経験した激しい時代を振り返り、青春の舞台となった学びやに感謝した。

卒業生の約3割にあたる約130人が出席した。会場のスクリーンに当時の新聞記事が映し出され、ビートルズのヒット曲が流れると、一気に40年前にタイムトリップ。発起人の一人で、司会役の会社経営岡本祐一さん(58)呉市＝「忘れ物を取りに行こう」と呼び掛けた。

「補習授業」もあり、恩師の田中博司さん(75)＝佐伯区＝が英語を指導。当時の学校を「騒然としていたが、生徒も教員も真剣に向き合っていた。自分もいい勉強になった」と懐かしんだ。

元生徒たちが高校3年生だった69年、学園紛争は全国各地に広がり、修道高にも飛び火した。定期試験や受験教育に異議を唱える生徒が校舎をバ

リケード封鎖し、機動隊も出動した。翌70年3月の卒業式は、9クラスの約450人が各教室で卒業証書を受け取る「分散卒業式」となった。

40年を経て、全9クラスの代表が現職の田原俊典校長(54)からあらためて卒業証書を受け取った。最後は、当時流行したテレビドラマの主題歌「若者たち」を合唱して締めくくった。

岡本さんは「学園紛争に対する受け止めは、同級生の間でも温度差はあるが、強烈な経験を共有したことは確か。今後もきずなを深めたい」と話していた。(2010. 8. 16 中国新聞)

30年連続で金仏壇の製造販売日本一

三村 邦雄氏(高校18回・㈱三村松社長)

慶応元年(1865年)創業の日本最大規模の仏壇メーカー。1979年から30年連続で純金仏壇の製造販売実績(宗教工芸新聞調べ)全国一位を達成した。「伝統的工芸品であるお仏壇造りにこだわりながら、常に新たなことにチャレンジしていきたい」。業界他社に先駆け、広島と九州などに11工場で一貫生産体制を敷き、効率化とともにコストを抑制。小売直販部も充実させ、日本最大級の「神辺グラン仏壇館」など10店舗を展開する。1月に東京で開かれた全国伝統的工芸品仏壇仏具展では、出品したシンプルな仏壇が新デザイン部門で日本伝統工芸士会会長賞などを受賞。「仏縁を喜び、おかげさまと手を合わせ感謝するところがお仏壇です。不安な時代だからこそ、心の安らぎが求められるのです」と言う。今年で創業145周年。伝統と革新の調和をテーマに日夜、精進する。

(2010. 3. 18 広島経済レポート)

広島修道大学学長に就任

市川 太一氏(高校18回・広島修道大学学長)

4月1日付で2度目の学長に就任する。48歳の若さで就いた前回は、「プレーイングマネージャーを目指し、自分も積極的にさまざまな企画を立案・実施してきた」。任期が終わって8年間の一教員の経験を経て、「教職員が『大学をこうしたい』という提案を自発的に出せるような修大カルチャー

を創造し、次の世代につなげていくのが自分の役割」と語る。一方で、98年に立ち上げた大学連携組織「教育ネットワーク中国」（27の大学・短大などが加盟）の代表を務め、高校と大学の連携、地方公共団体と大学が連携して運営する生涯学習講座、単位互換、教職員の研修などにも取り組む。「地元の大学ならではの人材育成や教育資源を生かした地域貢献を通じ、修大の存在をアピールしたい」。好きな言葉は最澄の忘己利他（己を忘れて見返りを求めず他人のために尽くす）。

(2010. 3. 25 広島経済レポート)

広島ガス株式会社社長に就任

田村 興造氏（高校22回・広島ガス㈱代表取締役社長執行役員）

4月1日付で代表取締役会長に就いた深山英樹社長に代わり、広島ガスの社長に就任した。創立100周年を迎えた09年10月、20年までの経営ビジョン「Action for Dream 2020」を策定。その実行元年に、グループ経営体制の強化と充実、事業環境の変化に迅速に対応するため2代表制とした。「入社以来ほとんどの時間を現場で過ごした現場人間。現場の前向きで明るい、元気なパワーを結集させたい」と言い、「天然ガスは技術的完成度も高く、供給安定性、経済性に優れ、低炭素社会の実現に最も現実的なエネルギー。その拡販をビジョン達成の柱と位置付けている」。家庭用は、燃料電池「エネファーム」、太陽光発電など環境性に優れた機器を展開。業務用も、天然ガスで顧客先の二酸化炭素（CO₂）削減を訴求。社会貢献活動にも力を入れ、地域社会から信頼される企業グループを目指す。座右の銘は、心は「百術は一誠に如かず」、行動は「雨だれ岩をうがつ」。

(2010. 4. 29 広島経済レポート)

広島市経済局長に就任

棚多 展義氏（高校22回・広島市経済局長）

4月1日付の人事で市経済局長に就任。直前の2年間は区長として安佐南区の街づくりに携わった。

その経験から「広島の街はよく元気がないと

言われますが、地域で生き生きと活動している人はたくさんいます。そういった方々に知恵を頂き、地域のやる気を生かし、経済活性化につなげたい。何よりも現場を重視。「外に出て、実際に顔を突き合わすことでヒントを得られ、互いの信頼感も増す。区長時代にも地域の方々にお世話になりました」。農林水産畑が長く、農工商連携による新事業創出や、広島ならではの魅力ある産品を認定する「ザ・広島ブランド」の全国PRにも力を入れる。座右の銘は人と人のつながりを大切にする「和」。「広島人ですから広島弁でざっくばらんに経営者の方々と語り、施策の実行に汗を流し、ご一緒に広島を元気にしたい」

(2010. 5. 27 広島経済レポート)

ナイトクルージングで広島湾のにぎわい創出

山本 一隆氏（高校14回）

（広島市観光振興ネットワーク会議会長、㈱中回新聞社代表取締役副社長）

県や市、広島商工会議所、広島観光コンベンションビューローなどでつくる市観光振興ネットワーク会議が瀬戸内海の振興などを目的に、広島湾岸の夜景を船上から楽しむ「広島湾ナイトクルージング」に7月19日から実証実験で取り組む。「観光客の滞在時間の延長や宿泊促進を重点に、広島湾の夜のにぎわいづくりを検討してきた。宮島の五重塔や廿日市の広島ガスのガスタンクのライトアップなどの協力を仰ぎ、船には灯光機を設置する。冬の風物詩となった平和大通りのドリミネーションのように、夜の観光スポットになれば」。瀬戸内海汽船の旅客船「銀河」で午後6時50分、広島港を出発。宮島、広島マリーナホップの観覧車、海田大橋のライトアップなどを海上から楽しんでもらい、約2時間で帰港する。「海の玄関口のにぎわいづくりにつなげたい」。期間は8月29日まで。

(2010. 7. 1 広島経済レポート)

広島修道大学五十周年記念式典・祝賀会 11月6日(土)開催 「広島修道大学五十年史」・「50周年記念映像」等刊行

広島修道大学50周年記念事業推進室 仲井正美(元事務長・大商1回)

修道学園はその源を浅野藩校に置く。浅野藩の藩校が「講学所」として始まったのは、享保10年(1725)11月4日であり、今年はそれから285年目の記念すべき年であります。

また、広島修道大学の歴史は、昭和27(1952)年夜間の修道短期大学商科(第二部)を開設したことに始まる。多くの働きながら学ぶ勤労学徒の向学心に応えるためのものであり、直ちに実際に役立つ学問を、という姿勢があった。昭和31(1956)年修道短期大学商科第一部が開学、昭和35(1960)年広島商科大学(現広島修道大学)が開学した。

その後、昭和48(1973)年人文学部増設、大学名を「広島修道大学」に改称、昭和49(1974)年観音から沼田キャンパスに総合移転。昭和51(1976)年法学部、平成3(1991)年経済科学部、平成14(2002)年人間環境学部をそれぞれ増設、平成16(2004)年短期大学部を廃止し、現在に至っています。

このように今年には広島修道大学開学50年目の記念すべき年であります。

大学では、キャッチコピーを「つなげたい。人と未来と広島を。」とし、また50周年記念ロゴマークを作成し、イベントとして次のような行事を行ってきました。

つなげたい。人と未来と広島を。
フラワーフェスティバルさつきステージ、
ラッピング電車など多彩

主なイベント

○「広島修道大学 この50年」 図書館展示
2008/4~7 2009/4~5 2010/4~5

○ひろしまフラワーフェスティバル 広島修道大学 さつきステージ開催

2008/5/3~5/5 2009/5/3~5/5 2010/5/3~5/5

○吉田拓郎歌碑建立 2008/8/2 本学ハーモニーロードに建立、除幕式には本人出席

○50周年記念カウントダウン時計除幕式 2008/11/6 本学図書館前

○50周年記念事業プレシンポジウム 人と未来と広島経験—平和と国際協力を考える
大島賢三(前国連大使)ほか 2008/11/21 本学7号館

○50周年記念カウントダウン時計前コンサート 8回開催

○ラッピング電車運行 広島駅~西広島 広島駅~広島港 2009/4~2010/12

○修大生の「未来HIROSHIMA」トークセッション 2009/6 本学7号館

○広島修道大学50周年記念 少年サッカー大会開催
(韓国大邱市新岩小学校チーム招聘)

2009/8/28~8/31 広島広域公園球技場

○夢折り鶴プロジェクト 80メートルの巨大折り鶴でギネスに挑戦 2009/8/29~8/30
ギネスブック登録

○広島修道大学50周年記念 テレビ特別番組
~今、あの人に会いたい~青春と友情のキャンパス 2009/11/23 13:55~14:55 中国放送 RCCテレビ放映

シンポジウム、「修道」その軌跡と展望開催

本学園の開学記念日は、11月4日であるがウイークデーのため11月6日（土）に記念式および祝賀会等が行われる。大学同窓会は11月6日（土）午後7時から開催され、恒例となっている全国ゴルフ大会は大学記念式典等のため今年は中止される。

記念式典以外では、「広島修道大学五十年史」及び写真を中心とした「目で見る修大50」、さらに卒業生の活躍を紹介する「修大人の飛躍」を刊行、大学の歴史を映像でつづる「広島修道大学50周年記念映像」の制作も計画されている。

主な50周年記念事業

- 記念式典・記念祝賀会 11月6日（土）
- 学術シンポジウム テーマ：「修道」その軌跡と展望（案） 11月6日（土）
- 「広島修道大学五十年史」刊行 11月
- 「目で見る修大50」刊行 11月
- 「修大人の飛躍～多彩なる修才たち」刊行 11月
- 「広島修道大学50周年記念映像」制作 11月



第34回広島修道大学大学院同窓大会

広島修道大学大学院同窓会 副会長 慶徳 忠良 (大院法12期)

平成22年6月26日(土曜日)ホテルJALCITY広島において、第34回広島修道大学大学院同窓大会を開催しました。

午後5時から同窓会定例総会を行い、事業報告・決算報告・事業計画・予算案等の提出議案は無事承認され滞りなく終了しました。

5時30分から大学院同窓会の特色である記念講話を行いました。

今年は元広島修道大学大学院経済科学研究科長時政勲先生に「排出権取引と経済学」と題された講話を賜りました。

恩師・ご来賓の皆様にもこの記念講話に列席していただいておりますが、今年も市川新学長はじめ

恩師の先生方には記念講話開始時間に遅れることなくお集まりいただきました。

記念講話終了後、記念撮影を経て懇親会と進んでまいりました。

懇親会には林理事長もご来場いただき、来賓・恩師・同窓生の総勢44名という小さな所帯ですので和気藹々のうちに話が弾みます。進行係としては気を使わない懇親会で、懇親会のイベントとしては、テーブル毎の会話の花を折らない程度にその年に還暦を迎えられる出席同窓生の紹介をしております。

予定時刻の午後8時となり散会しました。



学園だより

名誉学園長に浅野長孝氏が就任されました



2010年4月1日から、学校法人修道学園名誉学園長に浅野長孝（ながたか）氏が就任されました。浅野長孝氏は、本学園の淵源である「講学所」を

創設した広島浅野家の子孫にあたられ、現在財団法人芸備協会会長を務めておられます。

このたび、広島浅野藩藩校を源とし、285年の歴史を継承していることを標榜する本学園の象徴的存在として、学園発展のためご支援をいただくこととなりました。

修道の総合体育館に掲げてある、「率性之謂道」「修道之謂教」の額は、修道中学校名誉総理事長を務められた浅野長武（ながたけ）氏の揮毫によるもので、浅野長孝氏の祖父にあられる方です。

芸備協会について、修道学園史に以下の記述があります。

「明治12、3年のころ在東京の県有志が「後進

学生を誘導し、我が郷永く濟々たる多士の輩出を期せん」として創めたものである。13年8月23日夜、麻布区我善坊町の山田養吉宅に会合した同士によって決定した。」

【修道学園史（昭和53年10月10日発行）抜粋】

山田養吉（十竹）先生は、第12代藩主浅野長勲（ながこと）公に抜擢されて、明治14年修道学校の校長に就任、以後学校を継承して私学修道の礎を築いた人であります。協会は学資の貸与や寄宿舎の運営を事業目的とし、浅野長勲公からも運営資金として多額の寄付をいただいたとの記述もあり、郷土からの学生を支援される多くの方々の姿が思い起こされます。下瀬火薬の発明者である下瀬雅允は貸与学生の一人であったと言われてい

ます。現在協会は、東京都港区虎ノ門にあり、設立当初の事業目的である、広島県出身学生への育英事業を行っています。

浅野長孝名誉学園長からも希望者は大いに活用していただきたいとお話をいただいています。

修道中学校・修道高等学校285年祭(文化祭)ご案内

例年「文化の日」の前後に、学校行事として文化祭を開催しておりますが、2010年は10月30日（土）及び31日（日）の2日間にわたり開催いたします。

修道の文化祭は、2003年から創始以来の周年を呼称にして「〇〇年祭」と呼んでおり、今年今年祭は、1725年の講学所の創設から数えて285年目にあたることから285年祭と呼ばれております。

年祭では、文化班、各学年、クラス、一般参加団体が様々な活動発表や催し物を企画、実施する

ほか、歴史あるクラスマッチの「修道杯」の決勝トーナメント（サッカー・バスケット）も行われます。

また毎年、藩校からの貴重な遺品を保存、展示しております記念品室の開放のほか、修道学園史研究会（会長 島 眞實 高校7回）が一般参加団体として企画展や講演会を開催されており、今年も次の予定で講演会が開催されます。母校の文化活動をご高覧いただきたく、万障お繰り合わせのうえ、是非ともご来校くださいますようご案内い

たします。

日 時：2010年10月30日(土) 10:00~11:00
10月31日(日) 11:00~12:00
時間は多少前後することがあり

ますので、ご諒承ください。

会 場：修道中学校・修道高等学校
本館3階 大会議室

演 題：「修道がなぜ藩校の流れを汲んでいる

と言えるのか」

講 師：修道学園史研究会 会長

畠 眞 實 氏

(元修道中学校・修道高等学校校長)

お問い合わせ：修道中学校・修道高等学校

事務長 田中 佳樹宛

TEL 082-241-8291 (内線282)

見よや修道魂を 全国大会に出場した班紹介

【2009.9~2010.3】

《水泳班》

第64回国民体育大会(水球の部) 出場 高校7名

《陸上班》

第64回国民体育大会出場 高校1名

第40回ジュニアオリンピック陸上競技大会出場

中学1名

第3回日本ユース陸上競技選手権大会出場

高校6名

《テニス班》

第32回全国選抜高校テニス大会出場 高校9名

《スクールバンド班》

第57回全日本吹奏楽コンクール出場

中学・高校55名

第33回全日本アンサンブルコンテスト出場

中学8名

《囲碁班》

第4回全国高校囲碁選抜大会出場 高校3名

[400m 2位 茅 田 昂

100m 3位 山 縣 亮 太]

《ワンダーフォーゲル班》

平成22年全国高校総体出場 高校4名

[男子団体 3位]

《テニス班》

第37回全国中学生テニス選手権大会出場

中学10名

《少林寺拳法班》

第37回全国高等学校少林寺拳法大会出場

高校7名

《弓道班》

第7回全国中学生弓道大会出場 中学2名

《将棋班》

第46回全国高等学校将棋選手権大会出場

高校3名

《放送班》

第57回NHK杯全国高校放送コンテスト出場

高校1名

【2010.4~2010.8】

《陸上班》

平成22年全国高校総体出場 高校12名

出場した生徒と引率の先生には、同窓会より激励費を支給いたしました。

事務局だより

○同窓会名簿の販売について

修道学園（中・高）同窓会会員名簿第35号を1冊5,500円（消費税含む）で販売しております。

販売窓口：

〒730-0055 広島市中区南千田西町8番1号
修道中学校・修道高等学校 事務室内

同窓会事務局

TEL 082-241-6686

E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp

※郵送をご希望の場合、別途送料がかかりますので、同窓会事務局にお問い合わせください。

○同窓会名簿の訂正について

修道学園（中・高）同窓会会員名簿第35号の訂正をお願いいたします。

（P170）高校9回 浅尾 宰正 様

【正】730-0833 広島市中区江波本町15-8
082-294-2666

【誤】736-0001 安芸郡海田町砂走11-40
082-823-2581

（P335）高校30回 物故者 山村 祥公 様

【正】山村 祥公

【誤】山村 祥松

訃 報

松本 悦朗氏（元修道中学校・修道高等学校教諭）

平成22年4月1日 逝去 享年74歳

氏は昭和31年4月1日に修道学園教諭として就任。41年にわたり保健体育科の教鞭をとられた。バレーボール班を全国大会出場に導くなど、生徒の育成・指導にご尽力いただいた。

川本 幸生氏（修道学園同窓会連合会幹事：大商17回）

平成22年5月11日 逝去 享年53歳

氏は平成5年4月から修道学園同窓会連合会の幹事を務められ、同窓会活動にご尽力いただいた。

林 高生氏（元修道中学校・修道高等学校教諭）

平成22年6月6日 逝去 享年81歳

氏は昭和24年4月1日に修道学園教諭として就任。42年にわたり数学科の教鞭をとられた。丁寧で解りやすい授業をされ、生徒の育成・指導にご尽力いただいた。

心からのご冥福をお祈りいたします。

会報誌へのご寄稿、支部、同期会などのご報告につきましては、ご多忙にもかかわらずご協力いただき誠にありがとうございました。今後も会報誌への記事を募集いたしておりますので、積極的に原稿をお寄せいただきますようお願いいたします。次回の発刊は平成23年3月の予定です。